
異世界で幼女化したので養女になったり書記官になったりします 番外編置き場

瀬尾優梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<https://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界で幼女化したので養女になったり書記官になったりします
番外編置き場

【Nコード】

N8704CQ

【作者名】

瀬尾優梨

【あらすじ】

平凡な大学生の私、水瀬玲奈は、気付いたら異世界にいました。
あれ？ ここ、どこ？ え？精霊と契約を結んじゃった？ んん？
体が縮んでない？

わけも分からず異世界に召喚された女子大生が、図太くたくましく、

無駄にフラグを立てつつ、元の世界に戻るために奮闘します。

アルファポリス レジーナブックス様より書籍化します

本編を削除して、番外編のみ残っています

その都合で、書籍内容と番外編内容で若干の差が生じることがあります

ある少年の日記より抜粋 (前書き)

少年が誰なのかは、一文目で分かると思います。

ある少年の日記より抜粋

某月某日

なんか変なのがうちに来た。やたらちびっこくて地味な顔立ちの少年……だと思ったら少女だった。どうやら、父上が領土巡回中に見つけて拾ってきたらしい。身寄りのない八歳程度の女の子らしい。年齢すら不定とは……どこかの名家の私生児ってところか。それにしては大人しいし、俺に対しても頭を下げてきた。変なやつ。

父上が近いうちに、養子届けを出すそうだ。つまり、俺の妹になるわけだ。

妹ってものの扱いはなんとなく分かってるし、まあなんとかかなかな。

……仲よくなれたら、いいな。

某月某日

レーナは変だ。すごく変だ。

なんだ、あいつ。本当に八歳なのか？ 頭よすぎだろう？

字は読めないし書けない。そこらの子どもでも知っているような一般常識は欠落しているくせに、話すことはいちいち正論で、わけわからない。

さっき、試しにレーナに百ゴールド硬貨を見せてみた。百ゴールドといたら、レーナくらいの年の子どもでは決して手に入らない。

でもレーナは、百ゴールド硬貨を見ても「きれいですね」で終わらせた。その後で価値を教えると驚いていた。やっぱりおかしい。どんな貧民層の子どもでも、ゴールド硬貨の違いくらいは分かるはずだ。

……あいつ、一体何なんだ？

某月某日

……気にくわない。

俺の義妹レーナ。最近あいつを見るとイライラする。

理由は分かっている。あいつは、俺よりずっと頭がいい。最初は字の読み書きでさえできなかったというのに、あっという間にいろいろなものを覚えて、お茶会では一丁前に客人に挨拶して。

父上はレーナがすっかりお気に入りになっている。母上も、レーナのためにあれこれ買い与えようとしている。

俺が、のけ者じゃないか。

みんなみんな、レーナ、レーナって。あいつばかりちやほやされて。

……でも、レーナが笑うと俺もなんとなく安心する。でも、やっぱり（この後、何度も書き直されており解読不可）

某月某日

レーナが書記官の仕事に興味を持っている。

探りを入れよう。

もしものことは、起きてほしくないけれど。

日付なし

レーナ

何だ

あれは、俺は

あいつは、レーナは（この後、字の乱れが激しく、解読不可）

某月某日

嫌いだ

レーナがいなければ

あいつがいなければ

俺は

俺が

某月某日

レーナがいなくなった。

名前と性別を偽って、王都に行った。

俺があんなことを言ったから。

俺は悪くない。あいつが、怪しいんだ。おかしいんだ。

悪くない。

日付なし

楽しくない。

日付なし

これを書くのもだるい。屋敷がさみしい。

体が重い。

日付なし

あいつ、生きてる？

日付なし

俺のせい？

日付なし

あいつ、帰ってくる。

書記官になってる。

俺、どうしたらいい？

某月某日

レーナが帰ってきた。これをまともに書くのも久しい。

やっぱりレーナはおかしかった。王都で、死にかけてたのに、あんなにけるってしている。馬鹿だろ。

俺が、あんな酷いことを言ったのに、笑ってた。俺の話、聞いてくれた。

あやまれて、よかった。

某月某日

今日は領内の祭だった。レーナがいろいろな味のパンを作っていた。まさか、パン生地に食材を練り込むとは思ってもなかったが、見た目の割においしいものばかりだった。それを言ったら、あいつすごい喜んだ。

メモ 俺の敵、髭カールのジジイ。覚えてろ。

某月某日

認めたくないけど。

レーナと一緒にいると、楽しい。

日付なし

た・、あ………：” つぶ く・|| || (解読不可能)

某月某日

俺は、二度と、女を信じない。

某月某日

将来これを読む俺自身のために、一応メモしておく。将来の俺。決してこれを他人に見せないように。

次のページ

すごかった。

初めて見た。

その日の夜、寝れなかった。

あれって、俺と血の繋がらないよな。異世界人だし。なら、

(この辺、ぐちゃぐちゃに消した跡あり)ても、いいよな

某月某日

城の夜会に行った。

レーナは、最初書記官の格好をしていた。あの服、俺も着てみたい。

それから、レーナの姿で出てきた。あんましそつち見なかったけど、かわいかった。

それから、大人になった。ドレスを着てた。きれいだっただ。とても。

某月某日

書記官の試験を受けに行く。そのために、ここしばらく日記も書かずに勉強してきた。

レーナには言っていない。驚かせてやるんだ。父上も母上も了承してくださった。

絶対合格する。合格して俺が、レーナを守るんだ。

某月某日

あつという間に試験は終わった。俺は首席で合格。当たり前だ。レーナほど点は取れなかったみたいだが、まあいい。

レーナは今日から俺の上司になった。あいつは俺が「レンさん」って呼ぶと変な顔していた。でも、はじめはきちんとしないと。俺も、もう子どもじゃないからな。

日付なし

ジェレミー・グランツに聞いた。あいつ、レーナにラブレター贈ったらしい。
禿げる。

某月某日

レーナが三つ目の名前をもらっただけだ。レイリア・ハルヴァー。とてもきれいな響きの名前だ。
でも、俺にとつてのあいつはいつまでも「レーナ」だ。あいつに「お兄様」と呼ばれるのはおかしいって分かってるし、呼ぶなって言ってるけど。

でも、ちょっとだけ嬉（乱暴に殴り書きした跡があり、解読不能）

日付なし

覚え書き いつか報復リスト

・ジェレミー・グランツ……書記官。軽い。あほ。
・マーカス王子……王子。手強い。でもレーナは無視してる。いざまだ。
・ヴェイン・エージェント……騎士。一番面倒。レーナが専属やつている。

某月某日

レーナはやっぱりばかだった。

二度と言ってやるもんか。

でも、ここには書いておく。さすがに「お姉様」は女々しいから……。

……レーナ姉上。

これからは、こっそり心の中で呼ぶことにする。

直接言ったらあいつが喜んでくれるけど、俺のプライドが傷つく。

レーナ姉上の、ばか。

某月某日

レーナの願いで、バドライン伯爵領と一緒に往ってくる。

気に入らないけど。あのヴェイン・アジエントのためらしいし、すごい腹立つけど。

でも、あいつが喜ぶんなら。

レーナ、あいつのことをすごく心配していた。でも、まさか、ひよっとして。

ないよな？

レーナが、あいつのことを好きだなんて……？

某月某日

帰ってきた。疲れた。やっぱりレーナはいろいろすごい力を持っている。

あいつははぐらかしていたけれど、やっぱりヴェイン・アジエントのことが好きなんだ。バドライン伯爵令嬢との熱愛とか、俺はどつでもよかったのに。

むしろ、有難かったのに。

あいつ、ばかだ。

もう、知らない。

某月某日

レーナと一緒に買い物に行った。父上と母上の贈り物を買って言ったけど、本当はそれは言い訳。レーナと一緒に過ごしたかった。最近、ヴェイン・アジエントがレーナを狙っているって聞いたし、余計に。

やっぱりヴェイン・アジエントのことは好きになれない。でも、レーナはあいつのことが好きなんだろう。

俺は。

俺は、あいつの兄だから。応援すればいいって、分かっているのに。すごい、悔しい。

俺は、

俺は、レーナが。

日付なし

レーナが、ヴェイン・アジエントと付き合うようになった。

レーナが、精霊討伐隊に行くことになった。

馬鹿。レーナの馬鹿。

某月某日

レーナを見送る夜会に出た。あいつと、始めてダンスを踊った。やっぱり俺は、レーナをあいつに渡したくない。

レーナが好きだ。

俺は、他のやつよりずっと、レーナのことを知ってるのに。ヴェイン・エージェントよりもずっと。

レーナは、あいつのことが好きなんだ。ヴェイン・エージェントもレーナのが好きだった。

俺は、レーナに想いを打ち明けた。もう何を言ったか覚えてないけど。

レーナは、笑わず俺の告白を聞いてくれた。必ず帰ってくると、約束した。

もう、十分だ。

レーナは、あいつを選んだ。俺の元を離れて、あいつと一緒に討伐隊に参加していく。

俺は、あいつを信じたい。馬鹿で、お人好しで、でも誰よりも大切な……レーナのことを、信じる。

この日記は、しばらく封印する。レーナが無事に帰ってきたら、続きを書く。

レーナ。

どうか、無事で。

ジェレミーの初恋

その日、俺は同僚のレンと一緒に小遣い稼ぎと礼法の勉強を兼ねて、夜会の給仕のバイトをしていた。

きらきら輝く眩しい会場を、給仕のお仕着せを着た俺たちは練り歩く。俺はわりとこういう場面に慣れているけれど、隣にいるレンはそももいかないみたいだった。

「……びくびくしすぎて食器を落とすなよ、レン」

廊下をカートを押してレンと一緒に歩く。レンがさっきから黙りで何か考え込んでいるようだから、俺は声を掛けた。たぶん、ちっこいこいつは夜会の給仕に不安があるんだろうな。

レンは顔を上げて、強ばった笑みを浮かべた。馬鹿が。強がってるけど、唇が青い。

「大丈夫ですよ。僕も、たくさん勉強したいですし」

「無茶すんな。おまえの努力は誰もが知っていることだ」

「ありがとうございます。……これも今後のためですから、頑張ります」

しゃきしゃきと答えるレンは 本当にかいつ、子どもか？ って常々思う。書記官としての才能はもちろん、言葉の端々から、大人の余裕と知性が感じられる。ぶっちゃけ、俺の方がいるいる年下なんじゃないか？ とも思えたり。

……あいつには、敵わないな。本当に。

給仕途中、レンをまたしても見失う。あいつ、背がちっこいからすぐに人波にのまれてしまう。誰かの尻にぶつかって吹っ飛ばされてるんじゃないかと、気が気じゃない。

俺のカートに乗せていた食材が全て出払った。やれやれ。それじゃあ、優秀な善き友を探しに行こうか

そう思ってカートの向きを変えた俺だけど、会場の雰囲気が変わったため、足を止めた。

……何だ？ 皆、同じ方向を向いているようだけど

え？

俺の手が、カートの持ち手からずり落ちる。俺の目は、他の奴らと同じく、ある一点に釘付けになる。

螺旋階段の踊り場にあったドア。あのドアが開いたところは見たことがないから、何のために使うドアなんだろうと常々思ってたけど。そのドアが開いて、女性が二人、階段を下りてきた。

片方は、言わずと知れたベルフォード王国王妃エデル様。見事な金髪に、ボンキュッボンが際立つドレス姿。やっぱいつ見ても美人だ。

でも 俺は王妃様より、その隣にいる女性に目を奪われた。

真っ黒な髪。約五十年前の王妃ミナミのリスケットで謎の黒髪ブームが流行ったこともあるそうだが、彼女の髪は、あれは地毛だ。

染め粉で染めた場合と地毛では明かりの下で見たときのテカリ具合が違う。レンと同じ地毛の黒髪だ。

着ているドレスは あれは確か、ミヤノ・ブランドだ。むちゃくちゃ着こなすのが難しく、黒い髪でないと絶対におかしくなる。それをその女性は、見事に着こなしていた。

緊張しているのか、怖がっているのか、目は伏せ気味で、傍らにいる王妃様の腕にしがみつくようにして、階段を下りてくる。

俺の周りの奴らも、彼女を見てひそひそ話をしている。あれは誰だ？ 王妃様と一緒に登場なんて。見事な、黒い髪だ
女性が、歩く。王妃様の手が離れて一人、こっちに向かってやって来る。

どくん、と心臓が大きく脈打つ。

可愛い顔をしていた。超絶美人、ってわけじゃないけど、丸顔に小振りな顔の造りで、年齢はよく分からない。たぶん、俺より四、五歳くらいは年下だろうな。

俺のわりと近くまで来た と思つたら、奥の螺旋階段からマールカス王子が駆け下りてきた。王子の目的は何も聞かずとも分かり、俺たちは慌てて道を開ける。

黒髪の女性の前まで来た王子は、その場で速攻愛を囁いている。すんなりした細い手を取って、その手首の血管に沿うように口付けて……くーっ！ 初っ端から独占欲丸出しの王子だな！ う、う、う、うらやましいっ！

……ん？ 俺、王子がうらやましい……？

困ったように目を伏せていた女性だけど、顔を上げた際 ぱちりと、俺と目があつた。

うわ。

恥ずかしいのか、すぐに顔は反らされたけど。

……まずい。

女性は王子に何か言って、ただただ！ と会場を猛疾走して出ていってしまう。令嬢なのに足速えな、とぼんやり思いつつ、俺はふらつきそうになる体を、カーットの端に手をやることでなんとか支える。

まだ、胸がどくどくとうるさく鳴っている。

目を閉じれば、真っ直ぐこっちを見つめてきた漆黒の眼差しが今でも、鮮明に思い出されてきて

俺はカートをひっ掴んで、可及的速やかにその場から退散した。

途中、会場警備係の書記官仲間にぶつかりそうになりつつ、足がもつれそうになりながら、使用人用の廊下に飛び出す。

ひんやりとした人気のない廊下。俺はカートを反対側の壁にぶつける勢いで廊下にまろび出て、その場にしゃがみ込んだ。よく頑張った、俺の足。

……それでも、俺の心臓はまだ落ち着いてくれそうにない。

濡れたような黒い目が、まだ俺の脳裏に焼き付いている。マーカス王子とやり取りするとき聞こえたアルトボイスが、俺の耳に甘く囁いてくる。

これは……何だ？

今まで何百人という女と接してきたのに……こんな思い、初めてだ。

艶やかな黒髪に触れたいと思った。

あの黒い目に、俺だけを映してほしいと思った。
ちらりと覗く肌に、触れてみたいと思っ

「うがあああああああ！」

なななななな！ 何を考えているんだ、俺！

俺は廊下の真ん中で天を仰ぎ、髪を掻きむしる。

いかんいかん！ 相手は年端もいかないデビューしたてと思わし
き令嬢だ！

しかも、あの王妃様のエスコート付きだ！ マーカス王子にも口
説かれるようなご令嬢だ！ 俺みたいな泥臭い男がけ、け、けけけ
け懸想していいはずがない！
いいはずがない、けど……。

俺はゆっくり、顔を上げた。さっきぶっ飛ばしてしまったのか、
カートが横倒しに倒れている。

……もし俺がカートを押してへこへこごまをするようなバイトの
給仕じゃなかったら。もう少し身分があって、あの会場に賓客とし
て招かれるような人間だったら。

さっきの令嬢に、声を掛けられたらどうか。

マーカス王子のように、手を取って、王子みたいにき、きききき
きキスしたり、できたたる

「うわあああああああ！」

「……さっきから何やってるんだ、ジェレミー」

再び天を仰いだ俺。斜め後ろから掛かってくる冷静な声。

あ、この声は。

「……今日は中の当番だろ？ カートを戻して早く……」
「クライドっ！」

レンほどじゃないけど、善い友が来た！

俺はぐるっと振り返るなり、そこにいた同僚に抱きつく。

「クライド！ 俺を助けてくれ！」

「とりあえず離れてくれないか。僕はこういう趣味はないんで」

「頼む！ 迷えるジェレミーに愛の手を！」

「分かったから、離れて」

「おう！ ……あのさ、俺、今自分でも自分がよく分からなくて」

「ふうん？ 聞くだけなら聞くから、言ってみなよ」

クライドは冷静にそう言ってくれた。さすが！ 基本的にむちゃくちゃ塩対応でこっちのハートがブレイクすることばかり言うてるクライドだけど、持つべきものは友だち！

「あ、ありがとう！ ……実は俺、さっきから様子がおかしくて」

「ジェレミーがおかしいのはいつものことだろ」

「いつもに増してなんだ！ 実は」

俺の教訓。

真面目な話をクライドにすべからず。

「ジェレミー、聞いたぞ！ おまえ、昨日の夜会で出会った謎のお嬢さんに首つ丈らしいな！」

「なっ！ ど、どこで聞いたんスか！？」

「クライド情報。悩めるジェレミーに愛の手を差し伸べよう、と言つて皆に相談して回ってたぞ」

「……く、くくくクライドっ！」

「……なあ、クライド。相談があるんだが」

「そうか。僕にできることなら何なりと」

「……ああ。実は俺、黒髪の令嬢に手紙を書こうと思っ

「ジェレミー、聞いたぞ！ おまえ、夜会で見かけたお嬢さんにラブレターを書いたそうだな！」

「なっ！ なぜ、それを？」

「クライドから。あいつ、ジェレミーが手紙の内容に困っているだから皆で知恵を授けよう、と言って相談して回ってたぞ」

「……ま、またかあ！ クライドオオオ！」

「ジェレミーはまず、恋愛のイロハについて、それから僕をあまり信用しすぎたはいけない、ってことを勉強すべきだろうね」

後日、クライド・ゼットはニヤリと笑いながらそう語ったそうなの。

ジェレミヤの初恋（後書き）

誰か、ジェレミヤくんに愛の手を。

突撃！ メイソンさんちの晩ご飯！ 1

「え？ 雨漏り？」

私は後から聞こえてきた会話に、ん？ と首を捻る。

「そうそう。ほら、食堂の天井、嫌々な染みができてたたる。あれ、ついに決壊したって」

「じゃあ、食堂は使用禁止か！？」

「らしいな。だってほら、食堂の上はベランダになってたたる。あそこから修理しないといけないから、丸一日はかかるって」

私は同僚の会話を、顔をしかめながら聞いていた。何って、書記部常連の食堂は、私たち下宿組の心のオアシスなんだ。栄養たっぷりだし、何より安い。月給もそれほど多いわけじゃない私にとっては、食堂での食事は栄養摂取の根っこだった。

朝と昼はまだいい。問題は夜だ。夕食となると、街に降りると一気にディナーの値段が高くなる。おまけに夜中にフラフラと外出するのはよろしくない。私みたいな、見た目九歳（実年齢は二十歳）が夜中に外出なんて、いいことが起きると思えない。たとえ、強力なボディーガードである精霊たちがいたとしても。

「食堂使用禁止か……困るな」

うんうん考えていると、隣で咳く人が。見ると、私の「義兄」であるイサークが同じように、困ったように眉間に縦皺を刻んでいた。

「イサークさんも、今晚どうしますか。やっぱり外食ですか」

「俺はまだしも、おまえの財布には痛手だろう。……いや、今晚ぐらいは驕るぞ」

イサークは二人きりだからか、「兄」の時の口調で言う。でも私

は、とんでもないと首を横に振る。

「何言ってるんですか。仮にも僕の方が先輩なんですから、驕られるなんて」

「給料で言つと俺の方が上なんだ。正直それも心苦しいくらいなんだし、黙って驕らせろ」

書記部の給料は、原則年功序列制だ。九歳で書類を出している私は、当然イサークより薄給だ。
でも、だからといって驕られるのも

「いや、僕が出しますから」

「いや、俺が出す」

「いや、いいですつてばお兄様」

「お兄様と言つな……」

「ハイ！ 元気よくなに喧嘩してるの、レンちゃんにイサークちゃん！」

私たちは同時に、声のした方を向く。そこには予想通り、「きゆるん」って効果音が似合いそうなポーズを取った、書記官長が見た目はダンディだけど、仕草も心も乙女な書記官長は、私たちの所に来て可愛らしく首を傾げる。

「喧嘩はだめよう！ で、何があつたの？」

「すみません……いえ、その、今晚のご飯について言い合いになつて」

「ご飯？ ああ、食堂がおじゃんになつちやつたからね。で、どうして言い合いに？」

「僕はレンさんに、年上だから驕ると言いました。レンさんは、驕られるわけにはいかないと言い張りました」

イサークが簡潔に説明してくれた。うん、私が言ったら絶対に要領を得ない話し方になるから、イサークが言ってくれて助かった。

書記官長は「あらまー!」と口元に手を当てた後、ぽんと手を打つ。

「あ、そうだわ! だったら二人とも、うちに来ない?」

「うち?」

私たちの声が八毛る。書記官長は良いことを思いついた、とばかりにつきつきと話している。

「そう、うちのメイゾン家。今日は私が当番の日だから、うーんとおいしい料理を作っちゃうわよ!」

えっと、つまり、書記官長の家にお邪魔して、手料理を食べるということ?

「それって……お邪魔じゃないんですか?」

「邪魔なんて! うちのプリムちゃんもクリスマスちゃんも、一度レンちゃんとイサークちゃんに会いたいわって言ってたし!」

「……誰ですか、その二人」

「プリムちゃんは私のマイハニー! クリスちゃんは私のエンジエルよっ!」

語尾に「ミ」が付きそうな勢いで言う書記官長。えーっと、つまり書記官長の奥さんがプリムさんで、娘さんがクリスマスさんだね。

……うん、本当に心は乙女だけど、奥さんもお子さんもいるんだよね。

「えっと……では、もしよかったらお邪魔させてください」

「僕も、よろしいですか?」

「もちろんですよ! むしろ、成長期の男の子が外食なんてダメッ!

私が栄養たっぷりのおいしいディナーを作ってあげるから、大人しくお呼ばれしなさいっ!」

というわけで、私とイサークは今晚、書記官長の家に急遽、お邪魔することになったのだった。

定時に仕事を終えて、ヴェイン様にも挨拶をしてからイサークと一緒に仕度をする。どうやら書記官長の家までは一緒に馬車で乗せていってくれるらしくて、三人で馬車に乗った。

「その、食費とかいいのですか」

馬車の中で私がおずおずと聞くと、向かいの席に座っていた書記官長はとんでもない、とばかりに手を振る。

「徴収するわけないでしょっ！ 言っ飛ばせば私の我が儘なんだし、レンちゃんもイサークちゃんも普段バリバリ仕事していて、ほんとは助かってるもの！ むしろ、お釣りが来るくらいだと思いなさいな！」

そうして飛んでくる、「バッチーン」って感じのウインク。書記官長がするなら全く違和感がないってことが、本当にすごい。それから書記官長は、簡単にお家の事情を教えてくれた。

書記官長は、メイゾン男爵家の傍系に当たるそうだ。書記官長のお兄さんが家督を継いでいて、お兄さんの所には跡継ぎになる息子を継ぐ可能性はゼロに近い。書記官長は幼い頃から勉強家で、特に算術に秀でていたから家督を兄に一任させて、自分はさくつと書記官のバッジを手に入れて堅実な職業を手に入れたそうだ。

話している間に、馬車は屋敷に着いた。もう辺りは薄暗くなっているから、ごちんまりとした立方体の屋敷の壁に取り付けられた灯りがゆらゆらと揺れている。お屋敷の大きさは、フェスティューユ子爵家の半分程度かな。傍系だから、それほど大きくはない。

でも、馬車道から見える庭園は立派だ。芝は短く刈り込んでいて、下段には季節の花が植えられているのが、夕闇の中でも分かった。

「お庭は、奥様の趣味ですか」

私が問うてみると、降りる仕度をしていた書記官長は首を横に振った。

「プリムちゃんはお花には興味がないの。これは全部、私の趣味よっ！」

「えっ……ああ、なるほど」

奥様がどんな人かは分からないけど、この庭園の設計を書記官長がしたとなると、頷ける話だ。書記官長、女子力高いもん。

書記官長に連れられて、私とイサークはお屋敷の玄関に上がった。

「ただいまあ！ 今日はお客様がいらっしやるわよ！」

「お帰りなさいませ、旦那様……おや、小さなお客様ですね」

私たちを出迎えたのは、初老の執事らしきおじさん。彼は恭しく頭を下げて、書記官長の後ろにちよこんと立つ私たちを見て首を傾

げる。

「お客様がいらっしやるとは伺っておりますが、そちらの方々は……？」

「うちの部下のレンちゃんとイサークちゃん。黒い髪の子がレンちゃん、茶色い髪の子がイサークちゃんね」

書記官長に紹介され、私たちは揃って頭を下げる。

「レン・クロードです。お邪魔します」

「イサーク・フェステイユです。よろしく願いします」

執事さんは最初、私たちみたいな子ども（とりわけ、私）が書記官だと知って驚いたんだろう。でも、彼は私たちの胸を飾るバッジを見て、さもありなんとばかりに頷いた。

「なるほど……旦那様が日頃おっしゃっていた、最年少の二人組ですね。ようこそいらっしやいました。……旦那様、夕飯のお支度は？」

「下ごしらえは済ませているわね？ ちゃちゃっと作っちゃうわ！」
そう言って書記官長は荷物を執事さんに預けて、うきうきと肩を回す。

「じゃ、私は準備をしてくるから。……モーリス、レンちゃんとイサークちゃんをリビングに案内して。あと、プリムちゃんとクリスちゃんも呼んでおいて」

「かしこまりました」

執事さんが恭しく頭を下げて、ルンルンの書記官長を見送った。

突撃！ メイソンさんちの晩ご飯！ 2

キッチンで書記官長が夕食を作っている間、私たちは執事産に先導されて、リビングに入った。

リビングの広さは、近衛騎士団のヴェイン様のお部屋くらいかな。それほど広くないけど、ゴテゴテした調度品や置物なんかを取っ払って、すっきりしているから実際の面積より広々と思われる。

「失礼する……フィルの部下が来たとのことだが」

執事さんが淹れてくれたお茶を飲んでみると、バン！ とドアが開いた。驚く私たちの前に現れたのは、すらりとした騎士服を纏った中年の女性。

洪みのある銀髪をきっちり頭頂部でまとめていて、切れ長の目は濃い茶色。脚がとんでもなく長くて、全体的にスレンダー！。

謎の美女さんの登場に私はあっけにとられていたけど、イサークの方が回復が早かった。彼は立ち上がり、ついでに私の袖を引いて立つよう促した後、頭を下げる。

「書記官長の奥方ですね。お邪魔します。イサーク・フェステイユです」

「レ、レン・クロードです」

「ああ、フィルから聞いている。丁重な挨拶痛み入る」

美女さん　書記官長の奥方は鷹揚に頷いて、低い声で「座ってくれ」と促した。

彼女は私たちの前のソファに座って、「申し遅れた」と深みのあるアルトボイスで言った。

「私の名はプリムローズ・メイゾン。フィリップ・メイゾンの妻で、現在治安騎士団に勤めている」

「騎士様ですか……！」

軍服を着ていることから何となく予想は付いたけど、私は思わず声を上げた。奥様は私の方を見て片眉を上げた後、「ああ、ひよつとして」と目尻を垂らす。

「君は、あれだな。近衛騎士団のヴェイン・エージェントが連れ回している少年書記官。十にも満たない年だが抜群の計算能力を持つと、もっぱらの評判だ」

「あ、ありがとうございます」

「そして君の方……名前からして、フェステイユ子爵家のご子息だな。君は、大人顔負けの流麗な字体で、短時間で見事な報告書を仕上げることで評判だ。うちの治安騎士団でも、イサーク・フェステイユを引き抜きたいという者はちらほら出ているんだ」

「勿体ないお言葉です」

私と違い、イサークは冷静に応えている。……そうか、知らなかつたけどイサークの名前も有名なんだな。そりゃあ、この歳でこれだけ仕事ができても将来有望な顔立ちなんだから、目立つよね！

それにしても、書記官長の奥さん。年は書記官長と同じくらいだろうけど、格好いいな。私も歳を取っても、奥さんみたいなキリツとした人でいたい！

間もなく、夕食の準備ができたみたい。フリッフリのピンクのエプロンを付けた書記官長が「ご飯よお！」と呼んできたので、三人でダイニングに向かう。

テーブルに狭そうに並んだ料理の数々。うーん、本当に書記官長の女子力には舌を巻くばかりだ。今度、料理を習おうか……。

私たちがテーブルに着くと、遅れてドアが開いて一人の女の子が

入ってきた。

「あら、遅いじゃないのクリスちゃん！」

振り返った書記官長が言うと、女の子は眉を垂らして頭を下げる。

「ごめんなさい、お父様、お母様、お客様。課題で手こずっております……」

「客が来るとは伝えていただろう、クリス。さっさと手を洗って席に着け」

奥様がそう言ってクリスさん　書記官長の娘をシンクに向かわせた。男爵家だけど、一般家庭の風景みたいだね。

クリスさんはイサークと同じ年くらいの子で、書記官長譲りの茶色の髪と奥様譲りの焦げ茶の目の、ふんわりとした雰囲気の少女だ。彼女は手を洗った後、自分の席に着こうとして、隣にいたイサークを見てはっと息を呑んで、頬を赤く染めた。うん、イサークのイケメンっぷりはやっぱり年頃の女の子の興味関心を引き付けるよね。

イサークは、自分の椅子が邪魔で座れないと思ったんだろう、立ち上がってクリスさんの椅子を引いてあげた。

「申し訳ありません……どうぞ」

「あ、ありがとうございます……」

クリスさんは真っ赤になって、イサークに引いてもらった椅子に座る。イサークはクリスさんが真っ赤になっている理由が分からないのか、不思議そうに首を捻った後、席に戻った。この人、本当に罪な男だね……。

書記官長夫妻はイサークとクリスさんのやり取りをニコニコ（ニヤニヤ？）しながら見ていたけど、すぐに書記官長の音頭で食前の挨拶をし、食事を始めた。

ひんやりと冷たい鴨肉のソテーに、生ハムを使ったマリネ。フランスパンのような固めのパンの表面にはうっすらバターを塗っていて、こんがり焼いたものだから甘い匂いが漂っている。

スープは冷製で、まだ水気を吸いきっていないクルトンがふよふよ浮いているかぼちゃスープ。その隣の大皿には、オリーブの実がそのままゴロゴロ転がる、ペペロンチーノのようなパスタ料理が。

「お、おいしい……！」

スープをひと匙飲み込んだ私が思わず感嘆の声を上げると、向かいの席にいた書記官長が満足そうに頷く。

「そう言ってもらえて光荣よ！……イサークちゃん、パスタはいかが？」

「はい、いただきます」

「わ、私がよそいます！」

自分から少し遠い位置にあるパスタを取ろうとしたイサークだけど、気を利かせてクリスさんが申し出る。イサークは彼女を見て「ありがとうございます」と言っていたけど、大丈夫だろうか。パスタのトングを持つクリスさんの手が震えている。

奥様はそんな娘を見て、ふふつと笑った。

「クリス、柄にもなく緊張しているな」

「お母様っ！」

「いいじゃないの、プリムちゃん。イサークちゃんがイケメンだったこと、見れば分かるじゃない？」

書記官長も、フォローのような援護射撃のようなよく分からないコメントを言うものだから、クリスさんは真っ赤になって両親を睨んでいる。

当事者であるイサークは、いつも通りクールな表情でクリスさん

を見るばかりだ。本当に……私の義兄は、罪な男だ……。

食後のお茶も、これまた美味なり。

「可愛い食器ですね……ひよっとしてこれも、書記官長のチョイスですか？」

私は薔薇の模様が描かれたカップを持ち上げて聞いてみる。日本にもこんな食器があったね。ワイルドストロベリーだけ？ あんな感じの、シックだけど愛らしい柄の茶器だ。

「そうよ！ 独身時代から、こういつのには目がなくなっ……同僚にも最初はからかわれたわねえ」

「逆に私は地味でごついものしか持たないから、同僚がこういった食器を持っていても、感心が湧かなかったな」

奥様も言う。

「なんだか、見ても分かるように、書記官長は乙女で奥様は剛胆な感じだ。ちょうど、性別が真逆だね。」

書記官長はふふつと笑って、「昔話、聞いてくれる？」と私たちを見つめた。

メイゾン男爵家の次男として生まれた書記官長は、子どもの頃から女の子のような趣味を持っていた。可愛いフリフリの服に憧れ、ふわふわのぬいぐるみが大好きで、兄のように友だちとチャンバラをするより、家で人形と遊んでいる方が好きだった。

最初の頃こそ、次男の趣味に口を出した両親だけど、次第に何も言わなくなった。書記官長が大きくなる頃には、ぬいぐるみやお人形を積極的に買ってくれたそうだ。

ただし、両親は口を酸っぱくして言っていた。

「おまえの趣味は、おまえのことだからそのまま続ければいい。だが、世間は甘くない。おまえがいくら人形やぬいぐるみが好きでも、それを受け入れない者は多い。世間から爪弾きにされたくないければ、信頼できる者の前以外、その趣味を決して口外するな。辛いかもしれないが、おまえのためだ」

幼い書記官長は、両親の言うことがいまいちよく分からなかった。家族も、使用人も、書記官長の趣味を受け入れてくれた。どうしてもそれを表に出してはいけないのだろうと。

突撃！ メイソンさんちの晩ご飯！ 3

少年になった書記官長は、武術より算術、学問の方に才能を伸ばした。彼の才能を尊重し、両親は書記官長を学問専攻の学校に通わせた。初めてと言っていい「社会」に進出していった書記官長は、そこでやっと、両親の言わんとすることを悟った。

男の子は、お人形やりボン、花を愛でたりはしない。それは、女の子がすること。

男の子が人形を持っていると、気味悪がられる。「あいつはおかしい」と指をさされる。聡い書記官長はすぐにそのことを知り、両親の言いつけを守り、「普通の男の子」の仮面を被ることにした。

大好きな可愛いものは全部、屋敷の部屋に封印して、同級生の少年と同じように行動する。一人称も、「私」から「僕」に変えた。趣味ではないけれど、格好いい剣とか、騎士とか、血生臭い戦記物とか、そういう話に合わせた。

辛いけれど、痛いほど分かっていった。ここで、自分の素の姿を出す、攻撃される。無事に学校生活を送りたいなら　大好きな質問を続けたいなら、我慢しなければならぬ、と。

そして書記官長は当時では異例の速さで書記官のバッジを手に入れた。当時、書記官長は十六歳。試験通過時の成績は中の上レベルだったが、十六歳という年齢にしては破格の成績だったらしい。

書記部は、今まで在学していた学校とはまた違った。こちらは、基本的に「仕事さえできれば門戸・年齢・趣味・容姿を問わない」世界だった。就職した書記部には、自分を越える変人もたくさんい

た。

書記官長は、少しずつ自信を持った。これなら、自分の少女趣味をさらけ出しても大丈夫なのではないか。書記官長は着実に仕事をこなしていた。仕事ができる者は、決して淘汰されない。

書記官長はある日、一人で昼食を食べていた。料理が得意な書記官長はその頃から、自分で食事を作っていた。

だが、どうしても趣味が疼き、弁当は可愛らしい見た目になる（地球で言うと、「キャラ弁」だ）。それを書記部の皆に見せるのはまだ勇気が要ったので、こそこそと中庭の日陰で食べていたのだ。くまさんやらうさぎさんやら、可愛い柄の弁当をほくほくと食べる書記官長。そんな彼に迫ってきたのは、知らない女性陣だった。

「何この子」

「やだ！ 見て、このお弁当！」

「男のくせに気持ち悪っ！」

彼女は、騎士団に所属する女騎士だった。気さくで気まま、個性的な書記部の女性に慣れていた書記官長は、啞然として、自分を困む騎士の女性陣に言われるままになっていた。

「まさかそれ、自分で作ったの？」

「そんなの食べて、恥ずかしくないわけ？」

言いたい放題されて、書記官長は何も言えなかった。でも、女騎士の一人が書記官長の弁当を奪おうとしたときには、声を上げて抵抗した。

「や、やめて！」

「うわ、喋り方まで女みたい」

「捨ててやるうよ、こんなの」

「やめて！ 頑張つて作つたんだから！ 捨てないで！」
「あはは！ 男なら自力で取り返してみなさいよ！」
そう言つてひょいっと弁当を奪う女性。身長は書記官長の方が高かつたけれど、相手は現役の女性騎士。喧嘩が嫌いな書記官長は、涙目になつて歯を食いしばるしかできなかつた。
と、そこに。

「……貴様ら、何をしている！」

落雷のような怒声。びくつと身をすくませる女性騎士たち。ボロボロ泣きながら、そちらを見やる書記官長。

中庭の向こうから颯爽と歩み寄ってくる、長身の女性騎士。眩しい銀髪は短く刈り込んでいて、すらりと細い体つき。

「ふ、副長……」

「休憩時間に何事かと思つたら……書記官をいびつて居るのか！」
副長と呼ばれた女性に一括され、女騎士たちは見る見る間にしよげていく。

副長の視線が、女騎士の一人が持つ弁当に注がれる。

「……これは？」

「わ、私のです！」

反射的に言つてしまつてから、書記官長ははっと口を手で塞ぐ。言つてしまった。人前で、「私」と言つてしまった。

くすくす、と女騎士が馬鹿にしたように笑うと、副長はぴきつと額に青筋を寄せ、弁当をその手から奪うと問答無用、部下の横つ面を張り飛ばしたのだ。

バシ、ボカ、バキ、と三人いた女性騎士は一撃で芝生に転がり、副長はへたりこむ書記官長の前にしゃがみ、弁当を差し出した。

「君のものなのだ。うちの馬鹿共が申し訳ないことをした」

「い、いえ……」

書記官長はおずおずと、弁当を受け取る。そのまま鼻を嚙っていると、副長の手がぼん、と書記官長の肩に乗る。

驚いて顔を上げると、焦げ茶の目を細めて静かに微笑む、女性騎士の顔が。

「すばらしい出来だな。自分で作ったのか？ 私は料理ができないから、尊敬するよ」

「……変じゃ、ないですか？」

書記官長が鼻声で問うと、副長は目を見開いて、足元に伸びる部下たちを殺人的な目で睨む。

「……この馬鹿が何か言ったんだ。変なものか。私は女らしいことが何もできない。勉強も嫌いだ。できるのは、剣を振り回すくらいだ。だから、君のように書記官のバッジを持ち、見事な料理ができる才能は、すばらしいと思う。誇りに思っていていいぞ」

そう言って、副長は立ち上がる。彼女は書記官長に軽く手を上げた後、気絶した部下三人をまとめて引きずっていった。

書記官長は、ぼかんとして女性騎士の背中を見送っていた。

「……とまあ、これが私とプリムちゃんのなれそめなのよ、キャッ

「プリムローズという可愛い名前のくせに、女性らしいことは何もできなかつたのでな。可愛い弁当を作るフィルを見て、素直に感心したのだよ」

照れまくる書記官長とは対照的に、奥様は悠然と言う。
私は思いきって問うてみた。

「えっと……それじゃあ、それがきつかけでお二人は結婚を……？」
「まあ、そういうことだな。その時はお互いに名乗っていなかったのだが、後日、騎士団エリアにフィルが来たんだ」

「やだっ！ 恥ずかしいわよ、プリムちゃん！」
ぺしっと書記官長が奥様の肩を叩くけど、どこ吹く風で奥様は言う。

「こいつ、私のために手作り弁当を持ってきたんだ。またしても部下がからかうものだから、そいつらは地に沈めた後、フィルと一緒に弁当を食べた。色々話をしていると、妙に気が合ってた。結婚することにした」

「……では、書記官長の喋り方も、その頃から？」
イサークが問うと、奥様は頷いた。

「そのようだな。フィルも吹っ切れたようで、書記部でも素の姿を出すようになったそうだ」

「最初はビックリされたけど、なんだかんだ言ってみんな受け入れてくれたわあ。本当に、いい職場に就職したわね！」

書記官長もつきつきと言う。

そうか……書記官長もやっぱり、苦労したんだな。でも、奥様と出会って、本当の自分を出せるようになって

「……ちなみに、プロポーズはどちらから？」

「私だ」

ずばん、と言う奥様。うん、そうだろうと思った。

「プロポーズの台詞は……クリスマス、何度も教えているから言えるな？」

「はい。『私と結婚しろ。嫁に来い』ですね」

「やだもおおう！ そんな大声で言わないでよおおう！」

黙って話を聞いていたクリスさんが言うと、とたんに真っ赤になつて悶える書記官長。嫁に来いって……まあ、そうなんだけど。

でも、よかった。

書記部にいる書記官長の顔は、いつも晴れ晴れとしている。ちょっと趣味は変わっているけど、みんなそれを受け入れている。むしろ、書記官長らしいって思ってる。

書記官長、私も同じように思いますよ。

書記部に就職して、本当によかった、って。

お茶の時間の後、深夜になる前にと私たちはメイゾン宅を後にした。

「本当にありがとうございました」

「いいのよ！ 明日からまた頑張りましょ！」

何度も頭を下げる私たちに、ウインクを飛ばす書記官長。隣にいる奥様も微笑んでいて、その後ろにいるクリスさんは、名残惜しげにこつちを　　というかイサークの方を見ていた。

「書記官長の話が聞けて、よかったですね」

私が馬車の中で言うと、イサークも頷いた。

「ああ。本当にいい職を得られたと、俺は思う」

「あ、それは私も思いました」

「……おまえも？」

「はい。……あ、そういえば。クリスさんでしたっけ。イサークのこと気がなつてたみたいですね」

「……そうか？」

おや、本当に気づいてなかったみたいだ。驚いたように見つめてくるもんだから、私は教えてやる。

「ほら、パスタを取ってもらったときだって、さっきだって、顔を真っ赤にしてみましたもん。いやあ、本当にモテますね、イサークおに」

「その名で呼ぶな」

「了解です。……というわけで、クリスさんに好かれてるんですから、いいじゃないですか」

「……別に」

「あ、さては……好きな人がいるんですね！」

「ぶっ！ い、い、いるわけないだろ！」

「その反応、いるってことですね。教えてくださいよ。……さては、ちっちゃい子が好みとか？」

「違う！ 俺は年上好みだ！」

「……ふーん？」
「あっ」

馬車はゆっくり、王城への道を上がっていった。

明日から、また頑張れそうだ。

書記部のある辺りを見つめて、私は一人微笑んだ。

突撃！ メイソンさんちの晩ご飯！3 (後書き)

作者的、登場人物の料理スキル

書記官長(女子力高い) > カスミ(料理得意) ・ アニエス(レイナの養母。家庭的) > イサーク(スペック高い) > > 玲奈(家庭科調理実習レベルなら) > ジエレミー(最低限のたしなみ) > > ヴェイン(焼けばいいだろ?) > 副長(焼けば食べられますね) > > (越えられない壁) > > プリムちゃん(消し炭)

冷静な侍女と純情書記官 1

指先が滑らかに動く。

迷いない手つきで本能で動いているように思われるが、脳みそは常時フル回転し、今日はどのメイクが良いだろうか、どのドレスが一番この瑞々しい肌に映えるだろうか、考えを巡らせている。完了したら、少し離れて「出来」を確認する。

「……ど、どうかな？ カスミ」

黒髪の女性は、恥ずかしそうに、少し戸惑ったように、首を傾げる。そんな様にも愛らしさがにじみ出ている、思わず頬が緩んでしまふ。

「とてもお綺麗ですよ。今日も自信を持ってくださいね、レイナ様」
「あ、ありがとう」

黒髪の女性　レイナ・フェスティューは恥ずかしげに微笑み、そわそわと自分の体を鏡を見て点検し始めた。
そんなレイナを、カスミは化粧道具を片付けつつ、見守る。

「さあ、もうすぐヴェイン様とのお約束の時間です。今日はディナーを一緒に送られて、屋敷まで送ってくださいるのですよね」
「う、うん。夜中までには帰すって……」

カスミはレイナの言葉に、深く頷いた。レイナの恋人であるヴェイン・アジエントは非常に真面目な男で、思いを通じたレイナのことをよく考えている。もう二人の間に立ちはだかるものは何もなくなっても、事を急いたりしない。日中は隊長と書記官として私情を挟まず、夜が更ける前にはレイナをフェスティュー子爵家に送り届ける。

堅実なお付き合いをする二人を見ていてもどかしいと感じる者も多いそうだが、カスミはこれで良いと思っている。こっちの方があ
の二人らしいし、恥ずかしがり屋なレイナもゆっくりと愛を育んで
いけるだろう。

……そう、自分と違って

「そろそろ参りましょうか、レイナ様」

カスミは笑顔を向ける。

仕事中は決して、私的な感情を持ち込まない。特に、レイナに対
しては。

美しく着飾ったレイナを、ヴェインの元まで送り届ける。

ヴェインに抱き寄せられ、頬にちゅつとキスされたレイナは顔を
真っ赤にして抗議するが、ヴェインは涼しい顔。ややもすればレイ
ナも諦め、ぷうつと頬を膨らませながらもヴェインの手を握る。

カスミは、目を細くしてレイナとヴェインを見送った。彼らの姿
が廊下の角に消えてから、ポケットに手をつ込んだ。確か今日は、
ちょうどいいものを入れていたはずだ。

ポケットに入っていた手頃なサイズの小石を取り出す。道端に落
ちていて、危険なので拾っておいたのだ。それを一度二度、ぼんぼ
んと手の中で転がしてから 瞬時、その石を廊下の反対側に向か

って投げつけた。

「うぐおっ!?!」

鈍い音と悲鳴。よし、命中。カスミは肩を落とし、石を投げた方向に向かう。

そこには、頭を抑えて悶絶する若い男が。

「痛て……お、おい！ 何も攻撃することないじゃないか！」

「失礼いたしました。レイナ様の方を欲情した目で見つめる獣の気配がしたので、追ひ払おうとしたのです」

「お、俺は発情期の動物か!?!」

「違いますか?」

やれやれ、とカスミは肩を落とす。これまでは見逃してやったのだが、今日は何となく、そう、イライラしていた。

カスミの攻撃を喰らった男は頭頂部をさすりつつ、ブツブツ言う。

「……なんだよ。見るだけならいいじゃないか。減るもんじゃないし」

「減ります。あなたの舐め回すような下心満載の目で見られると、

レイナ様が摩耗してしまいます」

「勘弁してくれよ……な? 手を出したりは絶対しないから、頼む

！ レイナ嬢の侍女さん!」

カスミはズキズキ痛み始めたこめかみを指の先でさする。本当に、この男は面倒な人間だ。

書記官で、若くておっちょこちょいだが非常に頼りになるムードメーカーだと、レイナから聞いている。純情一直線で、奥手すぎるのがアレだけど、とも。

この男は、レイナが着飾ってヴェインと待ち合わせをする際、かなりの確率でそこから待ち伏せている。そして、頬を赤らめて恋人

の到来を待つレイナを見てでれどし、ヴェインと仲良さそうに寄り添う姿を見てはうるうる目を潤ませる。

彼は特に何も喋らないし、横槍を突っ込んでくるわけでもないのだが、見ていてとにかく、鬱陶しい。レイナは気づいていないようだが、ヴェインはちらと彼の方を見ているから、分かっているのだらう。カスミも、かなり早い段階で気づいた。気づいたが、実害はないので放っておいたのだが。

「だいたい、レイナ様を欲情した目で見てどうするのですか。あのお方は、ヴェイン様の最愛の恋人ですよ」

「わっ、分かっているって！ でも……いいだろ、レイナ嬢の可憐な姿を見るだけで……俺は幸せなんだから」

そう訴える彼の目は、本気だ。マジだ。ますます頭痛が激しくなり、カスミははっつ、と深いため息をつく。

「そうですか……」

「俺だって分かってるよ！ 何せレイナ嬢は、ヴェイン・アジエンととやることやってしまってるんだから」

ジェレミーが拗ねたように言うが

レイナの忠実な侍女は、黙っていなかった。

「それ、どういうことですか？」

「え？ えーっと……どのこと？」

「レイナ様とヴェイン様がやることやってる、という点です。情報源は？」

カスミはずいっと青年に詰め寄る。ヒッ！ と彼が怯えた声を上げるが、無視。

気のせいじゃなければ、この男は今、レイナの非常にデリケートな話題に触れた。レイナの専属侍女であるカスミでさえ知り得なかつ

たことを、この万年純情男は知っているとということだ。

まさか、書記部で噂になっている？　だが恥ずかしがり屋なレイナとレイナ思いのヴェインに限って、そんな話題が噂になるとは思えない。レイナがこのことを知ったら、憤死してしまうかもしれない。

殺気をみなぎらせて詰問するカスミの気合いに押されたのが、青年はへっぴり腰になりながら言い訳する。

「じ、情報源というか、俺の目の前でやってたし……」

「嘘つきは絞首刑に処しますよ」

「嘘じゃないって！　あんな人通りの多い渡り廊下でやる方がいけないだろ！」

渡り廊下で、皆のいる前で、レイナとヴェインが、やることをやっている。

おかしい、とカスミは眉を寄せる。そして、尋ねる。

「……一応確認しますが。あなたの言う『やることやってる』というのは、何を示すのですか？」

「！　そ、それを俺に言わせるのか！？　この鬼女！」

「鬼でも魔王でも構いません。言いなさい」

「……………ス」

「聞こえませんが。もう一度」

「俺を殺す気か！」

「いえ、死ぬ前に確認で、もう一度！」

「悪魔！」

「いいから、早く。レイナ様にこのことをお知らせしてもよろしいのですか？」

「……………」

「……………」

「……キ、キス」

「……………」

「い、言っただろ！ 言っただからレイナ嬢にチクるなよ！」
わああああん！ と真つ赤な顔を手で覆って泣き崩れる青年。ズ
キン、とひととき巨大な頭痛の波がやってきて呻くカスミ。

「……あなたにとっての『やることやってる』というのは、キスの
ことなのですな」

「おまつ、そんな軽々しく！」

「何度でも言います。はい、キスキスキスキ。レイナ様とヴェイ
ン様が愛情に満ちたキスを」

「うわあああああ！」

青年、制御不能。その場に体を二つ折りにして頬れ、慟哭する青
年に背を向け、カスミはスタスタと歩きだした。

時間の無駄だったようだ。

冷静な侍女と純情書記官2

その日の夜。

カスミは王城の自室のベッドに座って、真っ白な便箋を開いていた。

几帳面な字が記されたそれは、何度も読んでいるのもうぐしやぐしやになっている。内容も、もう覚えてしまった。

手紙の送り主は、カスミの長年の婚約者 だった男。

子爵家の息子である彼は、元は実家を立て直すために男爵家令嬢のカスミと婚約した。そこに本人同士の気持ちは一切考慮されていない。カスミはそんなもんだろうと諦めていたが、子爵家が立ち直った相手は、親同士が決めた婚約に納得がいかかったようだ。

『伯爵家の次女と恋に落ちた。相手の伯爵たつての希望で、結婚が決まった。もう彼女は妊娠している。君との婚約を解消してくれ』

真面目な字。彼らしさがにじみ出っていて、愛おしさを感じていたその字が、今は呪詛のようにカスミの胸を蝕んでくる。

それでも、この手紙は捨てられない。長年の婚約を破棄され、自分よりずっと格上の令嬢を妊娠させられ、行き遅れてしまったカスミは放り出されてしまった。

カスミは二十二歳。婚約者がいるならまだしも、この歳でフリーになってしまうと、次の相手が見つかりにくい。貴族の子息も、令嬢は若ければ若いほどいいと考えるだろう。現に、カスミの婚約者が妊娠させた令嬢もたったの十六歳だという。カスミより六つも年下の、若々しい少女。対する自分は、ぽんつと捨てられた行き遅れ。

くくつ、とカスミは低く笑う。婚約破棄されて悲しいはずなのに、それほど哀しみは湧いてこない。

昔のカスミなら、信じていた婚約者に捨てられて打ちひしがれたことだろう。だが今は、違う。カスミには、頼りない婚約者とは全く違う、確固とした大切な人がいる。

レイナ・フェステイユ。カスミの永遠の主君。大切な、親友。

これからベルフォード王国の栄光の冠を戴くだろう彼女の側にいて、第一の侍女として彼女を一生輝かせる。愛するヴェインの隣でレイナが笑っていられるなら、何だってする。

婚約破棄され、結婚できなくなった行き遅れになっても、もういい。実家の両親も、もう諦め半分だった。相手が伯爵家なので、男爵である両親は太刀打ちできない。

もう、いい。レイナがこれからもカスミを頼ってくれるなら、それで十分。

これからはレイナの侍女として、慎ましく生きていこう。

カスミは手紙を封筒にしまい、机の引き出しに入れた。まだ、これを捨てる勇気はなかった。

「……またあなたですか」

数日後。カスミはポケットに入っていた物を取り出して言う。

「もうそろそろ、その発情期満開の目をくり抜いた方がよろしいでしょうか？」

「わわっ！ タンマタンマ！ 凶器はよくない！」

「これは凶器ではありません。ペーパーナイフと言って、事務仕事のお供です」

「おまえ、それで俺の何をほじくる気なんだ！ ……いや、す、すみません！ だから、その、くり抜きだけは……」

地面に這いつくばって許しを請う青年。カスミは今朝磨いたばかりのペーパーナイフをポケットにしまい、毎度懲りない茶髪の青年をやれやれと見下ろす。

「……いい加減、レイナ様も気づきますよ。変態の烙印を押される前に、やめた方がいいです」

「影から見るだけで変態になるのか!？」

「私からすれば十分変態です」

「ううう……俺の一日の幸せ成分を補給しているだけなのに……」

「レイナ様なら、書記部でもお会いしているでしょう」

「そうだけど、何か違うんだよ。ほら、あっちのレイナ嬢は書記部の制服で、こっちのレイナ嬢はドレス姿で。制服のスカートとタイトのピチピチ感もこれまたオツなんだけど……や、待って。ナイフはやめて。と、とにかく制服だけじゃなくて、ドレス姿も拝みたいんだよ！」

瞬時にペーパーナイフを抜刀していたカスミは、鼻の脇に皺を寄せる。確かにレイナはどちらかという体つきは丸っこくて、太ももなどもほどよく肉が付いている。書記部の制服のミニスカートにタイト姿だと腿のラインが浮き出そうだとは思っていたが、この野獣もレイナのタイトスカート姿を狙っていたとは。

「ヴェイン様に報告ですね」

「それだけはやめてえええええ！」

「もしくは、書記部の女性制服もズボン姿にするよう進言するか」

「俺の目の保養を奪わないでえええええ！」

人目も憚らず叫ぶジェレミーに背を向け、カスミはペーパーナイフをしまつてポケットの中でいじくり回す。

時間の無駄だったようだ。

とある昼下がり。カスミは、レイナと一緒に散歩に出ている。

「せっかくのお休みなのに付き合わせてしまつてごめんなさい、カスミ」

カスミが差すパラソルの影の下で、レイナが心底申し訳なさそうに眉を垂らす。

カスミは笑顔で首を横に振り、少しだけずれてしまったレイナのストールの位置を戻す。

「とんでもないことです。レイナ様と一緒に過ごせることが、私にとっての何よりの休暇になりますよ」

レイナは今日、ヴェインに贈り物がしたいからと言って街に降りることになった。彼女らの後には護衛の騎士がそれとなく人混みに紛れつつ付いてきているが、高貴な女性の側で何かと世話を焼く侍

女の存在は必要だ。

レイナは最初、時間外勤務になるので特別手当を支給すると申し出たが、カスミは却下した。だがそれではレイナの満足がいかないらしく、かなり二人で折衷案を出した末、「レイナがカスミの分も一緒にアイスを買って、一緒に食べる」ということで妥協した。元は庶民育ちのレイナは、一方的に相手から何か施しを受けることに慣れていないのだ。

だが、カスミはそんなところがレイナの魅力だと感じている。そしてきつと、同じことをヴェイン・アジエントも思っている。

今日のレイナは、レモンイエローのサマードレス姿だった。肩は紐状になっているため、露わになった鎖骨を隠すために薄手のショールを巻き付けている。髪も、今日はポニーテール風にまとめ、少しでもカジユアルな感じに仕立ててみた。初夏の外出に相応しい、軽やかなデザインだ。

「今日はどうのお店に行かれますか」

カスミが尋ねると、レイナは指を折りながら数える。

「えーっと……まずはヴェイン様の隊長就任三周年のお祝いを雑貨屋で買って……それからカスミと一緒にパーラーでアイスを食べるでしょ？ その後、新しくできたっていう宝飾屋さんにも寄ってみたいの。いい？」

「もちろんです。お供いたしますよ」

そう答えると、レイナはぱあつと華やかに笑う。

「ありがとう！ じゃあまず、雑貨屋に行こう！ この雑貨屋はね、前にイサークと一緒に行ったことがあって……」

ああ、とカスミは心の中で嘆息する。

レイナと一緒にいると、心の中のもやもやが晴れていく。婚約者に捨てられたとか、行き遅れになったとか、そんなことがほんの些事に思えてくる。

夏の太陽すら霞むような笑顔のレイナがほんのちょっとだけ眩しくて、カスミは目を細めた。

冷静な侍女と純情書記官3

最初に行った雑貨屋では、まずはヴェインのためのプレゼント選び。二人でかなり悩んだ末、贈り物は剣の鞘に付ける飾り紐にした。贈答用にきれいにラッピングしてもらった間、カスミはレイナと同じ柄で色違いのガラス製の櫛を購入した。

どうやらレイナがいた世界では、友人同士が同じ柄のものを購入することがよくあったのだそうだ。それぞれ自分の分は自分で購入すると、レイナは「カスミとお揃いだ！」と大喜びだった。書記部に出勤する前に必ずこの櫛で髪を解く、と宣言するレイナを見て、カスミも毎朝必ずこの櫛を使おうと心に決めた。

ラッピングされたプレゼントをレイナのバッグに入れ（護衛の騎士が持つと言ったのだが、レイナが頑として受け入れなかった）、今度は流行のパラーでアイスを買う。最初に約束した通り、時間外勤務代の代わりとして、二人分のアイス代をレイナが払った。

「カスミはミントが好きなのね」

カスミに青緑色のアイスを渡したレイナが感想を言う。そう言う彼女は、チョコチップが練り込まれたピンク色のアイスを手に入れている。

「私、ミントはあまり食べないんだ。歯磨き粉っぽくて」

「ハミガ……ですか？」

「あつ、えつと、歯磨き粉ってのは歯を磨くときに使う……薬？

みたいなので……」

二人がパラーの前にいる間に、騎士が席を取ってくれた。ただし、「レイナ・フェスティユ様のために場所を空ける！」と他の

客を追い出すのではなく、あくまでも空いた席を確保する方針で。

レイナは席取りしてくれた騎士に礼を言い、カスミと二人で席についてアイスを出す。ここらのアイスは、平たい皿の上に半球型にくり抜いたアイスを二つ、並べる形になっている。

「レイナ様の故郷にもアイスはありましたか？」

カスミが問うてみると、レイナは苺味のアイスのスプーンで掬い、こっくり頷く。

「もちろんあったよ。あっちの露店とかでアイスを買ったら、こういうお皿に載るものより、コーンやカップに入っているものが多かったな」

「カップはともかく……コーンとは？」

「えっと、確か……ビスケットを固くしたような生地で、それを器型にしているの。こんな形ね」

そう言ってレイナは、テーブルに指でコーンの形を描く。カスミが見る限り、円錐形の容器のようだ。

「この、この部分にアイスを載せるの。上手くバランスが取れたら二つとか、三つとか重ねたりして。しかもコーンの場合、器の部分も食べられるんだ。ゴミも出ないから、買い食いには最適だったね」

「なるほど、食べられる容器ですか……」

ベルフォードの食文化を鑑みる限り、「食べられる食器」は、せいぜい瓜科の野菜や硬質な果実の実をくり抜いて、器にした料理くらいだ。クッキー生地のようなものを丸めて器型に焼くという発想はなかった。

「レイナ様の世界は、たくさん新しい知識で溢れていますね」

「そうだね……世界は広くって、私みたいな凡人もいれば、すっこ

く頭が切れてどんどん新発見しちゃうような天才もいたからね」

「……ちなみにレイナ様がお暮らしになっていた世界は、どれほどの人口でしたか？」

知的好奇心を擽られてカスミは聞いてみたが。

対するレイナの返事を聞いても、全くその数値の桁の見当も付かず、あまり知的好奇心を満たすことはできなかった。

アイスを食べた後は、最近できたばかりだという宝飾店へ。どうやらレイナは書記部の女性陣からこの宝飾店の噂を聞いたらしく、興味津々だった。

「レイナ様は、装飾品をご自分で選ばれることはあまりなかったですね」

「うん、基本カスミにお任せだったね。でも書記部のお姉さんに聞いたところ、このお店では宝飾品はもちろんだし、お客さんのオーダーを受けてオリジナルのアクセサリーを作ってくれるそうなんだ」
レイナが聞いた情報をまとめると。

この店は既製品の宝飾品を売るだけでなく、比較的安値の宝石やガラス石を使って、オリジナルで世界に一つだけのアクセサリーを作ってくれるそうなのだ。宝石やガラス石には小さな穴が空いており、客の好みの石を糸に通し、ブレスレットや指輪、ネックレスや

髪飾りを作ってくれるのだという。

何よりも女性陣の噂の種になっているのは、オリジナルアクセサリー作りが比較のお手頃な値段だということ。一級品の宝飾品ももちろんガラスケースの中に収まっているが、アクセサリー作りに関しては一般市民でも手が出しやすいよう、手頃な値段で提供している。

なお、この店は入り口が二つあり、高級宝飾を買い求める客用と、アクセサリー作りに来る客用で、ドアが違う。

今回、レイナの目的はもちろん後者だった。「世界に一つだけのオリジナルアクセサリー、作ります」の看板がぶら下がるアンティークなドアから店内に入ると、なるほど、店内の客はほとんどが平民で、皆、貴族のお嬢様の出で立ちをしたレイナを見て驚いていた。

「こ、これはようこそいらっしゃいました、お嬢様方……」

奥の方からせかせかと、エプロン姿の中年女性がやってくる。ネームプレートを見る限り、店長のようだ。

カスミはパラソルを畳んで騎士に渡し、レイナがにこやかに応える。

「初めまして。職場でこのお店の話を聞いてやって来ました。私たちに対して特別な処置は必要ありません。護衛は外に残して、こちらにいる侍女一人だけ同伴いたします。……他のお客様方も、どうかごゆっくりなさってください。お願いします」

普通、こういう場では身分の高い女性は喋らない。以前二人で参加した、精霊討伐隊を送る夜会でもそうだったが、子爵令嬢であるレイナが喋ることなく、侍女であるカスミが用件を伝えるものなのだ。

だが、そうしなかったのはレイナたつての願いだった。貴族の令

嬢としてではなく、一人の娘として買いものをしたいという願いだ。店長はレイナの思いを汲んだのか、しばしの沈黙の後、ゆっくり頷いた。

「かしこまりました。ご用件がとおりでしたら、私どもをお呼びください」

「はい、ありがとうございます」

レイナは満足そうに頷く。もし、店長がレイナを令嬢扱いするのなら、「お呼びください」とは言わない。呼ばれる前に店長が馳せ参じなければならぬからだ。

レイナは嬉々として店内を回って、日光を浴びてきらきらと輝く小さな宝石に見入っていた。他の客たちはしばし緊張していたようだが、あまりにもレイナが普通の娘らしく振る舞うものだからか、間もなく自分の買いものに戻ってくれた。所々から、「あの黒髪、ひよっとして噂の……？」と聞こえてくるが、あえてカスミもレイナも無視した。実害がない限り、放っておいた方がいい。

レイナはある程度のアクセサリーのデザインを決めたらしく、さつさと自分の足で店長の所に行った。店長はしばらく、レイナの話聞いていたようだが、やがてにっこりと笑ってアクセサリー作りの道具をカウンターから出した。

カスミは少し離れたところで、店長と何やら話をしているレイナを見つめていた。こうやって人々と交流をしていくのが、レイナのやり方だ。レイナが「異世界の乙女レイナ・フェステイユ」であると薄々、客や店員たちも気づいているようだが、あえて何も言わない。それがまた、レイナにとって居心地がいいみたいだ。

カスミはちらっと戸口にいる騎士に目配せし、レイナに背を向けた。レイナの見守りは騎士に任せよう。いつまでもレイナの背後に

自分が立っていても、レイナも店長もやりにくいだけだ。

カスミは、店内の奥にある廊下をゆっくり歩く。レイナから聞いていたように、この店は入り口が二つあるが、内部は繋がっている。そこを進むと、今度は様相の全く違う宝飾店に出た。

ここはいわゆる、上流階級の貴婦人のためのエリアだ。店長もあちらとこちらで一人ずつ立てているらしく、あちらの店長は作業用のエプロン姿だったのに対し、こちらの店長はきちつと礼服用のドレスを着こなした若い女性だった。

ガラスのショーケースに並んでいるのは、いずれも一級品の宝飾品ばかり。だが、宝石に目が慣れてしまったカスミには分かる。普段、レイナが身につけている宝飾品は、このレベルではない。レイナがその値段を聞いたら卒倒してしまうくらい、超高級なのだ。もちろん、端の男爵家令嬢である自分では到底手に入れることのできない、仕事でしか接することのない逸品だった。ぐるりと店内を見回した後、カスミは踵を返す。と

「……本当に腹が立つわ！ 何ですの、この店！ こんなおもちゃ石でわたくしを誤魔化そうとも思っているの!？」

女性の金切り声と、何かを投げつける音。店員の女性が何やら言い訳する声。

ああ、面倒事が起きている、とカスミは内心、店員たちに同情する。すぐさま店長の女性が騒ぎのする方へ駆けていき、奥の部屋から出てきた令嬢に何やら説明している。

ちらつと見えたが、まだデビューしたてと思わしき令嬢だった。

「あなたも何とか言っつて！」と騒いでいるので、連れの男性でもいるのだろうか。

何にしる、騒ぎに巻き込まれたくはない。何よりも、この続き部屋にはレイナがいるのだ。店員たちは可愛そうだが、レイナが巻き

込まれる前にそれとなく退散しよう。

そう思ったカスミだが、次の瞬間聞こえてきた声に、脳みそが活動停止した。

「そうカッカするなよ、マデリーン。可愛い顔が台無しだ」

「だって、伯爵令嬢であるわたくしに対して、この仕打ちですよ

！ もういいわ！ お父様に言っただけから！」

「マデリーン、落ち着いて……」

ぎゃんぎゃん騒ぐ娘と、それを窘めようとしている若い男性の声。

カスミは、知っている。

この男性の声。彼は

この時の自分の反応を、カスミは後になって何度も悔やむこととなる。

冷静な侍女と純情書記官 4

思わず、振り返ってしまった。そのまま真っ直ぐレイナのいる店に戻ればよかったのに、男性の声に誘われるように振り返りばつちりと、目と目が合わさった。

カウンターの向こうで若い女性を宥めていた男性は、カスミを見てはつと息を呑む。男性の異変に気づいたのか、愛らしい顔をしかめていた令嬢もカスミを見て、不快そうに眉を寄せる。

「何ですか？ あなた、誰？」

「……失礼しました、わたくしは……」

「カスミ……？」

男性が呆然として呟いたため、カスミは言葉途中で顔をしかめ、内心毒づく。穩便に事を済ませようと思ったのに、この男ときたら！カスミ、と聞いて令嬢は思い当たる節があったようだ。不審そうな顔をとたんに、小馬鹿にしたような嘲笑の顔に変える。

「カスミ……ああ！ あれですわね！ ルーウェン男爵家の、行き損ないの売れ残り！ ステイプに捨てられた年増ね！」

散々な言いようだ。カスミは怒りを通り越して呆れてしまう。よく見ると、令嬢の腹部はほんのわずかだが丸みを帯びている。妊娠している、という話は事実のようだ。

カスミは観念して、彼らに向き直る。

「……お久しぶりですね、ステイプ。婚約者様とお仲がよろしいようで、何よりです」

「……ああ、まあな。カスミ、おまえは……」

「まあ、ステイブ！　こんな年増とお話をしても、あなたの品格が下がるだけですわ！　こんな年寄りのどこがいいのですか？」

少し黙れ、とカスミは業務用スマイルを浮かべつつ、令嬢を罵る。ステイブ　カスミのかつての婚約者は、おどおどとカスミと令嬢を順に見ている。確か、彼の手紙によれば隣にいる令嬢は十六歳。なるほど、カスミは彼女より六つも上だが、さすがに「年寄り」扱いされるのは気に入くない。何と言っても、レイナも若くは見えるがもう二十一歳なのだ。敬愛する主君まで貶されたようで、腹が立つ。

カスミは笑みを絶やすことなく、それとなく体の向きを変える。とにかく、レイナに気づかれる前にこの場を収めなければ。

「ご令嬢のおっしゃる通りです。ステイブ、私はあなたの幸福を願っております。どうか、お隣にいらっしやる婚約者様を大切に……」

「カスミ、君も恋人と一緒に来たのではないのか」

……レイナによれば、今のステイブのような人間を「ケーワイ」と言っそうだ。

カスミの頬がひくつと引きつる。令嬢はなかなかその場の空気を察してくれないステイブの腕を取って、ヒステリックに騒ぎ出す。

「ステイブ！　もういいでしょう、こんな女！　興ざめだわ。さっさと屋敷に帰りましょう！」

そうしてくれ、とカスミは笑顔で内心、令嬢を褒め称える。この調子で行けば、令嬢はカスミという人間に腹を立てたままご退場いただく。憎まれ役を負うのは気が進まないが、彼女のヒステリーに巻き込まれた可愛そうな宝飾店の店員たちのためにもなる。そして、さっさと帰ってもらったらレイナに心配を掛けなくて済む。

だが、ステイブはどこまでも「ケーワイ」だったようだ。

「待つてくれ、カスミ。君は……怒っているのか？」

「は？」

「僕がマデリンを選んだから、怒っているんだろう？ 確かに可愛そうなことはした。恋人同伴でないとしたら……君には決まった相手がいないのだろう。僕がマデリンを選んだ代わりに、僕の知人を紹介しておこうか」

何だ？

この男は、何を言っている？

長い間、疎遠になりながらもカスミの心を繋いでいた、あの優しいステイブなのか？

婚約破棄されながらも、彼からの手紙を捨てきれずにいたカスミの気持ちは、何なのか？

カスミは嘆息する。どうやら、自分とはんでもない男に長年懸想していたようだ。百年の恋も冷める、とはこのことだ。

「……結構です」

「何？」

「私は私の道を進みます。結婚できずとも、私は今、既に幸せを掴んでいます……」

「あら、じゃあいいじゃないの」

拍子抜けたように肩を落とす令嬢。本当にこの令嬢は、冷静になると非常に聞き分けのいい少女だ。対するステイブは、なおも食いが下ってくる。

「何を言っている。君ももう二十二歳だろう。君が若いうちに結婚

できなかった非は、僕にある。責任は取るよ」
ぴきり、とカスミの額に青筋が走る。

責任を取ろうとか言う男が、公衆の面前で女性の年齢を暴露するものなのか。大声で「二十二歳・婚約者なし」を暴露されるくらいなら、十六歳の少女に「年増」と言われる方がずっと気持ちが悪く、貼付けたような業務スマイルが崩れそうになった、そこへ

「カスミ……どうしたの？」

心配そうな声。体の奥で沸騰していたマグマが急速冷却され、カスミは振り返って心の中で己を叱り飛ばす。

胸に小さな紙袋を抱えたレイナが、おずおずといった様子で廊下の奥からこちらを覗いていたのだ。レイナも店内の異様な雰囲気を感じているらしく、体の半分以上を柱の向こうに隠して、黒い目をきよときよと動かしている。

「あの、こっちはもう買いものが終わったから……」

「あら？ その髪、ひよつとして……」

やはりこの令嬢は、聡いようだ。彼女はレイナの容姿と髪を見て、瞬時にその正体に気付いたらしく、さっと身を引いた。

だがやはり、ステイプの方が厄介なことをしてくれる。彼は話に割り込んできたレイナを見、チツと舌打ちした。

「部外者は黙っていてくれ。カスミの連れか？ 随分地味な少女だな」

その言葉に、カスミは反応した。自分のことを言われている間はリミッターを外さずにいられたのだが、レイナのこととなるとそうもいかない。

「地味」と言われたレイナ本人はきよとんとしているが、カスミ

はすたすたとレイナに歩み寄り、そつとその手を取る。

「見苦しい場面をお見せしました。すぐに戻りましょう」

「いいの？ 取り込んでいるみたいだけど……」

「そうだ、今僕たちは大切な話をしている。……ああ、さてはカスミ、僕が婚約破棄したからといってこんなみすばらしい庶民の面倒見をさせられているのか」

「ちよつと、ステイーブ」

くいくいと令嬢がステイーブの袖を引っばる。令嬢はすっかり熱も冷めたらしく、玲奈に暴言を吐く婚約者を見て青ざめている。

「おやめくださいな、あの方、きつと、庶民じゃありませんわ……」
「何を言っている、マデリーン。没落したルーウエン男爵家が貴族と交流できるはずないだろう」

レイナ・フェステイユが男爵家令嬢であるカスミを専属侍女に抱えていることは、王城で暮らす者の大半は知っていることだ。だからこそ、普通の感性を持った者であればレイナの侍女であるカスミにも最低限の礼を払う。レイナの侍女を貶すことは、レイナを貶めることにも繋がる。そしてレイナの機嫌を損ねれば、レイナを溺愛する王妃や、玲奈を保護する立場であるマリウス国王の不興も買いかねない。

それほどの一大事であるということ、この男は全く分かっていないようだ。傍らにいる婚約者の方は必死で、彼を諭そうとしているのに。

いよいよ頭が痛くなってきた。レイナは最初、戸惑ったように黙っていたがカスミを侮辱されたため、目つきを鋭くした。そして彼女はカスミに持っていた小袋を預け、一歩前に歩み出てにつこりと微笑んだ。

「お初お目に掛かります。カスミの知人の方でしょうか？」

「まずは自分から名乗れ、平民」

「ステイーブ！」

悲鳴を上げる令嬢。お腹が大きいのに、ストレスになっているのではないだろうか。

レイナはにこやかな笑みを崩すことなく、ステイーブと令嬢に向かって優雅に礼をする。

「これは失礼いたしました。私、こちらにいるカスミの友人として、レイナ・フェステイーユと申します。以後、お見知りおきを」

「フェステイーユ？」

ステイーブは最初、レイナの家名ばかり意識を取られていたようだ。確かに、フェステイーユ子爵家の名だけだと、レイナはステイーブと同レベルになる。だが

ステイーブの顔が徐々に色彩を失い、すぐに青を通り越して真っ白になる。元々色白のため、血管すら浮いて見えた。

「ま、まさか……え？ あの、異世界の乙女……？」

「そも呼ばれていますね。お恥ずかしい限りです。して、あなた方のお名前は……？」

「ぼ、僕は何もしていない！ 知らなかったんだから仕方がない！ ステイーブはいきなり店の天井に向かって吠える。そして、ぽかんとする令嬢の手を取って、足早に店から飛び出していく。

ガラランガラン！ と店のベルがけたたましく鳴る。レイナはしばし、静かな眼差しでステイーブの背中を見送り、そして店内で硬直していた店員たちを見て、「ああ」と笑みを戻す。

「ごめんなさい、皆さん。お邪魔してしまったようですね」

「え、い、いえ……」

店員たちも、「まさか」ここにいる黒髪の少女　実際は二十一歳だが　がかの有名な「異世界の乙女」であるとは思わなかったのだろう。すっかりへっぴり腰になっており、何人かはふらりと椅子に頼れている。

「今日は急ぐのですが……また後日、こちらのお店のアクセサリーを見に来ますね。では、失礼します」

レイナはくるりと踵を返す。脱力していたカスミも慌てて、彼女の後を追う。

冷静な侍女と純情書記官5

レイナは自分がやってきた、廊下の方には行かなかった。しゃんと背筋を伸ばして、先ほどステイブたちが出ていった店のドアから堂々と出ていく。

護衛の騎士たちも、すぐに裏側からやって来た。レイナは彼らに、馬車を呼ぶように命じた後、気遣わしげにカスミの顔を覗き込む。

「カスミ……大丈夫？」

「レイナ様……」

「あの人たち、雰囲気悪かったね……ごめん、カスミが馬鹿にされたからカツとなっちゃった」

カスミは首を横に振る。カツとなったと言うわりに、レイナは冷静だった。あの場をうまく収められたのは、レイナが静かにステイブたちを威圧してくれたからだろう。

だが、レイナは自分の家名や渾名を盾にすることを快く思っていない。カスミもそのことをよく知っているからこそ、先ほどのレイナの行動が非常に申し訳なかった。フェステイユ家の名を出すこともレイナは躊躇っただろうに、カスミのために盾になった。

本当なら、カスミが彼女を守らないといけないのに

「カスミばかり、私を守らないといけないわけじゃないと思うよ」カスミの心を読んだのか、レイナが静かに言う。カスミが顔を上げると、レイナは振り向き、ニツと微笑んだ。先ほど店内で見せた涼やかな笑みではなく、レイナらしい、素の笑みだ。

「前、カスミは私を庇って紅茶のカップを投げられたことがあるで

しょ？ あの時は本当に、カスミが正しかったんだ。でも、今回はカスミが黙って言いたい放題されるのは、道理に合わないと思った。カスミは私のことを守ってくれるけど、たまには私にも、友だちとしてカスミを守らせてね」

「レイナ様、しかし……」

「分かってるよ。カスミは私が怪我しないように気を配ってくれている。でも、私だってカスミがやられているのを黙って指銜えて眺めるほど暢気じゃないからね。使えるものはとことん使おうと思うよ。私も、いつまでも小娘だって見下されるわけにはいかないからね」

レイナは二十一歳という年の割に、非常に若く見える。レイリア・ハルヴァークの名で通っていた頃は、十七歳で登録していたが、それでもお釣りが来るくらいの外見年齢だ。

レイナ曰く、「こっちの世界の人が大人っぽ過ぎるんだよ！」とのことだが、黒髪黒目というモノトーン系の色素で、しかも幼い顔立ちのため、レイナが名乗らない場合、小娘だと馬鹿にされることもある。

レイナは、二十一歳の子爵令嬢として、強くありたいと思っている。そして同時に、自分の持っている身分や権力を、誰かのためになら使いたいとも。

カスミはしばし、黙って考えていた。そしてゆっくり、口を開く。

「……レイナ様は私のことを、友だちと思ってくださるんですね」
「う、うん。そりゃあ、時と場合に寄るけど……今は、友だちモードだね」

叱られると思ったのか、レイナの声が焦っている。カスミはゆるゆると首を横に振る。大通りの向こうに、フェスティール家の馬車が見える。

カスミはレイナを見る。

「……では、友としてのお願いがあります。どうか……先ほど店で遭遇したステイブという男のこと。彼のことを……お話ししてもよろしいでしょうか」

レイナは黒い目を見開く。そしてすぐに、こっくりと頷いた。

「……分かった。何でも聞くよ、カスミ」

翌日。カスミは書類を持って、王城の廊下を歩いていた。

今日は、レイナの着付けを手伝う予定は入っていない。近衛騎士団での仕事で急ぎのものがあるらしく、レイナもヴェインもそちらに夜まで缶詰になるそうだ。

レイナはヴェインと傍目から見ても非常に仲のいい恋人同士だが、どちらか公私をきつちりと分けている。カスミは書記部や騎士団エリアまで行かないので細部はでは知らないが、レイナが書記官として仕事をしている間は、どちらも私情を挟まず、てきぱきと仕事をこなす。夜にダイナーに行く場合は、一旦近衛騎士団の部屋で分かれてから、それぞれ着替えをして合流する。そうだったら、二人の間柄は「上司と部下」ではなく、「初々しい恋人同士」に変わる。カスミはきちんと時と場合を考えるレイナのことを、非常に好ましく思っていた。同時に、レイナの意思を尊重してくれるヴェインのことも。

今、カスミは侍女仲間と一緒に侍女長のお遣いをしていた。専属侍女であるカスミも、主人であるレイナが書記部で仕事中はこうして、他の侍女と一緒に仕事をやる。時にはエデル王妃に呼ばれることもあるが、王妃は生まれたばかりの王女の世話で忙しいらしく、最近あまり呼ばれない。

カスミは事務書類を持って、貴族の執務室に行く途中だった。大事な書類を落とさないよう胸に抱え、廊下を静かに歩く。他の侍女とは行き先が違っているので、一人静かな場所を歩いていると、ゆっくりと考え事ができる。

昨日、カスミは思い切つてレイナにステイブのことを打ち明けた。ステイブは没落の危機を免れた子爵家の息子で、長年のカスミの婚約者であったが、国内有数の伯爵家の次女を妊娠させ、彼女と結婚することにしたこと。カスミは書面であっさり振られ、二十二歳にして「婚約者なし」の烙印を押されてしまったこと。昼間に会ったのがステイブとその新しい婚約者で、公共の施設でありながら険悪な雰囲気になったこと。

ぼつぼつと明かすカスミを、レイナは胸を貫かれたかのような苦しい表情で聞いていた。レイナのことではなく、カスミの事情だというのにレイナは苦しみ、全てを語り終わったカスミをぎゅっと抱きしめてきた。

「カスミ……！ ごめんね、そんな辛かったのに、私……」

「なぜレイナ様が謝られるのですか」

「だって、カスミは大変な思いをしていたのに、私はヴェイン様と……」

声を震わせるレイナを見、カスミは唇を噛む。違う。レイナを責めたいから、告白したのではない。

婚約者に振られたカスミの側で、レイナは恋人であるヴェインと蜜月の真つ最中だった。カスミに着付けを頼み、ヴェインとの待ち合わせ場所までエスコートしてもらい、夜にはマッサージをしてもらう。レイナはそのことで自分を責めている。

「レイナ様が気に病まれる謂われは一切ございません。確かにステイブに振られたことは傷心でしたが、私はヴェイン様との逢瀬に向かうレイナ様にお仕えすることが、何よりの幸せです。私の手で美しくなるレイナ様を見ていると、それだけで私の心は癒されるのです」

この言葉に偽りは無い。咲き初めたばかりの花のように恥じらうレイナは、いつだってカスミを癒してくれる。レイナがいてくれるから、カスミを頼ってくれるから、生きていける。

「レイナ様は、私の生きる糧なのです。レイナ様が幸せになられることが、私の幸せ。もしレイナ様がいらっしやらなかったらそれこそ、私はステイブのことが忘れきれず、正気を保っていられなかったかもしれません」

カスミが熱を込めて語っていると、徐々にレイナも落ち着きを取り戻す。カスミが気持ちを落ち着けるハーブティーを淹れている間に、レイナはだいぶ安定してきたようだ。

「……カスミは、今の生活が幸せなのね？」

レイナに問われ、カスミは彼女に温かいカップを渡し、にっこりと微笑む。

「はい。二十二歳は確かに年増扱いされても仕方ありませんが……一生独身が決まったわけでもありませんからね。今はレイナ様にお仕えすることを念頭に置き、結婚のことはまた考え直します」

「……分かった。あ、でも、もし辛くなったり、しんどくなったら

言つてね。話を聞くくらいなら……できるから」

「それくらいしかできないけど……」ととたんに及び腰になるレイナ。カスミは小さく笑い、静かにレイナを見つめる。

「滅相ありません。……レイナ様、こんな私の愚痴を聞いてくださり、ありがとうございます」

レイナが自分を責め始めたときはどうしたものかと思つたが、最終的にはレイナに打ち明けてよかったと思う。「これから特別は処置は必要ありませんので」とも念押ししたので、今後もレイナには通常通り接してもらつことにしている。

「……カスミ」

名を呼ばれたカスミは、慌てて回想モードから戻ってくる。顔を上げると、回廊の先からひよっこりと、同僚の侍女が顔を覗かせたところだった。彼女はちよいちよいとカスミに手招きしている。

「どうしましたか、ミーシャ」

「どうしたもこうしたも……階下であなたの婚約者が大暴れしているわよ？」

同僚ミーシャが困惑気味に言う。カスミは一呼吸置いた後、ミーシャに詰め寄った。

「婚約者とは……ステイブのことですか？」

「ええ。なんか、書記部の誰かと言い合っているみたいなの。私もさっき、書類を届けに行く途中で遭遇して……何だかあなたの名前を叫んでいたから。痴情のもつれ？」

「行ってみます。教えてくれてありがとう、ミーシャ」

カスミはミーシャに持っていた書類を預け、挨拶もそこそこに彼女の脇を通り過ぎる。カスミの背後に、「結構な人だからになってたわよ！」とのミーシャの言葉が掛かる。

ミーシャには悪気はない。なぜならミーシャにも、カスミが婚約破棄されたことを伝えていない。

だが、今になってなぜステイブが。カスミはここ最近常連になりつつある頭痛に悩まされつつ、階段を下りる。

冷静な侍女と純情書記官6

ミーシャが最後に言ったように、下階はどやどやと人通りが多く、どうやら大半の者は廊下が通行止めになっていて立ち往生しているようだ。ここが王室居住区でなくてよかった、と思いつつ、カスミは人混みの中突っ込んでいく。

「すみません……避けてください、入ります……すみません……」

「……ふざけるな！ これは私に対する最大の侮辱だ！」

人混みを掻き分けると、聞き慣れた声が耳に飛び込んでくる。昨日の昼間に聞いたばかりの、元婚約者の怒声だ。

廊下の中央、人混みが絶えた場所に、予想通りの人がいた。彼はステイブは顔を真っ赤に染め、自分と対峙する何者かに詰め寄っている。どうやら、カスミが登場したことに気づいていないみたいだ。

「私はおまえに決闘を申し込む！ 庶民でありながら私に盾突いた報いだ！」

「お断りする。俺の両手は、剣を握るためにあるわけじゃないんでね」

激昂するステイブと対照的な、落ち着いた声。カスミははつとして、その人物を見やる。

少しだけよれた、書記官の制服。ボサボサの茶髪に、ありふれた青い目。

彼の足元には、純白の手袋がぼてりと落ちている。だが彼はそれを拾おうともせず、腕を組んでまっすぐ、自分の正面にいるステイブを見据えていた。

「俺が武官じゃないことは、このバッジを見れば分かることだろう？ どう見たってフェアじゃない戦いをふっかけないでくれよ。それにこんな廊下の真ん中で騒ぎを大きくして、迷惑千万だ」

「貴様！ 平民の分際で！」

顔を真つ赤にして怒るステイブは、今にも腰に下げた剣を抜きそうな勢いだ。対する書記官はやれやれとばかりに首を振り、その時、ぱつちりとカスミと視線をぶつけ合った。

「あ、あんた……」

「な、なにをしているのですか？」

思わず間拔けな質問が口を衝いて出てしまう。カスミに問われた青年はぱつが悪そうにそっぽを向き、遅れてカスミの存在に気づいたステイブが声を張り上げる。

「なんだ、いたのかカスミ！ 君も哀れな人だ。こんな薄汚い庶民に付きまとわれるなんてな！」

嘲ったようにステイブは言うが、カスミははて、と首を傾げる。この青年が付きまとっているのは、カスミではなくて

ステイブに煽られた青年は、むつと眉を寄せてステイブを睨み付ける。

「付きまとうなんて失礼だな。俺はただ、俺の知人が侮辱されたからそれに異を唱えたんだろうが」

「俺の知人？」

「えーっと……あんた、のつもりだけど」

青年はぼりぼりと頭を掻く。それを聞いて、カスミはははあ、と肩を落とした。要するに、ステイブは王城内でもカスミの悪口を言い、それを聞きつけた青年がステイブに物申したのだろう。

レイナを尾行しているときにも思ったのだが、本当にこの男は、いざというときの行動力がすごい。向こう見ずとも言える。

「なるほど……それで、言い合いになつてステイブから決闘を申し込まれたのですね」

「えっ、これって受けるべきなの？」

「受けなくていいです。あなたの主張と判断は正しい。武術を嗜む者同士ならともかく、あなたは文官。剣ではなく知能で国に貢献する人間です」

そこでカスミは顔を上げる。辺りを見回すと、やはり、数名は騎士団の者も姿が見えた。

「ステイブ・ジェファソンを捕らえてください。この書記官は被害者です」

「なっ……！ カスミ、君のことを思つてのことなのに！」

カスミの号令を受けて人混みから出てきた騎士団。彼らに詰め寄せられたステイブが、まさか、とばかりに顔を青くする。

「君がこのまま売れ残」

「私を売れ残りにしたのは誰ですかっ！」

カスミは眦を吊り上げ、ステイブを睨み付ける。カスミが声を荒らげたためか、ステイブだけでなくカスミの隣にいる青年もぎよっとした。

「婚約だつて、そちらから擦り寄つてきたくせに、用がなくなつたらあつさり切り捨てて！ 私はあなたと潔斎したつもりです！ 今さら私の面倒を見るなんて、正義の味方になつたつもりですか？」

「ち、違う、僕はそんなつもりじゃ……」

「でしたら、さつさとお屋敷に帰つて新しい婚約者様の体調を気遣つて差し上げなさい！ 彼女は妊娠中でしょう！ 将来の妻を放つておいて私に関わつたりしないでください！ もう二度と、私に関わらない、私の名前を出さないでください！」

カスミが言っている間に、ステイブは両脇をがちり騎士に捕らえられ、ずるずると引きずられていく。引きずられながらも、ステイブは「違う！ 騙されたんだ！」「本当に愛しているのは君だ！」など叫んでいたが、どれもカスミの心には響いてこなかった。嵐が過ぎ去り、周りにいた人たちはそそくさと退散していく。交通規制も解除されたため、仕事途中の人はバタバタとカスミたちの前を走り抜けていく。

カスミはふうつと息をつき、自分の隣で立ちつくす青年を見上げた。

「それで……あなたはどうして、ステイブの喧嘩を買ったりしたのですか？」

「え？」

青年は振り返る。ステイブに立ち向かっていた先ほどと違って、ひょうきんな声だ。

「そりゃ……あんな大声であれやこれや言ってる奴を見たら、いい気がしないだろ。しかも悪口の相手はあんただし……これ以上喋らせたらあんたのプライドにも関わると思っ、首を突っ込んだんだ……」

「はぁ……今回はうまくいったものの、下手すればあなたも騎士団に連行されていたところでしたよ」

カスミは深いため息をつく。ここで下手に彼が動いていれば、喧嘩両成敗で両方とも警備にしょつ引かれることになっていた。書記官である彼が騎士団に捕まったとなると、書記部にも影響が出る。ひいては、書記官であるレイナにもその余波が及ぶことになるだろう。

「放っておけばよかったのに……私はもう、いろいろすっぱり諦め

いた。だがすぐにニツと笑い、どんと自分の胸を拳で叩いた。

「ど、どういたしまして！　へへ、俺もやっとあんたに認められたな！」

「認めてはいませんが……」

「あ、なんなら今日のことを別の形でご褒美をくれないか？」

「内容によります」

「えーっとなあ、れ、レイナ様の私服姿を一度拝みたくて……できたら、薄手のワンピースで」

「石、投げていいですか？」

「は？　……え、えええ！　やっぱり持ってたのか！？　え、ちょっと、さすがに痛いからやめて！」

「発情期の獣は速やかに討伐するに限ります。覚悟を、ジエレミー・グランツ」

「やめて、カスミさんやめてー！　ーっ！」

その日の夜。

カスミは、自室の机の引き出しを開けた。中にあるのは、きれいな封筒と便箋。

カスミはそれを取りだし、そっとランプの火に近づけた。上質ではあるが熱には強くない紙は、あっという間に隅から黒く炭化し、悶えるように擦れながら黒い塊に慣れ果てていった。

はらはらとテーブルに舞い落ちた灰を、何の感情も込めずさっさ

と片付ける。

もう、手紙は必要ない。

これからは、前を向いて歩いて行けそうだから。

椅子から立ち上がり、ベッドサイドの窓を押し開ける。夏の夜風が室内に吹き込み、カスミの明るい金髪を軽く揺らす。

明日から、何だか奇想天外でわくわくするような日々が始まりそうだ。

黄金の満月を見上げ、カスミはそう思った。

冷静な侍女と純情書記官6 (後書き)

近くにレイナやクライドがない時のジェレミーは、基本的にいい奴です。

リーリエの花を、あなたと共に1

秋の爽やかな風が荒野を吹き抜ける。

前に来たときは、空は雲で覆われていて、お世辞にも快適な場所とは思えなかった。それもそうだ。あの時は冬で、なかなか厳しい時期だった。雪は降っていなかったけどね。

「……ここに来るのも久しぶりだ」

私の隣でヴェイン様が、しみじみと言っている。彼は、馬車の車窓から臨める荒野の風景をじっと見つめていた。

「相変わらず、ここは寂しい場所だ。おまえも、弟同伴とはいえ、よくこんな場所に来たな」

「そうですね……ヴェイン様を助けた一心だったので」

私は心える。きゅっと、私の手を握るヴェイン様の手に力がこもる。

ベルフォード王国の僻地である、元バドライン伯爵領土。バドライン前伯爵が投獄されたから、ここはベルフォード王国所有の領土に変わっている。聞いた話では、悪道の伯爵家が崩壊してからはずっと、この人たちの暮らしもよくなっていた。マリウス陛下も、きちんと領土の隅まで目を光らせているんだ。

私が前にこの乾燥した土に足を下ろしたのは、今から一年近く前。メリダ・バドラインが飼っていた悪の精霊にヴェイン様が支配される直前。ヴェイン様の過去を紐解くために、私はぶつぶつ文句を言うイサークと一緒にやってきた。

あの時、私はヴェイン様のかつての婚約者であるアリーシャのこ

とを知った。私は荒野の村でアリーシャの遺品に触れ、そのことで彼女の精霊を介してアリーシャの残留意志を辿ってヴェイン様たちの過去を知ることができた。その時に、アリーシャのお墓にもご挨拶している。

でも、ヴェイン様はずっとアリーシャのお墓参りに行けずにいた。精霊討伐隊の事後処理が終わるのにも時間が掛かって、やっとヴェイン様が遠方への個人的な小旅行が許されたんだ。ヴェイン様は、私にも誘いを掛けてくださった。私も、断るつもりはなかった。

「もう一度……きちんと、アリーシャにも挨拶しておきたいんです」
揺れる馬車の中で、私は言う。

「アリーシャの最期の願いを、私が聞き届けるって……」

「あいつ、なんて願ったんだ？」
ヴェイン様は最初、興味を惹かれたように尋ねてきたけど、私が口を開く前に「いや」と気分を変えたようだ。

「やっぱり言わなくていい。あいつのことだから……なんとなく、予想は付く」

「では、アリーシャのお墓の前できちんとそのことを確認してくださいね」

私は言っ、ヴェイン様の体にそつと身を預けた。私の手を握っていたヴェイン様の手が解け、私の体にその腕が回る。

「そうだな……俺も、おまえのことを紹介したい」
「はい……」

馬車は、揺れる。

アリーシャが亡くなった辺境の村　イーシュルン地方へと、進んでいく。

一年前に訪れた、イーシュルン地方辺境の村。

訪問する事は事前に手紙を飛ばして伝えていたから、馬車から降りた私たちを見覚えのある青年が出迎えてくれた。

白い法衣を纏った彼は、最初私たちを見て微かに目を細めた。でも、私が挨拶に先立ってミーナとティルを足元に呼び寄せると、彼は目を丸くし、そしてゆったりと微笑んだ。

「ああ……一年ほど前にいらしたお嬢様ですね。ずいぶん大きくなられましたね」

「え、ええ……大きくなったと言いますか、これが元の姿と言いますか……」

「ええ、皆までおっしゃらなくても大丈夫ですよ。事情のある方だとは察しておりましたので」

そう言っつて青年　私とイサークを案内してくれたお兄さん神官は微笑んで、そして私の隣にいるヴェイン様に視線を動かす。

「……そちらにいらっしやる御仁は？」

「あっ……そうですね、では改めて。私、レイナ・フェスティューと申します。こちらにいらっしやるのは、私の恋人のヴェイン・アジエント様です」

「以前、レイナが世話になったそうだな。感謝する」

そう言っつてヴェイン様は被っていた帽子を取って挨拶した。うん、「感謝する」って一言で言ったけど、本当にいろいろあったからね。

メリダ・バドラインに執着されたヴェイン様を救えたのは、この村でアリーシャの残留意志とふれあえたからだ。ひいては、私たちを案内してくれた神官のおかげでもある。

神官はヴェイン様に顔を上げるように言って、法衣の裾を払って村の風景を手で示す。

「お嬢様の方が以前もご覧になったと思いますが……見ての通り、何も無い小さな村ですが、あなた方のご知人の遺品は今でも保管しており、お墓も念入りに掃除をしております。遺骨をお渡しできないのが心苦しいのですが……」

「構わない。アリーシャのためにそこまでしてくれて、ありがとう」
ヴェイン様は真面目な顔で頷いた。

その後、私たちは馬車を村の入り口で待たせ、神官についてまずは、教会に向かった。今回の目的は聖地巡礼じゃないけど、私もヴェイン様も祭壇の前に跪いて祈りを捧げた。隣にいるヴェイン様は、長い時間何をお祈りしていたんだろう。

その後、死者の遺品を保管する物置に移動する。一年前と変わらない、ひんやりとした狭い小部屋だ。

前と同じ場所に、アリーシャの遺品があった。私は何も言わずヴェイン様に持っていた手袋を渡し、神官が手袋を填めたヴェイン様に遺品を渡すのを見守っていた。

「これは……全部、アリーシャのものだ」

ヴェイン様の声が震えている。ボロボロになった革の鞆の中から、丁寧に物を取りだしている。

まずは、手紙の束。紙紐でまとめられたそれらは、どれもヴェイン様がアリーシャに宛てて綴った手紙。

ヴェイン様の肩が震えている。そうなんだよ、アリーシャは別れ

際に、手紙は捨てたって言ってたけど、全部持っていたんだよ。

続いて、小さな小銭入れと朽ちたコルメル画が取り出される。ヴェイン様の執務室でも見たことがある、ヴェイン様とアリーシャのツーショットだ。

「これ……最新のコルメル機械を持って、アリーシャの父親に撮ってもらったんだ」

ヴェイン様は呟いて、そっとコルメル画の表面を指で撫でている。アリーシャが亡くなったときに付いたのか、よく見ると紙の端っこに赤黒い染みが付いている。

そして、最後に出てきたのは

「……っ」

ヴェイン様が息を呑む。肩越しに見てみると、その手の中には小さな栞があった。かつてヴェイン様がアリーシャへの手紙に同封した、小さな石が填った栞だ。

「……全部、持っていてくれたのか……」

ヴェイン様の声が震えている。ぽたり、と栞の上に大粒の滴が垂れる。

「おまえは……俺を想っていてくれたのか……」

「ヴェイン様……」

「……レイナ、おまえは全てを知っているのだろうか？」

ヴェイン様は顔を上げることなく言う。私は少し躊躇ったけれど、ゆっくり頷いた。

「……はい。今だから言えますけど、私はレイナの姿の時、精霊を介してアリーシャの残留意志に触れました。その時に、彼女の身に何が起きたのか、全てを知ることになったのです」

「……それ、聞いてもいいか？」
かたり、と音がして、神官が部屋を出ていったことを知る。私たちのことを気遣ってくれたみたいだ。
私は頷き、ヴェイン様と一緒に近くにあった古い椅子に座る。そうして、アリーシャとバドライン伯爵とのやり取りを全て、彼に打ち明けた

びたん、と遠くで水が滴る音が響く。

「……そういうことだったのか」
ヴェイン様は掠れた声で呟く。話をしている間に、ヴェイン様は私の肩に寄り掛かっていた。私の肩に額を押し当てる形になっているから、表情は分からない。

「あいつは……俺を守るために、バドライン伯爵の用件を受け入れて……騙されて、両親も殺されて……」
「アリーシャも辛かったです。だから、あなたを守るためにあなたに嘘を付いて、酷いことを言っ……その時のアリーシャの胸の痛みも、私に伝わってきました」
私はそう言っ、膝のすぐ脇にあったヴェイン様の拳に自分の手の平を乗せる。ヴェイン様の手は大きいから、とてもとても私の手じゃヴェイン様の拳を包み込むことはできない。

「アリーシャは、自分の精霊に思いを託して、あなたへの願いをず

っと祈ってきたのです」

ヴェイン様は何も言わない。何も言わないけど、私の手の平を振り払うこともなく、なすがままにしている。

アリーシャを愛していたヴェイン様。

ヴェイン様を愛していたけれど、その愛を成就させられないまま、非業の死を遂げたアリーシャ。

まだ十代後半だった二人を引き裂いた、無情な刃。

あの運命の日からもう、十年近く経っている。

長かったけど、やっとアリーシャの元にヴェイン様が戻って来れた。

アリーシャ、遅くなったけど、あなたの思い、ちゃんとヴェイン様に伝わったよ

しばらくヴェイン様はじっとその格好でいたけど、やがて目元を拭って立ち上がった。ヴェイン様が神官を呼ぶと、彼は間もなく続き部屋から出てきた。

「アリーシャの遺品だが……ここに預けていて構わないだろうか」
ヴェイン様の申し出に、神官は快く頷く。

「もちろんですが、よろしいのですか？」

「ああ。……アリーシャも、この方がゆっくり体を休められるだろう。……あいつはもう、自由だから。自分の足で、あいつの精霊の翼で、王都でもどこでも飛んでいけるだろう」

ヴェイン様は言った後、私と神官にアリーシャの墓参りを申し出た。

リーリエの花を、あなたと共に2

墓所までの道は、私も覚えている。一旦馬車に戻ってお供え用の花束を持ってきた後、「お帰りになった時用に、お茶を淹れておきますね」と言う神官に見送られ、私たちは手を繋いで墓所までの道を歩く。

相変わらず村は貧しそうだけど、一年前よりは村人の顔色がよくなったように思われる。皆も、私たちがベルフォードの貴族だと分かったんだらう。ちょこつと頭を下げてきたから、私も彼らに小さく手を振っておいた。

村の端にある、墓所。私はヴェイン様の手を引いて、アリーシャの墓石まで誘う。

「ここですよ、これ。村の方が作ってくださった、アリーシャのお墓です」

白い、つるりとした墓石。神官が事前に掃除をしてくれていたんだらう、墓石はつやつやしていて、その前にはまだ新しい花が供えられている。真っ白な花。前も見た、確かリテイっていう名前の花だ。

「……ここに、アリーシャが眠っているのか」

ヴェイン様が呟いて、その場にしゃがんで持っていた花束を墓前に添える。

花は、ここに来る途中に買っておいた。二人で相談して購入した、白い花。

アリーシャの精霊と同じ名前の、リーリエの花だ。

「……やっと会いに来れた。アリーシャ」
ざわつ、と秋の風が吹き付ける。私は被っていたつば広の帽子が飛ばないように手で押さえつつ、ヴェイン様の後ろ姿を見つめていた。

「すまない、俺にもっと力があれば、おまえに酷な決断をさせることも、一人で寂しく死なせることもなかったのに……」

供えられたリーリエの花が、微かに揺れる。なんだか、花を通してアリーシャがヴェイン様を叱咤しているみたいだ。「何言ってるの！」って。

ヴェイン様も同じことを思ったのか、しばし黙した後、私を手招きで呼んだ。

「おまえはもう知っているだろうが……紹介する。俺の恋人の、レイナだ」

「初めまして……いや、お久しぶりです、アリーシャ」

私はヴェイン様の横にしゃがんで、冷たい墓石に挨拶する。リーリエの花がこそこそと揺れて、「ええ、お久しぶり！」とアリーシャが言っているようだ。

「俺は、おまえが死んでからというもの、だらしない生活を送っていた……おまえに裏切られたと思いこんだ俺は、女を信じることができなかった。その結果、弱みを悪の精霊につけ込まれ、自分らしくもなく馬鹿なことばかりしてしまった」

でも、とヴェイン様は私を引き寄せる。私は黙って、彼の腕の暖かさに身を委ねる。

「レイリアが……レイナが、俺を救ってくれた。レイナは、こんな俺でも愛してくれた。故郷に戻ることで、俺と共に生きることが

選んでくれた。今度こそ……俺は、胸を張っておまえに言えるよ。
俺は今、とても幸せなんだ」

「わざわざ、と風が吹く。「よかった！」とアリーシャは言ってくれているだろうか。

ヴェイン様が、誰かと一緒に幸せになってほしい。その願い、ヴェイン様にも伝わったみたいだ。

ヴェイン様は数秒間瞑目した後、「見ていてくれ、アリーシャ」と呟くと、私の手を引いて立ち上がった。

私たちは、アリーシャのお墓の前で向き合う形になって立つ。

「レイナ」

「は、はい」

真剣なヴェイン様の甘いテノールボイスに、耳がやられそうになる。

いや、ダメだ！ どう考えたって、今はメロメロになってる場合じゃない！

私は己を叱咤し、ヴェイン様を真っ直ぐに見つめ返す。

「俺は昔、自分が幸せになる資格も、権利もないと思っていた。近衛騎士団長として敵をなぎ倒していれば、余計なことを考えずに済む。そのままなんとなく、年老いて独りぼっちで死ぬんだろうと思っていた」

風が、ヴェイン様の鈍い金髪を撫る。何だろう、アリーシャが、ヴェイン様を応援しているみたいだ。

「でも、そんな俺をおまえが救ってくれた。人一倍勇敢で、向こう見ずで、意地っ張りなおまえだけど、おまえは俺を選んでくれた。俺が、アリーシャが、生きたこの世界を救ってくれた」

そうだ。私は半年ほど前に、ミナミの精霊を倒して悪の精霊を殲

滅させた。

それは、私がこの世界を守りたいと思ったから。ヴェイン様が生きるこの世界を、滅ぼしたくなかったから。

ヴェイン様と共に、生きてかったから。

ヴェイン様は私の手を取ったまま、静かにその場に膝を折る。そうして、私の手の甲に唇を落として囁いた。

「……我、ベルフォードの騎士ヴェイン・エージェントは貴女に最大の愛を捧げ、一生を貴女のために尽くすことを誓う。我が剣は国のために、我が心は貴女のために。貴女と共に歩むことを願う」
すらすらとその唇から紡がれるのは、カスミに聞いたことがある、このベルフォード王国で男性騎士が貴婦人に捧げる、愛の言葉。

それも、ただの求愛の言葉じゃない。これは
ヴェイン様が、顔を上げる。澄んだ紫の目が、真っ直ぐに私を射抜く。

「結婚してくれ、レイナ」

風が、吹く。

優しい風が、熱で火照った私の頬を撫で、遙かな荒野へと吹き抜けていく。

目の縁が、熱い。心臓がバクバク音を立てて、顔に熱が集まっているのが手で触れなくても分かる。

ヴェイン様に、求婚された。

熱を孕む紫の眼差しから逃れたいのに、目を反らすことはできない。彼の双眸には、私の顔がくつきりと映り込んでいる。私だけを映している。

「私で……いいの？」

掠れた声でやっと出てきたのは、あまりにも後ろ向きな質問。以前マーカス殿下に言い寄られていたときはハイハイと流せていたのに、今はそんな軽やかな対応なんてできそうにもない。

ヴェイン様はゆっくりと首を横に振る。あ、幻滅された、と瞬時に体が冷えたけど

「おまえでいいんじゃない。おまえが、いいんだ。おまえじゃないと、嫌なんだ」

「ヴェイン様……」

「心配なこともあるんだろう。でも、俺はおまえのことを心から愛しているし、それに」

そこでヴェイン様は、ニツと歯を見せて笑った。レンだった頃に何度も見たことがある、自信満々で不適なヴェイン様の笑みだ。

「俺以上、おまえを幸せにできる男はいないと、胸を張って言える」

「……ふふ、随分な自信ですね」

「自信家な俺は嫌いかな？」

「いいえ……どんなあなたでも、大好きです」

私は少しだけ、手に力を込める。
私は、ずっとこの日を待っていた。
薄汚い人さらいのアジトでヴェイン様と初めて会ったあの日から、
この笑顔には勝てない。
だから、私の返事は

「私も……愛してます、ヴェイン様」

世界で一番。故郷に背を向けてでも共にありたいと願った人だから

「私と……結婚してください」

「レイナ」

ヴェイン様が立ち上がる。とたんに、私の体はすっぽりとヴェイン様の腕の中に閉じこめられた。

「ありがとう……幸せにするから。ずっと愛するから……」

「私も……一緒に、幸せになりましょうね……」

アリーシャの願いの、通りに。

『ヴェイン。幸せになってね』
『優しい誰か。私の代わりに、ヴェインを幸せにしてあげて』

アリーシャ、あなたの願い、ちゃんと叶えるよ。

優しい秋の風が吹く中、私たちは何も言わず、抱き合っていた。

足元に供えられたリーリエの花が、静かにその香りを放っていた。

お父さん、お母さん、兄ちゃん、それから、真理恵。

お元気ですか。玲奈は、元気にしています。

何も言わずにいなくなってしまうって、ごめんなさい。私は今、地球とは全然別の世界で暮らしています。

こんな私も、今度結婚することになりました。相手は、とても素敵な方です。格好いいし強いし、ちょっと意地悪なところもあるけど、そこも魅力な人です。正直、私なんか彼の前じゃ霞んで消滅し

てしまいそうなくらいです。

結婚式は、春に行われます。王妃様たちが張り切って、最高の式を仕立ててくださるそうです。養父母たちも、私のために最高級のドレスを準備してくれるそうです。

みんなに花嫁姿を見せられないのは残念ですが、私はこれから幸せになります。

お父さん、お母さん。二十年間、私を育ててくれてありがとう。

兄ちゃん、何度も喧嘩したし、殴り合って青あざを作ってしまったこともあるけど、今ではいい思い出です。兄ちゃんも、早くいい人を見つけてね。

それから 真理恵。

アルなんとかさまのグッズは集まった？ 私がいなくなる直前には、今度の夏休みの即売会でグッズを買って言ってたね。私ももう、真理恵のコレクションを見ることはできないけど、これからも趣味を楽しんでね。楽しそうな真理恵を見ることが、私の楽しみでもあったから。

異世界で一度、真理恵の名前を借りちゃった。ごめんね。でも、そのこともきっかけで将来の旦那様とも出会えたんだ。だから、ありがとう。

みんな、今までありがとう。

水瀬玲奈は、もうすぐレイナ・アジエントになります。

いくつになっても、どんな姿になっても、私はみんなへの感謝の
気持ちを忘れません。
玲奈を愛してくれて、ありがとう。

水瀬玲奈より

王国最強の婚約者たち1

窓の外は、うつすらと白く煙っている。

ベルフォード王国王都エルシュタインは、この時期になると屋外が白く煙ることが多い。一昔前は「冬の女神が怒っている」と人々は慌てたものだが、今から五十年以上前の王妃が「これは、冬特有の霧ですね」と説明してからは、濃霧で慌てる者もいなくなっただけだ。

ヴェインは肘掛け椅子に深く身を埋め、手に持った書類をいくつか、ぱらぱらとめくっていた。部屋には暖炉が焚かれ、オレンジ色の光がヴェインの研ぎ澄まされた美貌を明るく照らしている。

ここは、エルシュタイン郊外にあるヴェインの実家、エージェント伯爵家の私邸。家主である兄は現在、王国内の別荘で暮らしているため、実質家主はヴェインと言っている。

獲得したしばしの休暇を、ヴェインはこの私邸で過ごしていた。屋敷が抱えている使用人は、ほんのわずか。持ち帰り仕事をすることが多いヴェインのサポート役である老年の執事と、料理人が一人洗濯掃除をするメイドが二人いるだけだった。

一年の大半を王城の騎士団区で過ごすヴェインは、基本的なことはひとりで行える。料理は苦手だが、見習時代に洗濯掃除などはいくらでも経験してきた。だから大半の使用人は兄のいる地方に向かわせ、必要最低限の者のみをここに残させているのだ。

仕事熱心で、自宅にも仕事を持ち帰るヴェインは近衛騎士団第四番隊長として注目を集めている。加えて、人並み外れたこの冷た

い美貌は若い女性の心を鷲掴みにする。彼は知らないのだが、王城では密かに彼のファンクラブがあり、広報誌も出回っているのとことだ。

だが今、彼が読んでいるのは王都の警備態勢の報告書や地方からの嘆願書、上層部に提出する機密文書などではない。

控えめなノックの音が響き、ヴェインは書類を下ろす。入室を促すと、おずおずとドアが開いて黒髪の女性がひよっこりと顔を覗かせた。

「ヴェイン様、お疲れ様です。その、街に買い物に行きたいのですが」

柔らかなアルトボイスで、女性はヴェインに外出の許可を求める。漆黒の髪がサラリと揺れ、髪と同色の目は窺うようにヴェインを見ている。

黒髪に黒目。ベルフォード王国では非常に珍しい組み合わせだ。肌はこの辺りではあまり見られない、色づいた肌色。成人女性にしては背が低めで、ヴェインと二人並ぶとヴェインの顎より下に彼女の頭が来る。

ヴェインは顔を上げ、彼女に手招きして言う。

「俺は一向に構わない。書記部で使う道具か？」

「はい。さつきメイドさんが教えてくれたのですが、今日は街の行きつけの文房具屋がセールしているらしくて、消耗品を買っておきたいのです」

そう言う彼女の目はキラキラ輝いている。

女性の名は、レイナ・フェスティュー。フェスティュー子爵家の養女で、今年の春、世を騒がせた悪の精霊を成敗した「異世界の乙

女」であり、ヴェインの婚約者である。

レイナは、この世界の人間ではない。チキュウという、別の世界からやって来た彼女は紆余曲折を経てヴェインと恋に落ち、さまざまな苦勞を乗り越えて結婚の約束をするに至ったのだ。

二人の結婚式は来年の早春に控えている。貴族同士、しかも片方はベルフォード国王の庇護も強い大英雄であるため、結婚の準備や手続きもなかなか煩雑だった。そのため、王都にあるフェスティール家の屋敷で寝泊まりする彼女はしばしば、アジエント家の屋敷を訪れてヴェインと共に結婚式の打ち合わせをしているのだ。

といつても、彼女をこの屋敷に留めるのは夜中まで。二人で相談した上で、ヴェインは必ず夜は彼女を家まで送っている。少し前まで屋敷にいた兄は、「結婚を約束しているのなら少々気を急いでもいいだろう。押し倒したらどうだ」といつもの嫌な笑いを浮かべて言ったため、久しぶりに兄弟喧嘩をした。

レイナはとことことヴェインの元まで歩み寄って、彼が持っていた書類を覗き込み、ふふつと声を漏らす。

「あら……てつきりお仕事の書類だと思ったら」

「それは一旦休憩だ」

そう言つてヴェインはニヤリと笑い、指先で書類の表面を弾く。

「こつというのは女性の方が好むと聞いているが……おまえのことだと思つと、俺も俄然やる気が出てきた」

「ありがとうございます、ヴェイン様」

レイナは微笑んで、ヴェインと並んでその書類　否、さまざまなドレスの宝飾品がラインナップされたチラシを覗き込んだ。

結婚式まであと三ヶ月。式場は既に押さえているが、現在二人はレイナが着るドレスを考案しているところだった。ヴェインに関し

ては、選択肢はほぼない。ベルフォードの騎士が結婚する場合、新郎は決まって白の軍服を纏うのだ。

対する女性は、その時の流行と本人の好みでいくらでもバリエーションができる。レイナの結婚式ということで、二人が相談に行く前からじゃんじゃん仕立屋からの手紙が舞い込んでいる。「異世界の乙女」のウエディングドレスを、誰もが仕立てたいと思っているのだ。当然、自分の店がレイナのドレスを仕立てたとなると、店に箔が付く。

「やはりレイナは、ミヤノ・ブランドがいいか？」

ヴェインに尋ねられ、レイナはしばし考えた後、ゆっくり頷く。

「そうですね。あのドレスは私の故郷の伝統衣装にそっくりです。で。ミヤノ・ブランドを基本として、ベルフォード風の装飾を付けたいですね」

ミヤノ・ブランドは五十年前の王妃ミナミが提案したドレスデザインで、日本の十二単とベルフォードのドレスを融合させたような造りになっている。当然、ミナミも日本人であるため、自分の髪と目の色に合うようなデザインを求めたのだ。

ミヤノ・ブランドはミナミの死後も流行したのだが、残念ながらあのデザインに合う人間は、ベルフォードには多くない。ベルフォードの女性はミナミやレイナより、背が高く胸が大きく、髪や目の色素は薄い。日本人女性が着ることを前提としたデザインなので、ベルフォードの女性ではどうしても、本人とドレスがマッチしないのだ。

その点、ミナミと同じ日本人であるレイナはミヤノ・ブランドを見事に着こなせる。以前の夜会でも、現王妃エデルがチョイスしたミヤノ・ブランドを着て注目を集めたものだ。レイナも、故郷の伝統衣装をモチーフにしているため気に入っているようだ。

「ミヤノ・ブランドを取り扱う店はそれほど多くない……早めに目を付けておこうか」

「そうですね。私もまた、資料を集めておきます」

「頼んだ。……って、すまん。おまえは外出するんだったな」

ヴェインが急ぎ顔を上げると、レイナは緩く微笑んで首を傾げる。

「大丈夫ですよ。お店もすぐ閉店するわけじゃありませんし」

「護衛や荷物持ちは必要か？」

「買うのは軽量で、大きめのものは注文して城まで届けてもらおうと思うので、荷物持ちは大丈夫です。護衛は、お屋敷の方は忙しいでしょうし……この子たちがいるので」

レイナがそう言った直後、彼女の足元に忽然と小さな猫と鳥が現れた。ミーナとティル。レイナの契約精霊だ。

どちらも今は普通の猫と普通の鳥の大きさだが、最大でミーナの方は大熊サイズに、ティルの方は鳥類を超越したサイズにまで巨大化できる。しかも、見た目は可愛いが二匹ともなかなかの手練で、相手が精霊持ちならともかく、生身の人間なら一瞬で消し炭にできる。との、レイナの言葉だ。

さすがに消し炭にしたことはないが、ヴェインも二匹の奮闘ぶりを見たことがあるので、護衛に据えるのは納得だ。

「分かった。何かあったらすぐ、どちらかを俺の方まで寄越してくれ。俺は精霊たちの言葉は分からないが、様子を見れば大体のことは予想できるし、道案内もしてくれるだろう」

「かしこまりました」

レイナは両方の肩にそれぞれミーナとティルを登らせて、ヴェインを見て微笑む。

柔らかい笑みに、思わずヴェインの胸の奥がむずむず痒くなる。

その衝動に逆らうことなく、ヴェインは立ち上がってレイナを片腕で引き寄せ、触れるだけの優しいキスを贈る。

「気を付けて行ってこい、レイナ」

唇を離して嘸くと、顔を鮮やかな赤に染めたレイナが、こっくり頷く。

「はい……夕方までには帰ります。……あの、ヴェイン様」

「何だ」

「……もう一度、お願いしていいですか？」

ヴェインは思う。

本当に、自分の婚約者は可愛らしくて堪らない、と。

王国最強の婚約者たち2

レイナが出ていった屋敷は、それだけで気温が数度下がったかのように思われ、寒々しい。レイナの後ろ姿が門をくぐって見えなくなるまで見送り、ヴェインは部屋の隅に積んでいた薪を手に取り、暖炉に放り投げる。

「ヴェインぼっちゃま」

揺れる炎を見つめていると、ドアの外からしわがれた声がする。何度叱つても懲りずにヴェインのことを「ぼっちゃま」と言う人間は、一人しかいない。

「……何だよ」

「お客様からの先触れが届きました」

そう言って部屋に入ってきたのは、老年の執事。ヴェインの祖父の代からアジエント家に仕える彼は、ヴェインごときの叱咤ではびくともしない。それは兄のゲアリーも同じだ。あの兄に冷めた笑みを向けられても動じないのは、この世ではもうこの執事しかいないだろう。

執事が持っている小さな封筒を見て、ヴェインは怪訝に眉を寄せ
る。

「お客？ 今日に来客の予定はないはずだが」

「おっしゃる通りです。しかし、ヴェイン様にお目通り願いたいと、つい先ほど使者が参ったのです」

ヴェインは不審顔を緩めることなく、執事から手紙を受け取る。

表面には女性の字で「ヴェイン・アジエント様へ」とあり、裏返すと

「……なんで、今になって」
ヴェインは苦々しく呟いた。

来客は、手紙にしたためられていた通りの時間にやってきた。

「お久しぶりですね、ヴェイン？」

アジエント家屋敷の応接間に通された美女は、そう言って妖艶に笑う。対するヴェインは白けた表情で腕と脚を組んでおり、適当に美女に返事をする。

「……で？ 今になって何をしに来た」

「嫌だわ、それが昔の恋人に対する態度なの？」

口では責めつつも、美女の顔は笑っている。彼女は傍らにいた少年従者から扇を受け取り、赤く塗られた口元を覆い隠す。

塔のように結い上げた髪は、眩しい銀色。夜半の月のような細い目は澄み渡ったグリーンで、目元のほくろが印象的だ。

胸元は今にもはち切れんばかりで、肉感的な肌がドレスの生地を押し上げている。この寒いのに、胸元と肩を晒す意義が、ヴェインには分からない。

ヴェインはあからさまに顔をしかめ、片頬を引きつらせる。

「ああ、今ではおまえと少しの間でも関わりを持ったことを心底恨んでいる。昔の俺を殴り倒したいくらいだ」

「そんなこと言つて。本当はわたくしに会えて嬉しいくせに？」

「まったく嬉しくない。時間の無駄だから、早々にお引き取り願いたい」

「嫌よ。だつてわたくし、あなたにお話があつて来たんですもの？」

ヴェインは昔から、この女性の口調が嫌いだった。アリーシャに捨てられたと思ひこんでいた自分は、数年間、女性関係でも自暴自棄になつていた。その時出会つた女性の一人が、この美女だ。

香水臭いし化粧は濃いし、尋ねているわけでもないのに語尾を上げるこの口調は最初から気に入らなかつた。何となく彼女と付き合つたが、ものの数日で疲れてしまったのが、今から三年ほど前。

美女は確かヴェインより二つほど年上だったから、もう二十代後半に突入しているはずだ。

「ねえ、ヴェイン。わたくし聞きましたのよ？ あなた、子爵家の養女と婚約したそうですわね」

「そうです」

「わたくし、それを聞いてあなたが哀れで哀れで仕方なくて……だつて、そうですしょう？ 『異世界の乙女』とやらでちやほやされている割に、あんなに貧相でみすばらしい顔立ちの娘ですもの？ ヴェイン、きつと陛下に処理を任されてしまったのね……」

「今すぐその言葉を撤回しろ。さもないと、二度と夜会に出られない身にしてやる」

ヴェインは腰に下げた剣も抜くことなく言う。だが、彼は本気だ。美女の隣にいた従者が顔を上げ、威嚇するようにヴェインを睨むが、美女の方が少年従者を止めた。

「おやめなさい、アルフレッド。ヴェインの実力は本物よ」

「相変わらず年下趣味のようだな、ユリエンヌ」

ヴェインが吐き捨てるように言う。またしても憤った少年従者の腕を引いて彼を宥め、美女ユリエンヌは艶やかに笑う。

「それにしても……意外ね。あなた、女性に対してはもつと冷酷だと思っていたのに、婚約者に対してはそれほど過保護になるのね？」

「当たり前だろう。俺が愛して婚約者になってもらった女性だ」

そろそろ疲れてきた。ヴェインはなかなか出ていく気配のないユリエンヌに殺意を抱きつつ、冷静に言う。

「特に用もないのに男の屋敷に転がり込むなんて、おまえの外聞も悪くなるだけだ。さっさと帰れ」

「あら、それでしたら問題なくてよ？」

話の核心に触れた、と言いたげにユリエンヌは笑い、ずいっと身をヴェインの方に寄せる。

「今ここで、婚約破棄をしてくださいな、ヴェイン。そうしてわたしとヨリを戻してわたくしを婚約者にすれば、何の問題もなくてよ？」

「ありまくりだ。断る。帰れ」

「つれないのね……いいの？ わたくしがかつてのあなたの恋人で、あなたが大切にされる婚約者よりずっと、あなたのことを知り尽くしているって……」

「レイナはもう知っている。有名な話だからな。それに、俺たちの婚約は国王陛下も承諾なさったことだ。レイナは今や、国内随一の重要人物。俺たちの婚約は、簡単に破ることはできないし、するつもりもない」

ユリエンヌの発言は大体予想通りものだったため、ヴェインは重いため息をつく。昔からこうだ。自分の都合が悪くなったら、この

女は擦り寄ってきた。自分に利益がないと知ると、あっさりと親しい者でも足蹴にして捨て去る。

社交界にはユリエンヌの取り巻きもいるが、全員ユリエンヌからの報復を恐れて従っているだけだ。ユリエンヌの実家は裕福な貿易商だが、金はあっても爵位はない。固い身分制度が敷かれたベルフオードで、ユリエンヌの発言力はそれほど強くない。だから彼女が従えるのも、自分より立場の低い家の娘ばかりなのだ。

婚約してしばらくして、レイナに昔のことを打ち明けた。レイナは強ばった顔をしていたが、全て受け入れてくれた。「私が最後の女ですよ？」と少しだけ拗ねたように言われた日には、彼女の口元がドロドロになるまでキスの嵐を降らせたものだ。

全てを乗り越えたヴェインにとって、ユリエンヌの攻撃はどれも、ダメージにならない。それどころか、私情を剥き出しにして詰め寄るユリエンヌを見ると、いかにレイナが清楚で欲がない、心優しい女性であるかが再確認できる。

ユリエンヌも、ヴェインが全く靡いていないことに気づいたのだろう。彼女はソファに座り直し、「仕方ないわね？」と薄く笑う。

「こうなったのは、あなたがいけないのよ、ヴェイン？ あなたの愛おしい人は複数の男にたらい回しにされるかもしれないのよ？」

「……何？」

そこで初めて、ヴェインの表情が揺らぐ。ユリエンヌは勝ち誇ったように扇を閃かせ、笑った。

「可愛そうに……純潔を失えば、もうあなたの元には行けないわね。それどころか、子爵家からも追放されるかも……」

「今すぐおまえの部下を撤退させる」

ヴェインは立ち上がって、剣先をユリエンヌに向ける。瞬時に抜

刀していたヴェインは、紫色の目に確かな怒りと殺意をみなぎらせ、ユリエンヌを睨め付ける。

「さもなくば、ここがおまえの墓場となる」

「まあ、そんなことしていいの？ わたくしを殺せば、本当にあなたの婚約者は助からなくなつてよ？」

剣を向けられても、ユリエンヌは動じない。レイナのことを思うなら、ヴェインが強行手段に出られないことも、計算しているのだらう。

ユリエンヌの隣にいた従者が、持っていた時計を見る。

「……あと、五分」

「ですつてよ？ ほら、あなたの婚約者がきれいな体でいてほしいなら、決断してくださいさらない？」

ヴェインの剣が、下りる。そのまま彼はゆっくり、ソファに腰を下ろした。

「……頼む。手加減だけはしてやってくれ」

「婚約者の命乞いのですの？」

「そうしないと、後が困るからな。……ああ、命乞いなんかじゃない。俺は、この程度では屈しない。もちろん、レイナもな」

そう言うヴェインは、落ち着いていた。それを見たユリエンヌは、わずかに身を震わせる。

なぜなら、最愛の人の危機だというのに、ヴェインは明らかなきみを浮かべていたのだから

王国最強の婚約者たち3

アジエント家の屋敷で悶着が起きている、その頃。

「どうもありがとう、おじさん！」

レイナは意気揚々と、文房具屋から出る。書記部でいつも世話になっている禿頭の文房具屋店主が、満面の笑みで手を振ってレイナを送ってくれる。

今日も大収穫だ。メイドの言っていた通り、かなりの品が値引きされていて大変お買い得だった。値引きの広告に釣られ、つつい可愛らしい文具まで買ってしまった。

「マスキングテープがあればなあ……いつかあんなのも、この世界にできるかな？」

腕一杯に紙袋を抱えたレイナはご機嫌だ。財布は寂しくなったが、後悔は一切ない。

いつの世界でも、買いものは楽しい。欲しいものが値引きされてお得に手に入ったら、なおさらだ。

大通りは相変わらずうつすらと白く煙っていて、いつもなら大通りの先に聳える王城が見えるのだが今日は霧に包まれている。既にレイナが着ている上着もしっとりと湿ってきているが、白く煙ったエルシュタインの町並みもなかなか壮観だ。

大通りを大型馬車が通り過ぎていくのを見送り、レイナは通りを渡った。

「ふんふーん……ん？」

通りを渡りきったところで、レイナはふと足を止める。

彼女の背後数メートルの所には、数人の男たちが息を潜めて隠れていた。

「よ、余裕なのね。それとも、婚約者の節操なんてどうでもいいというの?」

ユリエンヌが問うと、ヴェインは緩く首を横に振った。

「余裕なのは確かだが、レイナが心配なのは事実だ。だが、おまえは自分の心配をした方がいい、ユリエンヌ」

「まあ、そんなこと言って。わたくしは、あなたの婚約者になれたら……」

「お断りだ。なるわけない。さつさと実家に戻れ」

「……そう? でも、残念ね。もう、あなたの婚約者を襲う時間が来てしまったわ」

ユリエンヌは従者が指しだした時計を見て、薄く笑う。ということとは、彼らはレイナが屋敷を一人で出るのを確かめ、ユリエンヌがヴェインと交渉する時間を考慮して部下に玲奈を襲うよう指示を出したのだろう。相変わらずゲスな手を使う、とヴェインは嘆息する。

「そうか、それは残念だ」

「っ! だから早く、わたくしとの婚約届を書いて……」

「断る。俺はレイナ以外の女を娶るつもりは毛頭ない」

ヴェインは笑う。自信に満ちた、彼らしい笑顔だ。

「そういうわけで、そのの従者。さっさと部下たちに撤退命令を出した方がいいぞ」

「何っ……まさか、護衛の騎士でも付けていたの!？」

「騎士は付けていない。あいつは身軽に買い物に行くのが好きなんでな。だが」

そこでヴェインは口を閉ざし、窓の外を見た。釣られてユリエン又もそちらを見

ばたばたばた、と忙しない足音。けたたましい音を立てて外から開かれる、ドア。

「ヴェイン様っ!」

真っ白な霧の粒子を纏わせたまま乱入してきたのは、黒髪黒目の女性。ヴェインが心から愛する婚約者。

ぼろり、とユリエン又の手から扇が滑り落ちる。ヴェインはそんなユリエン又には構わず、立ち上がって大股で歩み寄り、しかとその腕に愛する人を抱き寄せた。

「無事だったようだな、よかった、レイナ」

「ごめんなさい、ヴェイン様……」

レイナはくぐもった声で謝罪する。何を謝るのか、と一瞬ヴェインは不安で胸を鳴らせたが。

「こ、この女! どうやってあいつらを……」

「あっ、あなたですね、あの人たちをけしかけたの!」

ぐるっとユリエン又の方を見るレイナ。憤りかけたユリエン又は、真っ黒な目で見つめられて怯む。

「な、何を言ってるの……」

「あの、ごめんなさい。手加減はしたんですけど、でもちよつと大変なことになって……」

「レイナ？」

ヴェインが名を呼ぶと、レイナはしゅんと頂垂れる。その直後

「おじよ、おじよ、お嬢様ああああ！」

「助けてくださいいいいい！」

バタバタバタドカン！ と玄関ですごい物音と、男たちの悲鳴が様子を見に来たらしいメイドたちが何かを怒鳴っているようだ。

ユリエン又の唇が青く震えている。やはり、あの野太い声に聞き覚えがあるようだ。

「何……どういうこと……？」

「そのお……話せばちよつと長いんですけど……」

レイナがおずおずと言った、直後。

レイナが先ほどドアを開けたままだった応接間に、男たちがなだれ込んでくる。どれも、ユリエン又が雇った部下だろう。

……それはいいのだが。

「ぎっ、ぎゃあああああ！？」

凄まじい悲鳴を上げたのは、ユリエン又。彼女は乱入してきた部下を見、目をぐるりと回転させ、その場にばったり倒れてしまった。

「お嬢様!？」

「おい、お嬢様が倒れたぞ！」

「っ、連れて帰るぞ！」

男たちはドカドカと入室し、気絶したユリエン又と、同じく座ったまま放心状態の少年従者を担いで、去っていった。

……普通なら、ヴェインがすぐさま彼らを叩きのめし、警備に突き出していただろう。だが

「……なあ、レイナ」

「は、はい」

「なんであいつら……ほぼ全裸でしかも頭がアフロなんだ？」

ヴェインが呆然と聞く。そう。屋敷に突入してきたガタイのいい男たちは、全員下着一丁でしかも、頭髮がチリチリに焦げてアフロ状態になっていたのだ。

下着一枚で寒空の中を走ってきたのだろう、男たちは涙目で、レイナを見るとびくつと身をすくませ、一目散に逃げていった。

「……メルヴィン、警備に通報してくれ。ユリエンヌの実家を囲ませろ」

ヴェインは慌てて駆けつけてきた執事に命じ、メイドには玄関と応接間の掃除を指示した後、さて、と腕の中の婚約者の顔を覗き込む。

「……説明してくれるか？」

「……ハイ」

買いものを終えたレイナは、自分の後に怪しい人影が迫っている

ことに気づいた。というのも、レイナの中で休憩中のミーナと、レイナの肩に止まってただの小鳥の振りをしていたテイルが教えてくれたのだ。

『後に敵。たぶん、玲奈を捕まえて裏路地に連れ込もうとしている』

『数は、五人。みんなナイフを持ってる。精霊は、いない』

『……どうする？ ミーナとテイルで退治できる？』

レイナは背後の敵に気づかれないよう、ウインドウショッピングをしているふりをしつつ尋ねる。

『全然余裕。一瞬で丸焼きにするよ』

『丸焼きはやめて。……うーん。私を襲う理由、知っておいた方がいいかな。ミーナ、困頼める？』

『任せて』

レイナは急ぎ、店と店の隙間の路地に身を滑り込ませる。そしてレイナの足元から出てきたミーナが瞬時に、その姿をレイナに変えた。

ずっと前に一度したっきりの、ミーナの変身術。私に化けているミーナは、喋ることはできないけど姿は私とまる同じ。相手が精霊持ちじゃないなら、見抜かれることもない。

レイナにウインクを寄越して、ミーナはすりと路地から出ていく。レイナはテイルに頼んで、ひっそりと店の間に隠れておく。間もなく、ミーナの後を追ってぞろぞろと五人の男たちが通り過ぎて

いった。誰も、路地裏に隠れるレイナの実在には気づかない。

『玲奈、そっちの路地から店の裏を回ってこっちに来て。あいつら、その路地に連れ込むみたい』

ミーナの言葉が聞こえてくる。レイナは頷き、テイルと一緒に路地を進む。

店と店の間を歩いていると、すぐに男たちの怒声が聞こえてきた。「大人しくしろ！」とか、「さっさと縛れ！」と言っているようだ。

『よし、ミーナ。戻ってきて』

『了解！』

レイナは路地に足を踏み入れた。同時に、五人の男に拘束されていたミーナの姿がふわりと消え、次の瞬間には猫型に戻ったミーナがレイナの足元で伸びをしていた。

いきなり目の前で対象が消え、しかも自分たちの背後に移動しているものだから、男たちはぎょつとしてレイナを振り返り見た。

『玲奈、伝言。今、ヴェインの所に行ってきた』

『ヴェイン様、何て？』

レイナはじりじりと男たちに詰め寄りつつ、テイルに聞く。男たちはレイナが精霊持ちだと知らなかったのか、一斉に逃げようとしたがミーナが作った結界に阻まれ、全員無様に倒れ伏す。

『とりあえずヴェインの足にスリスリして、玲奈の安全は伝えた。そうしたら、後が困るから手加減はしてやれ、って』

『……なるほど。ヴェイン様の方は？』

『知らない女と一緒にだった。玲奈のことで脅していたけど、テイルに指示を出した後は、ヴェイン、強気になってた』

なるほど、とレイナは頷く。さしずめ、ヴェインに執着する女性がレイナに追っ手を仕向け、あれやこれやさせている間にヴェインを脅す算段だったのだろう。

だが残念。レイナにお供の騎士はいないが、最強の精霊が二匹も、側にいたのだ。

「さて……じゃあ、どうするかね？」

レイナはわざとらしく明るい口調で言う。地面に倒れ込んだ男の一人が怒りで立ち上がるが、テイルがちょこつと翼を動かしただけで足を滑らせ、顔面から地面に激突する。

「このままだったらあなたたち、丸焼きになっちゃうわねえ……」

「か、勘弁してくれ！ 俺たちは、お嬢様に命じられて……」

「おい、馬鹿！」

既に降参モードの男が涙目で白状しようとする、別の男がその口を塞ぐ。レイナはやれやれと肩を落とし、ミーナを抱き上げてほい、と男たちに差し出す。

「ヴェイン様が関係しているのですね？ あなたたちが知る限りのことを、教えてください。手荒なことはしたくないので……」

レイナに差し出されたミーナが、かぱつと口を開いている。その口の奥でめらめらと炎が踊っているのが、男たちも分かったようだ。

後は簡単だった。

男たちはその場に這いつくばり、全てをぶち明けてくれた。曰く、商家のお嬢様に仕えていて、お嬢様がヴェインと結婚したいから脅しのため、レイナを捕まえて襲うように仕向けたと。純潔さえ失えばヴェインも愛想を尽かすはずだからと。

あまりの内容に、レイナの顔が歪む。つまり、レイナがもし精霊持ちでなかったらこの男たちは、レイナに性的暴行を加えるつもりだったのだ。

「……た、頼む！ 命だけは……！」

「あ、はい。命だけは、助けてあげます」

やれやれ、とレイナは肩を落とし、ミーナを床に下ろす。

「……ミーナ、ティル。ヴェイン様に言われたように、『手加減はしてやって』ね」

レイナが命じた直後、嬉々として猫と鳥が男たちに向かって飛びかかる。そして

王国最強の婚約者たち 4

「……あの子たち、すっごい楽しそう。テイルはあつという間に服を剥いちやうし、ミーナはチリチリになるまで髪を焦げさせてアフロにしちゃうし。久しぶりに力を発揮するからですかね、ノリノリだったんですよ、本当に」

レイナはヴェインにそう説明した。ミーナとテイルは、そこらのソファに転がって休憩している。一見すれば可愛いだけの精霊だが、本当におっかない。そういえば、前に騎士見習の服を剥いだのも、この二匹だ。あときは下着一丁すら許さず、レイナの目の前で全裸にさせられていた。

ふと、ヴェインはあるときレイナをいじめた連中を見つけ出し、顔の原型がなくなるまで叩きのめしたいと思った。

「ミーナ曰く、全身燃やしたかったけどやめといたって。テイルも、下着まで剥ぎたかったけどそれは私の目に悪いから、やめといたって」

「……一応、手加減はしたんだな」
ヴェインは引きつった笑いを浮かべる。確かにヴェインはユリエン又と会っているとき、足元に柔らかな羽根の感触がした。これはレイナの精霊だろうと確信を持ち、伝言を託したのだ。「後が困るから、手加減だけはしてくれ」と。

「よく判断した。さもないと、おまえの純潔まで奪わせるところだった」

「ヴェイン様こそ……」

レイナはヴェインの顔を見上げる。そしてそっと手を伸ばし、ヴェインの頬に触れた。

「聞きました。商家の娘がヴェイン様に言い寄っているんだと」
「ああ、そう言われた。さっきのあれは、ずっと前の……俺の恋人だ。もちろん、今はもう愛情の欠片も残っていない」
レイナはゆっくりと頷く。分かっていたとはいえ、やはり聞いてあまり心地よい話題ではないのだ。その顔が、少しだけ引きつっているようでヴェインは唇を噛む。

「……すまない。俺がもつとしっかりしていれば……」
「違います。ヴェイン様が悪いとか、過去がどうか、そんなことじゃないんです」

レイナに強い口調で言われ、ヴェインは言葉に詰まる。レイナは漆黒の目を真っ直ぐ、ヴェインに向けていた。

「私だって厄介な身の上だから、今後何が起こるか分かりません。今度は逆に、私が原因でヴェイン様に迷惑を掛けるかもしれないです。でも……何があっても、一緒に打破していけばいいんです」
「私には最強の護衛がいるので」と、レイナは茶目っ気たっぷりに言う。

「私だって、黙ってやられたりはしません。自分の、ヴェイン様のためなら、いくらでもやり返すし壁だってぶっ壊してみせます。今まで何度もヴェイン様に世話になっているので……だから、お互い様です。今のも、これからも」

どちらかが一方的に背負うのではなく、二人で背負う。
相手の前に壁が立ち塞がったら、自分がその壁を破壊する。

「ヴェイン様……大好きです」

そう言って、思いつき抱きついてくるレイナを、ヴェインは何も言うことができず、抱きしめ返す。

窓の外の白い霧は、いつの間にか晴れていた。

後日、王城でユリエンヌの裁判が開かれた。

養女とはいえ、子爵家の娘を強姦するように部下に命じた罪は重い。商家の娘といえど、一切の温情は与えられない、はずだったが。

「……すみません、少しいいでしょうか」

ユリエンヌへの実刑を審議している最中、おずおずと手を上げたのは、傍聴席にいるレイナだった。

裁判官や官吏、速記係の書記官も、驚いたようにレイナを見る。レイナは隣の席にいるヴェインに手を握ってもらってエールを貰い、被告席で頂垂れるユリエンヌを見下ろす。

「ユリエンヌさんへの処罰ですが……私の方から、提案があります」「被害者からの提案、どうぞ」

「ありがとうございます。……その、私の精霊たちが彼女に仕返しをしたくて仕方がないそうで、その上での提案ですが……」

結果として、なんとレイナの提案は受け入れられた。最初は怪訝そうな顔をしていた聴衆も、いざ裁判官から承諾の意が下り、レイナの足元から飛び出してきた精霊二匹が「それ」をした後は、あまりの出来事に言葉を失った。

ふわふわした金色の光が二匹の精霊からあふれ、その光の粒子はユリエンヌを包み込んだ後、ぱつと弾けた。

ユリエンヌは一瞬、自分の身に何が起きたのか分からなかっただろう。だが、顔を青くした裁判官が助手に命じて鏡を持ってこさせ、ユリエンヌの前に立たせたたん、ユリエンヌは絶叫を上げて気絶してしまった。レイナの前で彼女が気絶するのは、これで二回目だ。

次の日から、王城はある噂で持ちきりだった。

レイナ・フェステイユとヴェイン・エージェントの仲を切り裂こうとした商家の女が、レイナ様の天誅をくらったらしい。

なんでも、レイナ様を強姦するよう命じたとか。

本当は僻地の修道院送りだけど、裁判の末、実家の財産没収と監視付きに加え、王城で使用者扱い。しかも、もう一個の罰が下ることになったそうだ。

それって、どんな罰？

それは……あああ！ ほら、あれだよ、あれ！

ん？ ……うわぁ。

ひそひそ噂話をする官吏たちの横を、ユリエンヌが通り過ぎる。

彼女は豪華なドレスではなく、最下級の使用人が着るボロボロのお仕着せ姿で、庭の草むしりを命じられていた。

ユリエンヌは相変わらずの美貌だった。だが

な、なんだ、あの頭！

すごいだろ。あれが、レイナ様の精霊の下した罰だそうだ。

やばいな……あれじゃ一生、人前には出られないぞ。

そうそう。それこそ、こんな中庭の隅っこで草むしりしか…

…。

官吏たちのこそこそ話を遮るような、庭師の怒声が響く。ベテランの庭師に叱られたユリエンヌは、グスグス泣きながら土をほじくっている。

そして、彼女の髪は 頭蓋骨の三倍程度まで膨れ上がり、しかも髪の色は本来の銀髪ではなく、どきつい紫色だった。つまりは、紫色の巨大アフロ。

レイナ・フェステイユの精霊はとにかく、ユリエンヌに報復しなくて仕方がなかったという。そしてレイナやヴェイン、裁判官の許可を得た上で、ユリエンヌの髪を盛り上げらせ、色も不気味な濃い紫色に染めた。精霊の魔力の仕業なので、何年経っても色が落ちることはない。もちろん、髪型も変わらない。

すげえだろ？ あの罰を受けた日に髪を丸刈りにしたそうだが、次の日にはもう、「元通り」に生えていたそうだ。

うわあ。

しかも強力な精霊の魔法だから染め粉も全然効かないってさ。で、またレイナ嬢に嫌がらせをしたり、他の人に八つ当たりしようとしたら、あの頭がさらにでかくなるって脅されたらしい。

おっかねえな。こりゃあ、あの二人に逆らう者はいなくなるよな。

だよなあ。

官吏二人の雑談は、土から虫が出てきて泣き叫ぶユリエンヌの悲鳴と、庭師の怒声でかき消えていった。

ユリエンヌの一件があつてから。
レイナ・フェステイユとヴェイン・アジエントの仲はこじれるどころか愛情を増す一方で、誰も彼らの婚約、そして結婚に口を挟まなくなった。

そして、皆は噂するのだ。

レイナ・フェステイユとヴェイン・アジエントは間違いなく、
ベルフォード王国最強のカップルである、と。

とある騎士から見た彼ら1

初めまして。僕は近衛騎士団第四部隊に所属する者です。そう、あの「紅の若獅子」と呼ばれるヴェイン・エージェント隊長の部下なのです！

といっても、僕は第四部隊の中ではまだまだ下っ端で、騎士団区の第四部隊詰め所の入り口で接客係を任されることが多いのです。だからといって、この仕事に全く不満はありません。下積みも大事ですからね！

接客といっても、お客様は別の騎士団の連絡係か、執務区からの伝令、郵便係くらいです。決して、貴族のご令嬢が来たりはしません。

だから、僕が常駐している入り口はともかく、奥の部屋はそりゃあ、人を呼べるような場所じゃありませんでした。ヴェイン隊長も最低限仕事ができるスペースが確保されてればいい、って感じで、洗濯済みのものと洗濯前のものがごっちゃになってたり、紙くずが転がってたり、誰かのペンが落ちていたり。僕も最初の頃はちよこちよこ掃除していたんだけど、諦めました。際限がないんだもの。

でもある夏の日。「書記部に行くってくる」と出かけた隊長は戻ってくるなり、真顔で僕たちに命じました。

「おまえたち、今すぐ詰め所を掃除しろ」

「……え？ 何でツスカ？」

ゴミため状態の部屋でめいめい仕事をしていた同僚たちが、ほちよんとして隊長を見返します。今は夏だから、詰め所にいる間は大抵の同僚は服を脱いでいる。上だけじゃない。全裸だっています。

隊長は後ろ手にドアを閉めた後、ばん、と壁を平手で叩きました。もわつと埃が舞います。

「おまえたち、こんなゴミのために彼女を呼べるのか!? いいな、全員今すぐに清掃に取りかかれ! 基準は、おまえたちに彼女ができたとき、彼女を連れ込めるレベルまで!」

えええええ、と一斉に不満の声を上げる同僚たち。でも、隊長の一睨みでみんな黙って、しぶしぶ腰を上げます。あ、ちなみに僕は「いつ来客が来るか分からないから、おまえはそこにいてくれ。おまえの机だけはきれいだしな」と隊長から褒められたから、ちんたら掃除する同僚たちを遠巻きに眺めることを許されました。

「誰のパンツだ! 捨てるぞ!」

「そりゃないつすよ、隊長! 俺のくまさん柄のパンツ!」

「洗濯前と洗濯後の服と一緒にするなと言ってるだろう! ロベルト、ジエイク! おまえたちは中庭で洗濯してこい!」

「ええええ……暑いのに……」

「だったら終わったら後に水でも被ってる! ……ダグラス! 食べた後のゴミはその辺に捨てるなと、何度言ったら分かる!」

なんか隊長、リーダーを通り越してお母さんみたいだなあ。いや、こんなこと口に出したら鉄拳が飛んでくるから、言いませんけど。

僕が見ている間に、徐々に部屋はきれいになっていきました。捨てるものは捨てて、夜勤用の布団やシーツは全部干す。脱ぎ捨てられたシャツやパンツは全部洗濯し直して

「……よし、こんなものでいいだろう」

隊長がそう言ったのは、掃除を始めてから二時間近く経過した後でした。みんなもうクタクタで、隊長一人だけ涼しげな顔をしています。隊長も一緒に掃除をしていたはずなのに、基礎体力が違うんで

すよね。

「これくらいなら大丈夫だろうな……」

「えっと……来客でもあるのですか？」

僕は恐る恐る聞いてみました。「ヴェイン隊長、彼女できたんですか？ その彼女を呼ぶために掃除したんですか？」となんて、口が裂けても聞けない。

隊長は僕を見て、「まあな」と曖昧に答えました。

「といつても、正式に決まったわけではないが」

「はあ……」

「まあ、部屋を清潔にしておいて損はないだろう……おい！ 言うてる側からパンツを投げるな、馬鹿が！」

隊長ははぐらかしたけど……一体、誰が来るんでしょうか？

その答えは、約半月後に判明しました。

「今日からヴェイン様の専属書記官としてお世話になります、書記官のレン・クロードと申します」

よろしく願います、と礼儀正しく膝を折って挨拶をして、「彼」はにっこりと僕たちに向かって微笑みかけました。

あの大掃除から半月後。近衛騎士団第四部隊の詰め所に、新しい仲間が入りました。

肩先で切りそろえた黒い髪に、同色の目。ベルフォードでは珍し

い色合いだから、きつと異国の血を引いてるんでしょう。顔立ちも、僕たちとはちよつと違いますし。

「彼」の背は、僕たちの胸くらいまでしかありませんでした。長身ですらりとした隊長の隣に並んでいるから余計に、「彼」の小ささが際立っているようです。

隊長は自己紹介した「彼」に頷きかけ、その小さな肩に手の平を乗せました。

「彼はまだ幼いが、非常に優秀な書記官だ。俺の希望と彼自身の希望が一致して、こうして俺の専属になることになった。幼いからといって、決して侮るな。レンを貶すことは、俺を貶すと同意味と扱おう。これからはこの近衛騎士団第四部隊詰め所で共に働く仲間として、よろしくやってくれ」

隊長の言葉を、僕たちは何だか信じられないような思いで聞いていました。

いや、そういうえば確かにちよつと前に、隊長が書記官について話をしているのは聞きましたよ。でもまさか、本当にこんなちっこい男の子を専属に据えるなんて思ってもいませんでした。

同僚たちも最初、ぽかんとしてレン少年を見ていたけど、「レンを貶す」隊長による公開処刑」だと知ると、みんな一斉に背筋を正しました。

そういうことだったのですね。半月前、隊長がいきなり部屋の掃除を命じたのは、まだ子どもレンを書記官に据えることを想定していたからなんです。

でも……小さいとはいえ、レンも男の子ですからね。他の同僚も言うように、パンツの一枚くらい転がっててもいい気もするけど……隊長は怒ると怖いから、言わないでおきました。

ウェイン隊長の専属書記官になったレンは、そりゃあもう、僕たちの予想を超えた働きっぷりを発揮してくれました。

レンの席は、隊長の隣。まだ年齢二桁にもなっていないのに、ぐずすることも我が儘を言うこともなく、せっせと隊長の書類整理の手伝いをしています。字は恐ろしく下手だけど、あの計算能力は本当に、圧倒されました。だって、計算用紙を必要とせず、すらすらと会計予算や作図用の数値を叩き出してしまっんですから。

おまけに一生懸命で、礼儀正しいんです。天才児、って褒められて偉そうになってもおかしくないのに、本人は決して驕ることなく、誰に対しても丁寧な言葉遣いで接しています。そういうものだから、最初は彼を警戒していた同僚たちもあっという間に緊張の糸を解いて、気さくにレンと接するようになりました。

レンが僕たちと和やかに接していると、それを遠くから見ている隊長も何となく、嬉しそうに見えます。ひよっとして隊長、意外と子ども好きなんでしょうか？

隊長に可愛がられるレンに嫉妬した馬鹿数名がレンに暴行未遂をした日は、本当に僕たちも殺されてしまっんじゃないかってくらい隊長の機嫌が悪かったものです。聞いた話では、服を脱がされて堀に投げられそうになったところを、レンが契約している精霊たちの機転で逃れることができたんだということです。そりゃあ、服を脱がされるのはともかく掘りに投げるのはまずいですよね、と同僚の一人が隊長に言ったら、なんだか余計に隊長が不機嫌になっちゃい

ました。なんで隊長がより不機嫌になったのか、誰も分かりませんでした。

隊長がメリダ・バドラインに傾倒して腑抜けになっていたとき、レンがレイリア・ハルヴァーク公爵令嬢と協力して、隊長に取り憑いていた悪の精霊を退治してくれました。あの頃の隊長はそりゃあ、酷いものでした。切れ者で頼りがいのある隊長の姿はどこにもなくて、仕事は溜まる一方。隊長がレン一人に残業をさせて自分はさっさとデートに行ってしまった日には、「ああ、こりゃだめだ」と全員が思いましたよ。

そんな隊長はレイリア嬢と交際するようになって、隊長が精霊討伐隊に選ばれた直後に、お二人は正式にお付き合いすることになったようです。僕たちは恐れ多くてレイリア嬢のことは話題に出せなかったんですが、あのレンは果敢にも、隊長に対してレイリア嬢のことをネタにからかってました。何というか、命知らずというか……あれがレンじゃなくて僕たちだったら、間違いなく鉄拳が飛んできましたよ。隊長の拳骨、痛いんだよなあ……。

隊長が討伐隊の遠征に出ている間、レンとの契約は一旦解除することになったそうです。そりゃあ、レンは隊長の専属ですから、隊長がいない間はここに来る義理はありませんからね。でも、隊長が戻ってきたらまた専属になるのだと約束して、彼は一旦、詰め所から去っていきました。

隊長もレンもない詰め所は、なんだか寂しかったものです。「掃除！ 清潔！」とレンが来てからもうるさかった隊長がいなくなっても、前のように部屋を散らかす人は出ませんでした。みんな、座る人のいない隊長のデスクを見て、黙ってゴミをゴミ箱に捨てるようになったのです。

いつか隊長が帰ってきたら、きれいな部屋で出迎えるんだ、と僕たちはこっそり、計画を立てていたのです。そして、戻ってきたレンも一緒に胴上げしてやるんだ、とも。

そんなものですから……まさか、あんな形でレンが戻ってくるとは、誰も予想だにしていませんでした。

とある騎士から見た彼ら2

「えつと……改めまして。レン・クロードこと、レイナ・フェステイーユです。その……改めて書記官採用試験を受け直して、こうしてヴェイン様の元で再び働くことになりました……」

そう言っただけ気まずそうに僕たちの前で挨拶する、黒い髪の女性。女性だ、間違いなく、女性。

彼女を見る同僚は全員、目玉が取れるんじゃない勝手くらい目がかっ開いていました。そりゃあ……そうですね。僕だって、最初は信じられなかったんですから。

レン・クロードはレイナ・フェステイーユ子爵令嬢であり、しかもレイリア・ハルヴァーク公爵令嬢と同一人物である。さらにレイリア嬢は女神様の崇高な使命を受けた「異世界の乙女」で、ベルフォードを破滅させようとした悪の精霊の親玉を葬り去った大英雄だと。

それで、本来の姿になったレン もといレイナ嬢は、こうして再び隊長の専属書記官になって、僕たちの前に戻ってきたと。

……なんというか、事務仕事が得意でない僕たちの脳みそは、もういっぱいいっぱいでした。

「えつ……じゃあ、おまえ じゃないや、あなたは、レンと同一人物……？」

わなわなと震えながら声を出す、大柄な同僚。レイナ嬢は恥ずかしそうに赤面して頷いて、彼女の隣にいた隊長が肩を落とします。

「……レイナを責めないでやってくれ。彼女にも事情があったし、辛い思いもしてきた。おまえたちを欺いていたことも、心苦しく思

っているんだ」

「すみません、皆さんは私がレンの時から、親切に接してくださいましたのにそれを裏切るような……」

「い、いえいえ！ むしろ俺たちの方こそ！」

レイナ嬢が俯くものだから、一斉に詰め寄る同僚たち。筋肉が迫ってきたからかレイナ嬢は数歩後退し、彼女と皆の間に隊長が割り込んできます。

「おまえたち、少しは距離感を考える。レンの時は少年だと思っていたようだが、今のレイナは大人の女性だ。これからもおまえたちの同僚であることには違いはないが、馴れ馴れしくするな。あと、触るな」

「わ、分かっていますって！」

顔の前で手の平を振る同僚たち。うん、やっぱり隊長は過保護ですね。

さては、隊長は最初から、レンが女性であると分かっていたんでしょうね。だから、僕たちに部屋の大掃除を命じて下着の放置も許さなかったんですね。納得です。

レイナ・フェステイユ嬢として復帰した元レン、現レイナ嬢ですが、やはり同一人物なので働きっぷりに変化はありません。むしろ、身長が伸びて大人の体になったからか、前より事務作業もやり

やすそうです。

「ヴェイン様、城下街で計画中の感謝祭の人員配置ですが、若干西側が手薄になるかと……」

「なるほど……だが、西側は子どもたちも多くやって来るエリアだ。あまり甲冑姿の者がうるつについてはならないだろう」

「では、私服警備にはいかがですか？ 一見すれば売り子の若者に見えますが、有事にはすぐに駆けつけます。そうすれば、一般の子どもたちも気兼ねなく、遊べるのではないでしょうか」

「私服警備か……なるほど。では、私服警備と甲冑警備、制服警備で色を分けてみようか。レイナ、新しい城下街の地図を持ってきてくれ」

「かしこまりました」

隊長のデスクで額を突つつき合わせるようにして話し込んでいたレイナ嬢が体を起こして、棚の一番上にあった地図をひょいと取ります。レンの時には届かなかった場所にも手が届くようになって、効率が良くなったようですね。

レイナ嬢は地図をデスクに広げて、隊長と二人で地図上に兵の配置案を書き込んでいます。僕はそんな二人を、少し離れたところから観察します。

何というか、恋人同士の二人ですけど、仕事中は私情を一切挟まないことにしているらしくて、今の二人に甘い雰囲気は一切ありません。あれこれ指示を出す隊長と、それに対する確かな意見を返す専属書記官。見ている方が感心してしまうような、絵に描いたような上司と部下の図ですね。

……そうなんですけど。

「……なあ、あれって書記部の制服だよな？」

書類整理をしている僕の背後で、同僚たちが話をしています。なんだか、不穏な空気なので僕は首を突っ込みません。自分の仕事をきっちりやりつつ、会話には耳を傾けます。

「だよな。レンの時は男性用の制服だったけど、レイナ嬢は……」

「すげえな、あの制服。書記部は色仕掛けでも企んでるのか？」

彼らが話題に挙げているのは、言わずもがな、レイナ嬢が纏う書記部の制服ですね。

黒と白のコントラストがはっきりした布地を使っている制服は、知性が湧き出るようなデザインです。今は夏だから、シャツは半袖で、上着は袖無しのベストです。

白いシャツに、黒のベスト、リボンタイ。そこまでは男女でほぼ共通ですけど、女性はその下にプリーツの入ったスカートを穿いていて、脚はぴっちりとした黒タイツなんです。そりゃもう、脚のラインが丸わかりです。

「隊長、あのむっちりした脚が目の前にあっても、お触りしないよな」

「いいんだろ、今は。どうせ、隊長の手で夜には脱がしに掛かるんだろうし」

「そ、そうなのか？ 昼間は禁欲だから、その分夜は激しいってやつか？」

「そうとしか考えられないだろ！ ……ああ、見るよ！ また、あんな格好で屈んで……」

同僚の視線の先。そこには、隊長に頼まれて何か物を探しているんだろう、レイナ嬢の姿が。

レイナ嬢は僕たちに背を向ける形で、棚に頭を突っ込むようにして探し物をしています。棚の高さはレイナ嬢の腰くらいなので、腰

を曲げないと棚の中が見えませんか。

見えないんですけど……どうやらレイナ嬢は、レンの時の癖が抜けきってないようです。あの時は男装とはいえ、少年として振る舞ってました。だから、彼が地べたに座り込もうがしゃがもうが尻を突き出そうが、誰も気にしてませんでした。もっとすごい体勢になつてる同僚も、山ほどいましたからね。

では、今は？

レイナ嬢は相変わらず、こっちにお尻を向ける形で探し物中です。スカートにタイツ姿なんだから脚を折ってしゃがめばいいのに、腰だけを曲げるものだから、僕たちにお尻を突き出しています。もちろん、スカートの下から覗くタイツに包まれた太ももも、丸見えです。

僕はそつと、視線をずらします。女性があられない姿になつているときは、目を反らすのが紳士のたしなみです。でも、同僚たちは相も変わらず、鼻の下を伸ばしてレイナ嬢の太もも観察をしているようです。

ふと、資料を読んでいた隊長が顔を上げました。そして、傍らにいるレイナ嬢に声を掛けます。

「レイナ、もしかしたら例の資料はその、ガラス扉の棚にあるかもしれない」

「えっと、こっちですか」

レイナ嬢は隊長の声を受けて、背筋を伸ばして移動します。同僚の、ガツカリしたようなため息。

レイナ嬢は、隊長の背後にあるガラス扉の棚の方へ行き、資料探しを続けます。つまり、レイナ嬢は僕たちに完全に背を向け、しかも彼女の背後を守るように隊長がいるわけで

ふいに、隊長が手を上げます。その手の中にあるのは

シュツ、ドス

「あつた！ ありました、ヴェイン様！」

紐綴じの書類を手に、笑顔で隊長を見下ろすレイナ嬢。隊長は首を捻り、「ああ、ご苦労」と言つてレイナ嬢から資料を受け取り、デスクに広げて二人して覗き込んでいます。

……で、僕たちの方はと言うと。

ぱちん、と僕は資料をクリップで留めた後、傍らにいる同僚たちを見ます。というか、彼らのすぐ脇の壁を見ます。

そこには、未だ微かな振動を続けるペーパーナイフが。木製の壁に垂直に突き刺さったそれは、もうちよつと左の方に投げられていた場合、過たずそこにいた同僚の左目を抉っていたでしょう。

同僚たちは、凍り付いています。自分たちがレイナ嬢に向ける疚しい視線に、隊長が気づいたことを悟ったのです。つまり今のペーパーナイフは、隊長からの脅し。「次は目を抉るぞ」ということでしょうか。

レイナ嬢観察をやめて、すぐごと持ち場に戻る同僚。僕はため息をついて、壁に刺さったままのナイフを抜きました。うん、かなり力がいりました。

ペーパーナイフをデスクに置いて、僕は隊長とその専属書記官の方に視線を向けます。

黒髪の書記官に向ける隊長の目は、とても優しいです。見ている方がほっこりとするような。

僕はさりげなく、席を外しました。さて、次の資料を取りに行きますかね。

花よ、風よ、この想いを空へ1 (前書き)

番外編もラストに向かっていきます。

花よ、風よ、この想いを空へ1

まだ少しだけ肌寒い、初春。

固かった花のつぼみがほころび始め、ベルフォード王国のあちこちで春の訪れが見え始める季節。

ベルフォード王国王都エルシュタインの郊外にある、教会。ここは、ベルフォードの傍王族や高位貴族たちが結婚式を挙げる際に愛用されるということでも有名な場所だった。

さすがに王族直系の結婚式は大聖堂で盛大に執り行われるが、王族から降嫁する王女や公爵家の婚姻、派手な式を望まない貴族などは、この緑豊かでこぢんまりとした教会で式を挙げたがっている。

結婚ラッシュ時期になると、この教会の予約は非常に困難である。どうしても、階位が高い者から優先的に予約を取るが、場合によっては数ヶ月待ちになることもある。

だが幸運にも、今この時期は比較的予約も空いていた。そしてこの小さな教会で本日、国内のとあるカップルの結婚式が執り行われる。

「とてもおきれいですよ、レイナ様」

メイクセットを手にしたカスミがそう言うと、鏡に向かっていた新婦は不安顔で振り返る。

「本当に？ おかしくない？ ドレスに着られていない？」

「何をおっしゃいますか。そのドレスは、レイナ様のために仕立てられた物。レイナ様の美しさを存分に引き出していますよ」

信頼する侍女に太鼓判を押され、新婦は少しだけ気持ちを落ち着かせ、鏡に映る自分の姿を見つめる。

黒い髪に黒い目。ベルフォードの人間より色の濃い肌。のっぺりとした顔立ち。

新婦は、この世界の人間ではない。そのため、彼女は周囲の人間とは違った自分の顔立ちにある種のコンプレックスを抱いていた。

だが、カスミは新婦の生まれ持った顔の造形を、うまく「利用」していた。過度な白粉や頬紅は遠慮し、実年齢より幼く見える顔立ちを映えさせ、愛らしく見えるように化粧を施す。新婦の専属侍女として一年以上の経験があるカスミは、主人の美を引き立てるポイントを熟知していた。

毛先が少し跳ねるだけの黒髪は軽くまとめるのみで、背中に垂らす。天然の黒髪の美しさを引き立てるために、香油をしっかり塗っておいた。

ドレスは、この日のためにオーダーしたミヤノ・ブランド。五十年以上前に降臨した王妃ミナミは、新婦と同郷者。王妃ミナミのためにあるミヤノ・ブランドは、同じ「ニホンジン」である新婦の体にもしっくりと馴染む。

色は、白を基調とした淡いもの。数枚の布地を胸元で掻き寄せ、

腰は「オビ」と呼ばれるためのベルトで締める。ベルトの下からは羽織った布地が少しずつ位置をずらしながら、天に架かる虹のようにグラデーションを掛けつつ床まで垂れる。白、薄ピンク、レモンイエロー、セレストブルー、と実に様々な色を駆使しているが、欲張りな印象は全くない。店でドレスのデザインを決める際、新郎新婦と店員とで、色見本を出しながらじっくり考えたのだ。

すんなりした喉元には、涙形の紫水晶をぶら下げたネックレス。様々な色があつたのだが、「ヴェイン様の目と同じ色だから」という理由で、新婦がこの色を選んだのだ。自分の目の色を選んでもらった新郎の胸中は、お察しの通りだろう。

「あら……カスミ、確か髪飾りを付けるんじゃない……？」

新婦が不思議そうに問う。カスミはレイナの髪に薄手のベールだけを付け、アクセサリーセットを片付けてしまったのだ。

カスミは顔を上げ、ふふっと小さく笑う。

「そうですね。金の髪飾りを準備していたのですが……ヴェイン様が、ご自分でご用意なさるようですよ」

「ヴェイン様が？」

当初の予定にはなかった事案に、新婦は目を丸くする。カスミはくすくす笑い、少しだけ位置がずれてしまったベールをそっと直す。

「そうです。レイナ様をびっくりさせたいから、デザインまでは言わないでくれ、とのことですよ。この後ヴェイン様がいらっしゃるので、その時にご覧になれますよ」

「そ、そうなんだ……」

髪飾りのことは気になる。だがそれ以上に、この自分のドレス姿を見せることになるのだと思うと、一気に緊張が押し寄せてくる。

おそらく、参列者全員の前に出るよりも、緊張する。

「……きれいって、言ってくれるかな」
新婦の呟きに、カスミは笑みを返す。

「言わなかったら、ヴェイン様の後頭部を張り飛ばします」
「っ……ふ、ふふ……そうね、お願いするよ、カスミ」
新婦と侍女は、互いの顔を見合わせてくすくす笑い合った。

全ての仕度を終え、カスミは他のお手伝いと一緒に部屋を出ていった。部屋に残るのは、新婦のみ。

この後、新郎がやってきて、式の最終打ち合わせの後、新婦の父親が来る。新婦は父親に手を引かれて教会に降り、先に祭壇前で待っている新郎の元に引き渡されるのだ。

この形式は、新婦の故郷である日本の教会式結婚式と、ほぼ形が同じだ。どうやら、王妃ミナミが自分の結婚式の際に当時の国王カイルに自国の結婚式について教え、カイルがその形式を採用したのだとか。

新婦　水瀬玲奈、もといレイナ・フェスティューは椅子に座り、不安な表情を隠せないまま、新郎の来訪を待っていた。

ウェディングドレスは試着や寸法合わせのために何度か店で着てみたが、「当日のお楽しみ」と言って、新郎には一度も見せなかつ

た。その時は、馬子にも衣装な自分の姿を見られるのが恥ずかしくて、言い訳も兼ねて言ったのだが、今になって恥ずかしさが倍増してくる。

あの優しい彼のことだから、絶対に褒めてくれる。そう分かってはいるが、不安な気持ちは拭えない。

永遠にも思える時の後、ゆっくりとドアがノックされる。「新郎をお通しします」と、教会の使用人が言っている。

レイナは立ち上がった。同時に、ドアがゆっくりと開く。

入室してきた青年は、ベルフォード王国の慣習に則って、真っ白な軍服を着ていた。彼自身背が高いため、すらりとした細身の軍服が非常に様になっている。鈍い金髪は軽く整えており、宝石のような紫の双眸は濡れたように光っている。

レイナと違って、化粧も装飾品も皆無な彼だが、元来持っている美しさと色気が存分に引き出され、見ているだけでクラクラとしてしまいそうだ。それくらい、レイナの未来の夫は魅力的なのだ。

彼は、じつとレイナを見ていた。見られるのがやはり恥ずかしく、レイナは真っ赤になって俯いてしまう。

「……レイナ」

「……うっ……」

「顔を上げてくれるか？ 可愛い顔が見えない」

甘く囁かれる言葉。気づけば青年は自分のすぐ目の前までやって来ており、レイナは彼に促され、ゆっくりと顔を上げた。

吊り上がった目と、薄い唇。長い睫毛の一本一本まで数えられるくらいの至近距離。

レイナは、彼を見ていた。同じように彼も、レイナを見ていた。

「……美しい。おまえが俺の妻となるなんて、夢のようだ」
彼は、レイナが願った通りの言葉を囁いてくれた。そして、その場に軽くしゃがんで震えるレイナの右手を取り、そっと指先に口付ける。

「愛しいレイナ……俺はきつと、ベルフォードの幸せ者だ」
「ヴェイン様……」

レイナは声が震えながらも、己を叱咤する。彼は、ヴェインは、自分を褒めてくれた。ならば、自分も彼に応えないと。

「あの、ヴェイン様も……とても、格好いいです。私、あなたの奥さんになれて……本当に、嬉しいです」

「可愛いことを言うな。式の前だというのに、抱き潰したくなる」
ヴェインは叱ってくるが、声は今にもとろけそうに甘いし、彼のゴツゴツした手がレイナの腰をさすってくる。

彼に撫でられ、レイナの体が反応する。だが、今はまだ早い。流されてしまったら、それこそ式に出られないような痴態を晒すことになってしまう。

レイナがぷうっとなら顔を膨らませて身を擦らせると、ヴェインはおかしそうに笑い、そしてふと真面目な顔になる。

「……カスミに聞いたかもしれないな。その、髪飾り」
「あ、はい。ヴェイン様が特別に用意してくださるとのことです」
機嫌を取り直したレイナは、ヴェインが先ほどから後ろ手に持っていた箱を差し出され、目を瞬かせる。

レイナの両手の平に乗りそうな、真っ白で正方形の箱だ。開封しやすさを念頭に置いているのか、リボンやシールなどもない。

「……これを、私に？」

「ああ。……開けてみてくれ」

ヴェインに促され、レイナはドキドキしつつ箱に手を掛ける。心なしに、ヴェインも声も緊張しているようだ。

絹のグローブが填った手で、そっと箱の蓋を持ち上げる。その中から覗かせた物体を見て、レイナは、息を呑んだ。

「ヴェイン様……」

「……その、おまえはきつと、この花の形に見覚えがあるんだろう？」

ヴェインの声はいよいよ不安を隠せないように震えている。レイナは何も言えず、彼の指先によって持ち上げられた髪飾りを凝視する。

髪飾りには、銀製の花があしらわれていた。五枚の花弁で、花弁の先が切り取られたかのようにV字型に割れている。銀の枠組みの中に、色つきガラスでボディを詰め込まれている、その色は薄ピンク。

大きい花が一つ、その脇に小さめの同じ花が二つ、空から舞い降りたかのような角度で取り付けられており、台座にはレイナの頭の形にフィットするように曲げられた銀のバレッタが付いている。

その、ピンク色の花は。ベルフォード王国　否、この世界のどこを探してもおそらく見つからないだろう、幻の花。

「……どうして、これを……？」

「……それは、おまえの精霊たちがよく知っている」

ヴェインが言うと、レイナの足元からひょっこりと、猫と鳥の精霊が姿を現した。今日は式だから、レイナの中で大人しくしようと

していた彼らも、ヴェインに促されて出てきたようだ。

『隠していてごめんね、玲奈。ヴェインとの約束なの』

猫の方が言い訳をしたため、レイナは驚いて猫を見下ろす。

「約束つて……え？ でもヴェイン様、この子たちと話ができないんじゃない……」

「俺は確かにこいつらの言うことは分からないが、俺の言いたいことは伝わるようだからな」

そう言つてヴェインと精霊たちが教えてくれたことによると。

ヴェインはレイナに花をあしらった髪飾りを贈ろうと、自邸の書庫で花の図鑑を見ていた。するとそこに、レイナの契約精霊である二匹が現れた。その時、レイナは別の部屋にいたため、こっそり抜け出てきたのだという。

精霊たちはニヤアニヤアチュンチュン鳴きながら、図鑑のページを繰るヴェインの手に猫パンチしたり嘴の先でページをめくつたりすることで、レイナの故郷に咲いている花の特徴を教えた。これなら絶対にレイナは喜ぶと踏んだ上で。

ヴェインは彼らの言わんとすることを察し、王国内に生えている花の様々な特徴を切り貼りし、色も選び、この世界には咲かない幻の花のデザインを仕上げた。そして精霊たちの合格をもらった上で、細工師の元に行つて髪飾りの注文をしたのだという。

レイナは彼らの話を聞きつつも、ヴェインの手の中にある髪飾りから視線を外せなかった。先が割れた薄ピンクの五枚の花弁。その名は

「桜……」

「サクラ、と言うのか。慎ましくて愛らしい、レイナのような花だな」

ヴェインは微笑み、腕を持ち上げた。ベールだけで飾りのないレイナの黒髪にそっと、桜の髪飾りが差し込まれる。

ぱちん、と音を立てた後、ヴェインは角度を調整するように数度位置をずらした後、よし、とレイナの肩に触れる。

レイナは彼に促され鏡に向かった。そこには、十二単をモデルにしたミヤノ・ブランドのドレスを纏い、桜の花をちりばめた髪飾りを付けた、黒髪黒目の女性が。

何も言えず固まったレイナの肩を抱き、同じように鏡に映るヴェインが優しくレイナを見下ろす。

「……おそらく、俺の力では本物のサクラを咲かせることはできないだろうし、おまえをチキュウに返すこともできない。俺は、おまえを故郷や本当の家族からも奪ってしまった。もう、本物のサクラを見ることもできないだろう。だから、その分一生を掛けて、おまえを愛する」

レイナは驚いたように顔を上げた。そこにあるのは、優しく微笑む最愛の人の顔。

「……俺を見つけてくれてありがとう、レイナ。この世界に残ってよかったと、そう思えるようにしてやる。愛してる、レイナ」

レイナの唇が震える。少しだけアイラインを引いた目尻に涙が浮かんだため、ヴェインは急いでハンカチでレイナの目元を拭う。

「すまない、式前の花嫁を泣かせるなんて……」

「違うんです……」

レイナはハンカチを持つヴェインの手をそっと、握る。

「嬉しいんです。ヴェイン様が、そこまで想ってくださいることが…とても、嬉しいんです」

「レイナ……」

「私も愛してます、ヴェイン様。幸せに……してくださいね？」

鏡の前で、新郎新婦は静かに抱き合った。

柔らかな日光を受けて、新婦の黒髪を飾る銀細工の桜が、きらりと輝いた。

花よ、風よ、この想いを空へ2

ヴェインが一足先に教会に向かった後、レイナの元に来たのはフエステイーユ子爵家当主、アルベルト。

「君の門出を祝えて何よりだよ、レイナ」

この世界でのレイナの養父はそう言って、熊のように厳つい体を縮め、くしゃりと顔を歪める。

「とても、きれいだ。君ならヴェイン殿のよい花嫁になれるだろう」「お父様……」

「故郷にいる君の本当の父君に代わって、私が責任を持って君を送り出そう。……娘よ、手を」

差し出される、大きな手。「娘」と呼ばれたレイナの目が、またしても潤む。

「……うん、ありがとう、父さん」

気づけば、レイナはそう言っていた。アルベルトを呼ぶときのお父様」ではなく、地球に残してきた実父を呼ぶときと同じ、「父さん」で。

アルベルトは目を見開く。そして彼は破顔し、血の繋がらない愛娘の手を引いて、教会へと向かっていった。

聖堂は、厳粛な空気に包まれていた。

祭壇前に立っているのは、白の軍服姿も眩しい新郎。彼の背中を、参列者たちが見守っている。

席の先頭にあるロイヤルシートにいるのは、ベルフォード王家四人。国王マリウスは王妃エデルの腰を抱いており、王妃の腕には生まれて間もない王女が。そしてその隣には、哀愁漂う空気を纏う、王子マーカスが。

基本的に前の列が高位貴族が座る場所である。王家のすぐ後には、新郎新婦の家族が。新郎の唯一の肉親である、アジエント伯爵ゲアリーは優しそうな顔にニヤニヤ笑みを浮かべ、弟の晴れ姿を見つめている。その隣には、新婦の養子先であるフェステイユ子爵家の皆が。当主が新婦を連れてきているため、子爵夫人アニエスと、新婦の弟妹三人が一張羅で座っている。ニコニコ笑みの夫人と双子の姉弟ミレイヤとフレイドはともかく、新婦の「弟」であるイサークは、何とも言えない表情で将来の義兄の背中を見ている。心なしか、挑むような、睨むような眼差しで。

彼らの後には、新郎新婦に関わりの深い者たちが並ぶ。新婦友人のガードナー伯爵令嬢やハートランド伯爵令嬢、ゲルド子爵令嬢はもちろんのこと、なんと北の都市シャンドリラの指導者の娘や、砂漠の国トウエンディ王子の使者まで参列している。彼らは新郎新婦が精霊討伐隊として遠征した際に出会った戦友であり、参列者の中でも特別な席を与えられていた。シャンドリラ指導者の娘の隣には、「ここでもいいの?」と言いたげな不安顔の娘が。茶色の髪の彼女も

同じく、精霊討伐隊の元隊員で、新婦たつての希望でこの席に招かれたのだ。

そしてその後には、新郎新婦の同僚たちが所狭しと押し込められていた。新郎が勤める騎士団の面々と、新婦が勤める書記部の面々中でも、書記部の席に座る背の高い青年は、新婦登場前からおんおん泣いている。傍らにいる別の青年書記官が呆れたように、友人の肩を叩いていた。

参列者たちが三者三様の思いで待つ中、新婦の登場を告げるアナウンスが入る。そして、背後の扉が開き、花の香りが教会に満ちた。

まず目に入るのは、巨体を誇る新婦の養父。あまりにも彼が大きすぎるので、彼の隣にいる新婦が隠れてしまっている。だが、それでも新婦の美しさは人の目を引いた。

漆黒の髪に、ミヤノ・ブランドのドレス。彼女が異世界人であることを前面に押し出した、非常に珍しい花嫁の姿。淡い霧のようなベールを押さえるのは、誰も見たことのない、不思議な形の花をあしらった髪飾り。

祭壇前の新郎が振り返る。赤い絨毯の上を歩いていた新婦は、祭壇前で養父の手を離れて一人、新郎の元へ向かう。

ゆっくりと階段を上ってきた新婦を、新郎が手を伸ばして抱き寄せる。そうして、新郎と新婦は並んで祭壇前に立ち、神官の説法を聞くのだ。

説法といっても、長々しいものではない。「二人が巡り会った運命」「変わらぬ愛を誓うこと」などを高々と述べた後、神官は二人の顔を順に見る。この世界では、「誓いますか？」のような質問はしない。

「新郎ヴェイン・エージェントと新婦レイナ・フェスティュー。これからそなたらの行く先に、幸福があらんことを！」

神官の声を受けて、二人は振り返る。とたん、割れんばかりの拍手が教会中に満ちる。

皆の声援を受けて教会の外に出た二人。この後は、中庭でのガーデンパーティーだ。

レイナはふうつと息をつき、傍らの夫を見上げる。

「ヴェイン様……」

「レイナ、忘れ物だ」

ヴェインがそう言っ、教会の中の参列者が見つめる中、レイナと向き合う。対するレイナは、ん？ と首を傾げる。ベルフォードの結婚式の段取りは何度の練習済みだ。別に、忘れ物はしていないはずだ。

「あの、何を……」

「愛してる、レイナ」

言った直後。

わああああ！ とひととき大きな歓声を上げる、参列者たち。歓声の中に嗚咽が混じっているように思われるのは、気のせいだろうか。

新婦を抱き寄せた新郎がベールを持ち上げ、その赤い唇にそっと自分の唇を重ねたのだ。

ベルフォード王国にはないが、新婦の故郷地球には存在していた、誓いのキス。

結婚式の準備をしている間、新婦が教えたことがある地球の結婚

式のやり方を、新郎は覚えていた。

「……幸せにする」

唇が離れた直後、ヴェインが熱のある声で囁く。呆然とされるままになっていたレイナだが、胸の奥から溢れる熱い思いに、またしても涙腺が緩む。

もう一度、皆の前で交わされるキス。

風が、吹く。

レイナのベールと黒髪を揺らし、桜の髪飾りを撫でていった風は空に舞い、この世界ではない、どこか遠くの地へと、吹き抜けていく。

幸せにね。

やさしい、懐かしい声。

「真理恵……？」

はっと、レイナが顔を上げる。釣られてヴェインも、青い空を見上げる。

幸せに、玲奈。

ずっと愛してるよ、玲奈。

幸せになれよ！ 玲奈！

「父さん、母さん……兄さん……」

声を震わせる妻の肩を、ヴェインは抱いた。

風を受けて、花びらが舞い上がる。

参列者たちの歓声を遠くに聞き、レイナとヴェインは二人並んで、青く晴れ渡った空をいつまでも見上げていた。

あの空を越えて。

ずっとずっと、遠くへと。

花よ、風よ。

私の想いを、あの空の遠くへと

夢よ、風よ、この言葉を友へ (前書き)

蛇足のような何か。

夢よ、風よ、この言葉を友へ

さんさんと残暑の日光も眩しい、夏の日。

つい一月前までは耳を塞ぎたくなるような大合唱を披露していたセミたちも、そろそろ命を終えて土に還る頃だろうか。

黒髪の少女は、晩夏の空を見上げた。

のっぽのマンションとビルに囲まれる空は四角形で、雲一つ残っていない。

「……ねえ、まだ見つかってないそうだよ。あの大学の、女子生徒……」

傍らを通り過ぎる人たちが、こそこそ噂話をしていく。少女はそんな通行人に八つ当たりじみた睨みを利かせ、ゆっくりと歩きだした。

アスファルトが日光を照り返す、大学前の交差点。

「学生クラッシャー」の名を冠するこの交差点は、なかなか赤から青に変わらないことで有名だ。ただし、その渾名を教えてくれた少女は、もうここにはいない。

少女は交差点に立つ。中途半端な時間なので、辺りに学生の姿は少ない。少女は交差点の前に立ち、ぼんやりと辺りを見回した。

何の変哲もない、十字路の交差点。この横断歩道を渡ればすぐ、少女が通う大学の門が見えてくる。

約一月前、この交差点、この位置にレポートの入った茶封筒を残し、少女の友人は姿を消した。

行方不明が判明したのは、夜になってからだ。娘が帰宅しないことを不安に思った両親が大学に問い合わせたところ、昼過ぎに大学に向かったはずの娘は、学校に到着していなかった。

すぐに警察に話が行き、捜索願が出た。間もなく、交差点にぼつんと残された茶封筒が発見された。植え込みのすぐ脇に落ちていたから、通行人も誰も触れなかったのだろう。

封筒の中には、彼女が提出するはずだったレポートが入っている。締め切り間近だからと急いで仕上げていた姿が思い出される。

捜索願が出てから、早一月。警察もお手上げなほど、まったく彼女の行方が分からなかった。目撃者も皆無。彼女の交友関係を鑑みても、何の手がかりもなし。家出かとも思われたが、彼女は行方不明になる直前に近くのコンビニに寄って母親から頼まれていた乾電池を購入していたことが分かった。家出する者が直前に、親のお遣いをするとは思えない。

警察は、少女のマンションにも来た。よく、少女の家で遊んでいたためだ。もちろん、少女に覚えはない。だが、なんとしても友人を捜してほしかったので、知っていることは何でも教えた。それでも、何の手がかりも出てこなかったそうだ。

少女はゆっくり踵を返した。季節はもうすぐ、秋になろうとしていた。

その日、少女は夢を見た。

夢の中で、友人がこちらに向かって手を振っていた。その姿は見慣れた夏の私服ではなく、少女が大好きなゲームに出てきそうな、西洋風のドレス姿だった。

友人は、泣き笑いのような顔を浮かべていた。そして大きく手を振った後、少女に背を向けた。彼女の向かう先には、鈍い金髪の青年の姿があった。

目が醒めた少女は、ベッドの上でぼかんとしていた。

今の夢は何だったのか。何かの、暗示なのか。

悶々と悩む少女は、その日の昼過ぎ、驚くべきことを耳にした。

行方不明になった友人の両親が、捜査の打ち切りを願い出たのだ。

少女は、オレンジ色の夕日が差し込む道を歩いていた。手には、最新型のスマートフォン。住所だけは聞いていたので、マップアプリを起動して電車と徒歩で、目的地に向かっていった。

辿り着いたのは、ごく普通の二階建ての家。豪邸で暮らしていた少女にとっては小さな家に思われるが、ここが自分の友人が生まれ育った家だと思うと、一気に親近感が湧く。

チャイムを鳴らすと、中年の女性が出てきた。どことなく友人の面影がある。

マスコミや警察との対応に追われていたからだろう、彼女は少しだけ落ちくぼんだ目で少女を見つめてくる。

「……こんにちは。えっと……？」

「九条真理恵と申します。玲奈さんの友人です」

少女　真理恵は礼儀正しく挨拶する。すると、女性は「九条真理恵」の名前に覚えがあったらしく、目を瞬かせる。

「あなたが真理恵さん！……どうぞ、入ってください」

真理恵が通されたのは、玄関から入ってすぐの応接間だった。棚

には、幼い頃の友人のものとと思われる写真が収められたフォトプレートがたくさん並んでいる。

「真理恵さんのことは、娘から聞いています」

そう言って、友人の母は真理恵の前に麦茶入りのコップを出す。

「大学で一緒になって、よくお家に遊びに行かせてもらっていたそうですね」

「はい。玲奈さんとはいろいろと、話も弾んだので」

そう言って真理恵はありがたく麦茶を飲む。何度か友人の水筒から茶を頂戴したことがあるが、それと同じ味だった。

笑顔で水筒を差し出してくれた彼女のことを思うと、つんと鼻の奥が痛くなる。

「……ニュース、見ました。玲奈さんの捜索を打ち切るようお願いしたそうですね」

真理恵が本題に切り込むと、母親は表情を曇らせた。非難されたと思っっているのだろう、慌てて真理恵は首を横に振る。

「いえ、だめとかじゃないんです。ただ、理由を教えてください……」

……
「理由、ですか」

母親は肩を落としている。きっと警察にもマスコミにも、何度も同じ質問をされてきたのだろう。そしてその度に、何と言おうか言い倦れた、そんな感じた。

しばしの沈黙の後、ゆっくり真理恵は切り出した。

「……私、夢を見たんです」

ぴくりと、母親の肩が震える。

「夢には玲奈さんが出てきました。玲奈さんはどこかの国のお姫様みたいなドレスを着ていて、私の方に」

「手を振って、金髪の男性の元に歩いていった？」

震える、母親の声。

真理恵はこくつと唾を呑み、頷いた。

「……同じ、夢を見たのですね。私も、お母様も」

「……そう、ですね。実は、私だけではなくて、夫も、他県に出ている息子も……」

信じられない、とばかりに母親は首を横に振る。

「まさかとは思いました。でも……夫に聞いても、息子に電話で聞いても、全く同じ夢のことを言うから……だから、家族で決めたのです。玲奈の捜索を終えてもらおうと」

「玲奈さんがどこかで生きていると……そう思ったからですか」
真理恵がそつと問うと、母親はゆっくり頭を垂れた。

「……所詮夢だと分かっています。それでも、あの子の困ったような笑顔を見ていると、これ以上捜索を続けても、何にもならないと思ったのです。もしかしたら、あの子は私たちに伝えたかったのではないかと……」

二人の間に、沈黙が流れる。

「それは……警察には言ったのですか？」

「まさか……夢物語だと叱られるだけだと、皆分かっていたからだから、適当な言い訳をしてお断りしました。……何となく分かるのです。もう、二度と玲奈はここに帰ってこない、と……」

「お母様……」

真理恵は何も言えず、声を震わせて嗚咽を漏らす友人の母親を見つめていた。

数日後。真理恵はまた、夢を見た。

夢の中で、真理恵は一人ではなかった。先日会った友人の母と、あと知らない男性と青年がいた。たぶん、友人の父親と兄だろうと予想する。

真理恵たちは四人で、知らない場所にいた。そこは真っ白な世界。四人の前方には、結婚式の衣装を羽織った男女が。

片方は、鈍い金髪の男性だった。彼は傍らにいた女性を抱き寄せ、キスをした。誰もが憧れる、幸せな結婚式の風景だ。

女性の方は 見間違いようもない。四人がよく知っている少女、水瀬玲奈だった。

玲奈は、十二単のようなドレスを着ていた。髪を飾るのは、桜の花をモチーフにした髪飾り。少しだけ形は変わっているが、これが彼女の結婚式の衣装なのだろう。

真理恵たちは気づいた。

玲奈は今、どこか遠くで結婚式を挙げている。

真理恵たちの誰も知らない金髪の青年に選ばれて、彼の妻になる。

真理恵は、いつぞやゲームで見たことのあるシーンを目にして不

謹慎にもわくわくしていたが、傍らにいる玲奈の男家族たちは何とも言えない目をしていた。確かに、娘や妹が知らない間に結婚していたら不快にもなるだろう。

だが、真理恵は分かった。玲奈の父も兄も、この結婚を認めざるを得ないと。

なぜなら、玲奈は笑っていたから。

とても幸せそうに青年に寄り添っていたから。

こうなったら、こちらはエールを送るしかない。

「幸せにね」

真理恵は白い世界の中で、呼びかける。すると、青年に抱きしめられていた玲奈が驚いたように目を見開き頭上を見上げている。

そんな友人の姿に、真理恵の涙腺が緩む。届いた。真理恵の声が届いた。

玲奈の家族たちも気づいたのだろう、真理恵に負けじと玲奈に呼びかけている。

「幸せに、玲奈」

「ずっと愛してるよ、玲奈」

「幸せになれよ！ 玲奈！」

玲奈の母が、父が、兄が、叫ぶ。玲奈は戸惑ったように頭上を見ている。はらはらと、その目から涙が溢れる。

涙を拭ってあげたかった。「泣かないで」って、言ってあげたかった。

だが、それは真理恵の役目ではない。

それをするのは、玲奈の隣にいる青年の役目。

だんだん、白い世界が迫ってくる。真理恵たちの体が宙に浮き、自分たちを見上げる玲奈と青年の顔がどんどん小さくなる。

「玲奈！」

一足先に、玲奈の家族たちが霧の向こうに消えていく。最後まで足掻いていた真理恵は喉の奥がカラカラになるような感覚に囚われつつ、もう点になってしまった友人に向かって叫ぶ。

「今までありがとう、玲奈！ 私……私、玲奈の友だちでいて、よかった！」

ありがとう。

たわいもない話に付き合ってくれて。

愚痴や、我が儘を聞いてくれて。

ありがとう。

翌朝、真理恵は妙にすっきりした気持ちで起床した。

ベッドから起き上がり、鏡に向かう。寝癖で頭はボサボサだが、頭の中は非常にクリアだ。

ベッドサイドにあったスマートフォンが着信を促す。ちらっと見てみると、何かあったときのためにと電話番号を交換しておいた、玲奈の母親の名前がディスプレイに映っている。

真理恵は鏡に背を向けつつ、思う。

玲奈は、あつちの世界で頑張っている。頑張つて、幸せになった。ならば、真理恵がすることは。

真理恵はスマートフォンを持ち上げた。

弱気になつていて、実家を継ぐことを疎み、趣味の世界に没頭していた自分。

そんな自分ではいつか……いつか、再会したときに玲奈の前に胸を張つて立てない。

だったら。

「……玲奈。私、実家を継ぐよ」

大学で勉強し直して、人生の途中でこの世界から立ち去つた玲奈の分も頑張つて。

そうしたら、京都に戻ろう。嫌だ嫌だと言っていた実家に向き合い、両親と話をしよう。

もう二度と家族と会えない玲奈の分も、しっかり生きていこう。

真理恵は小さく微笑んだ。ころりと目尻から一粒だけ涙をこぼし、そしてスマートフォン 통화ボタンを押す。

「おはようございます、九条真理恵です。……ええ、そのことで私もお母様にお話をしたくて……」

マンションの窓から見える世界は、どこまでも美しかった。

夢よ、風よ、この言葉を友へ (後書き)

これにて番外編も終了です。

「完結済」マークを付けさせていただきます。
今までありがとうございました！

あなたに贈る子守歌

外は雪景色だ。

ベルフォード王国城下街は白い雪に包まれており、月光に照らされてぼんやりと雪の影が窓に浮かび上がる。

時刻は夜中前。外を出歩く人もほとんどおらず、たとえ出歩こうとも雪が人々の足音を吸収し、かき消してしまう。

今年のベルフォードは、冬の訪れが早かった。

レイナは窓に掛かるカーテンを静かに閉じる。小さな部屋には、暖炉の類はない。あまりにも長時間カーテンを開けていると部屋の温度が下がってしまう。

レイナ・アジエント。

彼女がこの世界に落ちこちてきて、三度目の冬だった。

正方形の部屋は壁紙も床もカーペットも、愛らしい黄色で統一されている。部屋の隅にある箱には、布製のぬいぐるみや振ると音の出るおもちゃ、噛んでも大丈夫な柔らかいボールなどが入っている。先ほど見たときはあちこちに散らばっていたので、使用人が片付け

てくれていたのだろう。

レイナは足音を極力立てないように、部屋の中央に据えられた小さなベッドに近付く。手作り感溢れる木製のベッドを覗き込んでまず視界に飛び込んできたのは、二つのもこもこした生物。

レイナの気配を感じ、二匹が同時に目を開く。縞模様が立派なトラ猫と、ふわふわの羽毛が自慢のアヒルサイズの鳥。二匹はレイナがベッドの中を見やすいようにと、体の位置をずらしてくれた。

二匹に包まれるようにして眠るのは、生まれて一年も経っていない赤ん坊。頬がふっくらしており、くるくるの金髪が愛らしい。目は今はしっかり閉じているが、開眼するとこの地方ではやや珍しい、黒曜石のような漆黑を目にすることができる。

髪と容姿は父親に、目は母親に似た、可愛らしい女の子の赤ちゃん。

レイナと、夫との間に生まれた長女。

将来は夫の美貌を受け継いだ子になるだろう、とレイナは思っているのだが、夫は「いや、レイナに似た可愛い子になるだろう」と真顔で言っただけのものだ。

トラ猫と鳥は位置をずらし、赤ちゃんの体に両側から寄り添うようにして寝転がる。この二匹は、レイナの精霊である。ただのペットではない。

二匹は寒い日、レイナの娘が凍えないように一緒に添い寝をしてくれる。赤ん坊の部屋に暖炉を置くのは、危険が伴う。レイナの生まれ故郷ならまだしも、便利な電気機械のないこのベルフォード王国では冬になると暖炉による火事がたびたび発生する。

そのため、レイナは自分が添い寝しない日はこうして、精霊たち

に娘のお守りをしてもらっていた。精霊は抱き上げると温かい上、娘が寝やすいように体温を保ってくれているようだ。夜中にぐずることがあればすぐに知らせてくれるのも、有難い。

レイナは腕を伸ばし、娘の額に掛かる髪をそつと払いのけた。ちいさな、ちいさな体だ。

こんなちいさな体でも、一生懸命生きている。そろそろ掴まり立ちができるようになり、今日も何度も転びそうになりながらテーブルに掴まって立ち上がるうとしていた。その光景を思い出すと、思わず笑みがこぼれそうになる。

レイナに撫でられて、赤ん坊も夢の中でにっこり微笑む。楽しい夢を見ているのだろうか。ふくふくとした右手が近くにあったトラ猫精霊の尻尾を掴み、にぎにぎしている。トラ猫はちらとそちらを見ただけで、すぐにまた体を伏せてしまう。赤ん坊に乗っかられた尻尾を掴まれたりするのも、慣れていたので。

レイナはそんな精霊たちに、心の中で呼びかける。

『ミーナ、テイル。いつもの、お願い』

『はいよ』

『了解。席外そうか？』

『そうね……ちよつと続き部屋に行つてくれる？』

レイナの頼みを受け、二匹の精霊はベビーベッドから飛び降り、すたすたと続き部屋の方に行ってしまった。あちらに二匹用の猫ベツドと鳥ベツドを置いているのだ。

精霊たちがいなくなつてから、レイナは何度か、発声練習するように声を出してみる。

そして、眠る娘の頬を撫でながら口を開く。

ゆったりとしたリズム。

決して大きな声ではないが、愛情と優しさに満ちた歌声。

レイナは、歌を歌っていた。

眠る娘のために、子守歌を。

他の母親と大差ない行動だが、唯一違うのは、彼女が歌う子守歌の内容。

おそらくこの場にどのベルフォード人がいても理解することができない、不思議な言語の歌。

遠い遠い、レイナの生まれ故郷の子守歌。

レイナは三年近く前に、この世界にやってきた。

それまでの彼女は、地球という星の日本という国で生活する学生だった。

女神の導きによってベルフォード王国に降り立ったレイナは、長い冒険と葛藤の末、こちらの世界に留まることを選んだ。そして、当時恋人だった夫と結婚し、娘を生んだ。

レイナはこの世界の人間ではないので、通常ならばベルフォード王国を始めとした諸国の共通語を喋ることはできない。そのためレイナが契約した精霊たちが媒体となり、レイナと他の人間との言語

コミュニケーションが円滑に行えるようにしてくれていた。

今、レイナは精霊たちに頼んでその媒介をやめてもらっている。そして、自分の他の喋る人が誰もいない故郷の言葉　日本語で、娘のための子守歌を歌っているのだ。

数ヶ月前から、レイナは日々の習慣であるかのように、日本語の子守歌を歌っている。夫がいれば怪しまれるだろうから、夫の帰りが遅い日だけ、こっそりと歌っている。

純ベルフォード人と言つて過言ではない髪の色と容姿を持った娘。だが娘の漆黒の目を見ていると、ときたま胸が苦しくなるのだ。

決心したのに、故郷が恋しくなる。

だから夫には秘密でこうして、夫にも理解できない言葉で子守歌を歌うのだ。

かつて、レイナの母親が歌ってくれた子守歌を。

レイナはドアに背を向けて子守歌を歌っていた。全部で三番から成る歌だが、ひとつひとつが短いので何度も繰り返し歌う。

いつもならば夫が帰宅すれば精霊たちが教えてくれるのだが、今日はなぜか、教えてくれなかった。

「レイナ？」

ドアが開く。レイナはびくつと身を震わせ、振り返る。

外出用のコートを脱いだだけの夫が、そこに立っていた。しまった、とレイナは顔を歪める。残業で疲れた夫のために、いつもなら帰ってくるまでにキッチンで夕食を温め直すのに。

「ごめんなさい、今すぐご飯を……」

言うてから、レイナは息を呑む。

精霊たちの通訳機能を解除したままだった。案の定、夫はレイナを見て怪訝な顔をしている。レイナが日本語しか喋れないので、意味が理解できていないのだ。

急ぎレイナは続き部屋にいる精霊たちを呼ぼうとしたが、それより夫の方が行動が早かった。

彼はレイナの状態を把握したのだろう。頬に笑みを浮かべ、緩く首を横に振る。精霊たちを呼ばなくてもいい、ということだろう。

夫の真意を測りかね、レイナはその場で中途半端な姿勢のまま、立ちつくす。夫はレイナの隣に立ち、歳を取ろうとも変わることはない美しい笑みを浮かべた。

「レイナ、イ、ジオ、デイ、ペル、チエ？」

案の定、固有名詞以外は意味が分からない。レイナは肩をすくめるが、夫は構わず、視線を眠る娘の方に向けた。

そして、口を開き

「……え？」

レイナの唇から、あっけにとられたような声がこぼれ落ちる。
どうして、なんで？ と漆黒の目が夫を凝視する。

夫は横目で妻を見、いたずらっ子のようにちいさくウインクを寄越した。そうしている間も、彼は 歌うのを、やめない。

純ベルフォード人で、レイナの故郷の言葉が理解できない彼。
だが、今の彼は歌っている。

レイナの故郷で作られた子守歌を、たどたどしい声で。

「ヴェイン様……？」

「レイナ」

互いの名前しか伝わらない状況だが、夫婦は見つめ合った。じわじわと、レイナの胸から熱いものがこみ上げてくる。

夫が、子守歌の二番を歌う。

レイナは真面目な顔で歌を歌う夫を見、そつと唇に音を乗せた。

レイナのアルトボイスと、夫のテノールボイスが溶け合う。

やはり異国の歌は歌いづらく、三番全てを覚えられているわけでもない夫は所々つつかえたが、その度にレイナがリードし、掬い上げる。

胸が、熱い。痛い。

身に馴染みのない歌を一生懸命歌う夫が、愛おしい。

三番まで歌い終わると、夫が続き部屋に向かって手招きした。精霊に翻訳を頼め、ということだろう。

すぐにレイナの体にベルフォードの言語機能が戻ってくる。レイナは夫を見上げ、おずおすと口を開く。

「……お、お帰りなさいませ、ヴェイン様」
「ただいま、レイナ」

そうして夫はレイナを抱き寄せ、ただいまのキスをする。日本の家庭で育ったレイナにとってはややこつ恥ずかしい挨拶だが、結婚して二年目の今は、だいぶ慣れてきた。

「……あの、さっきの歌ですが」
「……ああ。俺、間違えずに歌えていた？」

夫は眉を垂らし、心配そうに問うてくる。近衛騎士団でバリバリ働く傑人とは思えない、不安げな眼差しだ。

レイナは急ぎ首を縦に振る。

「ええ！ ……びっくりしました。その、まさか聞かれていたとは……」

「……そうだな。歌詞の意味はよく分からないのだが、レイナがリーナのことを想って歌う子守歌なんだろうとは、すぐに分かった」

そう言っつて夫はすやすや眠る娘を見つめる。

家族ぐらいにしか見せない、甘くて優しい笑顔で。

「……レイナを驚かせようと思って、ずっとこつそり練習していたんだ。歌はそれほど苦手ではないのだが、いかんせんおまえの母国語は発音が難しい。……空き時間に詰め所で口ずさんでいたから、部下たちにはたいそう気味悪がられた。変な宗教にはまっているのではないかと、病院に連れて行かれそうにもなった」
「……そうなのですか」

胸が熱い。

胸だけではない。顔が熱くて、目尻がじわじわと燻ってくる。嬉しい。

これ以上もなく、嬉しい。

ぼたり、と熱い滴がベビーベッドの毛布に落ちる。

「……ヴェイン様……私、今、ものすごく幸せなのです」

「レイナ……」

「旦那様がいて、娘がいて……私の気まぐれだったのに、リーナのために一緒にあの子守歌を歌ってくれて……嬉しいんです」

「よっぽど思い入れのある歌なんだな」

「はい……母が教えてくれた歌なんです。その、もし私に子どもが生まれたなら、母のように歌ってあげたいと思っていて……」

レイナの娘は、母親の故郷を知らない。教えたとしても、そこがどんな場所なのか、実際に目で見ることは叶わない。

レイナも、娘が日本語を喋れるようになることまでは望んでいない。この世界で生まれ、暮らしてゆく娘には不要の言語だから。

それでも、自分のささやかな願いを叶えたかった。

たとえ、娘にその歌詞の意味は分からなくても。

夫はレイナの言葉を聞き、ふと不安になったのか眉を寄せた。

「……その、俺がその思い出の歌を歌って、よかったか？ 正直下手くそだったろうし……」

「とてもよかったです。旦那様と一緒に故郷の歌を歌えるなんて……」

「これ以上ない、プレゼントです」

遠い遠い日本。

二度と帰ることのない故郷。

異世界人であるレイナを受け入れ、愛し、守ってくれた夫。
肉親のいないレイナに、家族を与えてくれた夫。

「……愛してます、ヴェイン様」

もう一粒だけ涙をこぼし、レイナは自分にできる精一杯の笑顔を
向ける。

大好きです、幸せです。

夫も、レイナの体を抱き寄せて腕の中に閉じこめる。夫の胸元か
らは、外の匂いがした。

「……俺も、愛している、レイナ」

胸が、暖かい。

愛おしい、幸せ。

「……その、もう一度、リーナのために歌ってやらないか？ ミー
ナとテイルには外してもらって」

夫が遠慮がちに申し出る。レイナはすぐさま頷き、精霊たちにお
願いして言語機能を外してもらう。

レイナは、歌いだした。すぐさま夫も唱和する。
優しい、暖かい、子守歌。

ありがとう、幸せだよ。

その想いを込めて、夫婦は愛おしい娘に贈る子守歌を歌った。

姉の婚約

姉が、恋人同伴で家に戻ってきた。

イサークは普段、王城の使用人居住区の狭い自室で寝泊まりしている。次期子爵である彼だが、職務中の身分は一介の書記官に過ぎない。他の同僚よりも年若いため、必然的に狭い部屋を宛われることになっていった。

だが本日は父から、「レイナが大切な話があるそうだから、家に戻れ」と言われており、仕事が終わった後王都にある屋敷に戻ってきたのだ。

呼ばれた時点で、なんとなく姉の話というのは察しが付いていた。そして居間で待つイサークたちの元に、姉とその恋人が並んで入ってきたことで予想は確信に変わる。

イサークは目を細め、目の前の男女二人を見つめた。

向かって左側にいるのは、イサークの姉であるレイナ・フェステイユ。黒い髪に黒い目。ベルフォード人とはかけ離れた容姿の彼女は、非常に波乱に満ちたこの一年半を過ごしてきた。

父に拾われて養女となった時の彼女は、肉体年齢が十歳程度だった。そんな彼女は類い希な頭脳を持っており、少年の姿で難関である書記官登用試験に合格した。

レイナが実は大人の女性で、女神の啓示により異世界からやって来たということを知ったのは、今から約一年前。彼女の後を追う形でイサークも書記官になり、影ながら「妹」を支えることにした。

そんな彼女は女神の願いを叶え、本来の姿に戻った。少女の姿のレイナ、少年の姿のレン、そしてかりそめの大人の姿のレイリアという名を捨て、「レイナ・フェスティュー」という人間としてこの世界で生きていくことを決めた。

故郷であるチキユウに戻ることもできた。だが彼女の意志を決定づけたのは、言うまでもなく彼女の恋人。今、隣に座っている青年である。

身の丈はすらりと高く、小柄な姉とは頭一つ分以上身長差がある。緩い癖のある金色の髪に、急な角度に吊り上がった紫色の目。世の女性を感嘆させる美貌に、引き締まった体躯。

見目麗しいだけでなく、近衛騎士団第四部隊の隊長を務める彼は「紅の若獅子」とも呼ばれ、皆の憧れの的となっている。イサークも同じ男として、彼には羨望の想いを抱えていた。

そんな彼は今、姉と寄り添って座り真摯な眼差しをこちらにぶつけてきていた。思えば、彼が正式に我が家に来てくれるのはこれが初めてかもしれない。紳士な彼は夜に姉と出かけることはあっても、必ず深夜になる前に家まで送ってきてそのまま帰るとのことだから。

「今日は時間を取ってくれてありがとうございます。お父様、お母様、イサーク、レックス、ミディア」

姉が口火を切り、家族の名を呼びながら順に視線を合わせてくる。両親はゆっくり頷き、八歳になったばかりの双子の弟妹レックス

とミディアは目を大きくして姉とその恋人を見つめている。彼らはまだ、何の話なのか見当が付かないのだろう。

「私とヴェイン様から、皆にお知らせしたいことがあります。……
ヴェイン様」

「ああ」

姉の視線を受け、ヴェインも頷く。そうして彼は姿勢を正し、隣に座る姉の手を握った。

「……半年ほど前からレイナと交際している。そしてこの度、俺はレイナに正式に結婚を申し出た」

ヴェインの言葉に、両親とイサークはさもありません、とばかりに息をつく。レックスは目を見開き、ミディアは「わあ！」と声を弾ませる。

「それじゃ、姉様は結婚するの!？」

「ちよつと、ミディア」

「構わない、フェスティールユ子爵夫人。……レイナからは、諾の返事をもたらしている」

はしゃぐミディアを窘めようとする母にも優しく声を掛けた後、
ヴェインは父と　そしてイサークに視線を向けた。

「俺はレイナを心から愛している。一生をレイナのために尽くすことを誓う。だからどうか、結婚を許してほしい」

「お願いします、お父様、イサーク」

隣で姉も頭を下げる。

ベルフォードでは、結婚を約束した男女がそれぞれの家に挨拶に向かう際、家長と跡継ぎ二人の許可を得ることになっている。もちろん、母親やその他のきょうだいなどにも許しを得るのだが、形式上は父親と長男に申し出るものだった。

イサークはちらと、隣父を見る。見上げるほどの大男の父はイサークを見下ろした後、小さく息をついた。

「……アジエント殿。あなたのことは娘からもよく伺っております」

父は丁寧な口調で応える。

イサークたちは子爵家、相手は伯爵の弟。直系ではないにしろ、相手は自分たちより格上である。

「ご存じの通り、レイナは我々の実の娘ではありません。レイナは努力家で負けず嫌いですが、反面我慢しすぎ、己の体や心を犠牲にしてしまうところがあります」

父の言葉に、姉が少しだけ気まずそうに身じろぎした。凶星を指されて居心地悪いのだろう。

「ですが、アジエント殿ならば娘を支え、守ってくださいると信じております。こちらこそ……どうか、私たちのかけがえのない娘をよろしく願います」

「……感謝する、フェステイユ子爵」

「おまえもだ、レイナ。おまえもこれから、アジエント殿を支えていきなさい。そうして二人で幸せになること　それが私の一番の願いだ」

「……はい、お父様！」

姉とヴェインの表情が緩む。そして二人がイサークを見つめてきたため、イサークはいつも通りのつんけんとした態度を装って口を開く。

「僕からは、特に言うことはない。これから末永くよろしく頼む、アジエント殿」

「ありがとう、イサーク殿」

イサークの言葉を受け、ヴェインは礼儀正しく頭を下げた。

次期家長であるイサークが「末永くよろしく頼む」と言うことで、イサークが実家を継いだ後もフェステイユ子爵家はアジエント伯爵家と懇意にしていく、という約束の言葉となるのだ。

次に母たちからも祝福の言葉を受け、姉と婚約者は笑みを浮かべている。互いの手を固く握り合ったまま。

イサークはそんな姉たちを、遠い眼差しで見つめていた。

その後、厳粛な雰囲気から一転して父は本来の豪快な性格に戻り、「まあ一杯飲むか！」と大笑いした。

酒が飲める年齢でないイサークとレックスとミディアはジュースで、あとの者は使用人が持ってきたワインで乾杯をした。

間もなく双子は就寝の時間になり、両親とレイナは今後のこと話があるというので、ヴェインは一旦席を外すことになった。

「アジエント殿。よろしければ両親の話が終わるまで、庭で涼みませんか」

イサークはヴェインに声を掛け、庭に誘った。

今は初冬。薄着で出るのは心許ないが、酒で火照った体には丁度いいだろう。

ヴェインは快諾し、二人は揃って中庭に出た。

子爵家の庭は、貴族のそれにしてはシンプルでオブジェも少ない。日中はレックスやミディアが散歩したり駆け回ったりすることもあつたため、障害物の少ない仕様にしているのだ。

ヴェインに、庭に据えられた木のベンチを勧める。実はこのベンチ、大作業に目覚めた父が自分で作ったものだ。双子がよちよち歩きの頃に作られたので古びた感じはするが、丈夫な木材製なのでまだまだ現役である。

イサークはヴェインの向かいに座り、口を開く。

「……改めて。姉との婚約、おめでとうございます」

「ありがとう、イサーク殿」

ヴェインはざらつきのあるテノールボイスで返事をする。そういえば姉は、ヴェインのこの声が好きだと言っていたと思ひ出す。

イサークは膝の上でぎゅっと拳を握った。

レイナ。イサークの姉。

何を考えているのかよく分からなくて、発想が突拍子もなくて、いまいち頼りにならない姉。

「……ご存じだと思いますが、うちの姉はあれでけっこう頑固ですし、考えていることはよく分からないし、なんというか、よく分からない人間です」

「弟君から見てもそう映るのだな」

イサークの言葉に、おもしろそうにヴェインは返す。彼は長い脚を優雅に組み、目つきを和らげてイサークを見てくる。

「確かにレイナは 端的に言うとな変なやつだ。俺が今まで会ったことのあるどの女とも違う。違うからこそ きつと俺は、あいつに惚れたんだろうな」

「はい……姉を想ってくださいるのがあなたで、今ではよかったと思います」

「今では？ ということはイサーク殿は、最初は俺を認めていなかったと？」

ヴェインが尋ねる。だがその口調は穏やかで、責めるような響きはない。イサークの反応をおもしろがっているようだ。

イサークはしばし逡巡した後、頷いた。

「……おっしゃる通りです。俺はレーナの兄でした。あいつを守ってやるのは俺だ、あいつが変な男に引つかからないようにしてやらないといけないと思ってました」

だんだん口調が崩れてしまう。なんだか自分でも何を言っているのか分からなくなる。

それでもイサークは必死に言葉を紡ぐ。まるで、話題が尽きるこ

とを恐れているかのように。

「いつまで経つても作法を覚えきれないし、書記部でも仕事はできなくせに妙なところで抜けているし。『私はお姉さんだからね!』
と言いながら頼りにならないし」

「ああ、レイナはそういうやつだな」

「……でも、それでもあいつを嫌いになれなかった。あいつも、へらへらしながら俺に近付いてきた。これからも、俺があいつを守っていくんだと思ってた」

だが、それは叶わないこと。

レイナはイサークよりもずっと年上。しかも、ベルフォード王族からも信頼される「異世界の乙女」。

そんな彼女が、いつまでもフェスティュー家に　イサークの近くにいるわけない。

分かっていた。

レイナが最終的に選ぶのは、イサークではないことくらい。

「……ヴェイン殿。俺はあなたのことを尊敬しています」

「身に余る光栄だ」

「でも、少しだけ恨めしいです」

「そうか。正直に言ってくれてありがとう」

ヴェインは笑う。恨み言を吐かれたというのにその表情は穏やかで、イサークを真っ直ぐ見つめてくる。

「イサーク殿、正直な気持ちを打ち明けてくれて感謝する。……そして、貴殿の大切な姉君を俺に託してくれることにも」

「……他の男なら俺もあの手この手で阻害しますが、あなたには勝

てない」

「そうか……貴殿に認められたようで、よかった」

ばたん、と少し離れたところで扉が開閉する音がする。近付いてくる、軽い足音。

「ヴェイン殿　いえ、ヴェイン義兄上。姉をよろしくお願いします」

ベンチから立ち上がり、イサークは早口でまとめた。
そこで、初めてヴェインの表情が揺れる。

イサークは不意打ちを受けたようなヴェインの顔を見て、してやったとばかりに微笑む。

「イサーク、ヴェイン様　あつ、いたいた」

「いたいた、じゃない！」

ひょっこり顔を覗かせたレイナ。彼女に向き直り、イサークは目を三角に吊り上げてやる。

「おまえ、そんな薄着で外に出るなど言っているだろう！　風邪でも引いたらどうする！」

「え、いや。これくらいの風ならなんてこと」

「あつたら困るから、事前に言っているんだろう！　ガウンを羽織るくらいすぐできるだろう！　シヨールでもいいから、とにかく冬場は何か羽織って外に出る！　ベルフォードの冬はかなり堪えるんだ！」

「うつつ……了解です」

イサークに叱られ、しょぼんと小さくなるレイナ。本当に、あの小さなレーナだった頃と何ら変わらない。

変わらなければ、よかったのに

「それで、急いでやって来てどうしたんだ、レイナ」

「あ、はい。お父様たちがヴェイン様をお呼びなのです。私と揃って来るようにと」

「そうか。では改めて話をしに行かなければな」

ヴェインも立ち上がり、脇に立っていたレイナの腰にさりげなく手を回す。

貴族の男性が親密な間柄の女性をエスコートするときの仕草なのだが、まだベルフォードの作法に馴染みきれていないレイナは微かに頬を赤らめている。

「では失礼する、イサーク殿。貴殿と話ができてよかった」

「こちらこそ」

イサークは丁寧に応えてお辞儀をする。

ヴェインはレイナの体を自分に密着させて、イサークに背を向けた。すぐに二人の姿は樹木の向こうに消えてしまったが、「あっ、もうヴェイン様!」「すまない、我慢できなかった」との二人のやり取りが風に運ばれて届いてきた。

やれやれ、と肩を落としてイサークはベンチに逆戻りする。両腕を後頭部に回し、ベンチの背もたれに身を預けて夜空を仰ぎ見る。

お兄様!

偽りの姿で微笑むレーナの顔が脳裏をかすめ、すぐに闇の中に溶

けていってしまっ。

「……婚約おめでとう、レイナ」

そう呟くイサークの声は、今までにないほど甘く、優しくかった。

第四部隊、子守をする

「すまん、おまえたち。一時間ほど、リーナを預かってくれ」

そう言って申し訳なさそうに眉を垂らす上司に、男たちは目を瞬かせた。本日、彼らの上司は休みを取っていたはずだ。

上司の腕の中には、かわいらしいフリフリドレス姿の少女が。状況がよくわかっていないらしく、愛くるしい顔立ちをきよとんとさせ、室内を見回している。

どう返事をしようか迷う男たちを代表し、ひときわ体の大きな男がおずおずと進み出る。

「えーっと……俺たちにお嬢ちゃんを預かってほしいってことツスカ？」

「ああ。本当は陛下たちにリーナを会わせるだけで帰る予定だったのだが、呼び出しが掛かった。なるべく早く戻るから、その間リーナの遊び相手をしてもらいたいんだ」

「お、俺たちにできるんスか？」

男たちは戦慄した。

というのも、リーナというのは上司の愛娘。今父親の腕に抱かれている、金の巻き毛を持った女の子である。上司が目に入れても痛くないほど溺愛しているということは、皆もよく知っている。

「リーナには言い聞かせている。それに、かんしゃくを起こすこともないし、ままごと遊びが好きだから一緒に遊んでやれば喜ぶ。何かあったときのためにレイナの精霊も借りているからな」

「そ、そうか……」

「悪い、だがおまえたちにしか頼めそうになくてな。……何かあったらミーナに言ってくれ」

上司がそう言った瞬間、彼の足下に猫型の精霊が現れた。茶色の縞を持つ、なかなか愛らしい顔つきの猫である。

だがそれを見たたん、数名の男がゲツと悲鳴を上げる。

レイナ　上司の妻で、皆の同僚でもあるレイナ・アジエントは現在、育児のための休職中。一歳になったばかりの息子につきつきりで、職場には姿を見せない。そんな彼女だが、珍しくも二匹の精霊を従えている。用事があれば精霊を遣わしてくれるし、精霊も子供の面倒をある程度は見てくれるそうだ。

だが、二匹の精霊は性格がかなり違う。鳥形精霊ティルはそこそこ愛想がいいが、この猫型精霊ミーナは非常に気まぐれで、非協力的だ。レイナや彼女の家族に対しては愛想を振りまくが、それ以外に関しては非常にぞんざいになる。男たちも今まで、ミーナに何度無視されて何度馬鹿にされたように見下ろされたことが。

案の定ミーナは上司の足下にはスリスリするし、「みーな！」と手を伸ばしたりミーナには愛想よくニヤンと鳴くが、男たちにはちらりとも視線を寄越さない。協力する気はゼロのようだ。

だが、上司は皆の尊敬する部隊長。普段は部下に無理強いなんて絶対にさせない彼の頼みだから、断るわけにはいかない。

「お、おっし！　今こそ第四部隊の力の見せ所ッスね！」

「了解、隊長！　お嬢ちゃまは俺たちにお任せくだされ！」

「すまないな、頼む」

「紅の若獅子」と呼ばれる上司は、殊勝に頭を下げた。

上司が慌ただしく部屋を出て行った後、しばらくの間、部屋には妙な沈黙が流れた。

来客用のソファにちょこんと座るのは、リーナ。きちんと両手をそろえて膝の上に重ね、小首を傾げて辺りを見回している。その隣には、丸くなったミーナが。男たちには尻を向けており、相変わらず協力する気はないようだ。

そして、そんなソファを取り囲むのは、近衛騎士団第四部隊の面々。多少の年齢差や体格差はあれど、誰もがいい年の男である。普段ならば子どももいる者もいるのだが、今日に限ってこの場にいるのは独身者ばかり。

「……どうしよう?」

「どうしようって、そりゃあ……遊び相手になるんだろ?」

「えーっと……リーナちゃん?」

でかい体を縮めて作戦会議する騎士たち。名前を呼ばれたリーナは面を上げ、すでに将来有望な兆しに見える愛らしい顔をゆるめる。

「はい! リーナ・エージェント、三さいです!」

「お、おう! 俺はモーリス・グレイ!」

「おとしは?」

「……さ、さんじゅういつさい」

「さんじゅ……？ おとうさまと、どっちがうえ？」

「お、俺の方が上です……」

そんな感じで、自己紹介が行われる。リーナはまだ桁の多い数字がよく分からないらしく、年齢に関しては「父親であるヴェイン・アジェントより上か下か」で自己申告することになった。

ふわふわした金色の髪に、天使のように愛らしい顔立ち。それだけならば純ベルフォード人の貴族の令嬢のようだが、彼女の目は宵闇のような漆黑だった。

髪や顔立ちは父親に、目は母親に似た、伯爵家の令嬢。噂では、同年であるジュリアン王子の婚約者候補に挙げられているとか。それだけの姫君を、上司であるヴェインは自分たちに預けてくれた。部下を信頼していなければ、いくら精霊をつけているとはいえど愛娘を預けたりはしないだろう。

俄然やる気がわき、騎士たちは自分たちにできる限りの笑顔でリーナに声を掛ける。

「おっし！ それじゃありーナちゃん、お兄さんたちと何をして遊ぶのか？」

「木登り？ かけっこ？ 高い高いもできるぞ！」

「リーナ、おままごとがしたい！」

リーナに提案され、そういえば先ほど、上司もそのように言っていたと思いだした。

おままごと、と聞いた騎士たちは顔を見合わせる。

「おままごと……おまえ、したことがある？」

「ない。つてか、おままごとして何をすればいいんだ？」
「リーナちゃん、俺たちはおままごとして何をすればいい？」
「えっとね、リーナがおかあさまやくをするの」

自分の提案が通って嬉しいのか、リーナはミーナを抱きしめて目をきらきら輝かせている。

「いつもはね、おとうさまがおとうさまやくなの。でも、おとうさまはおるすだから、おとうさまやくがほしいの」

「お父様役……つまり、リーナちゃんの旦那様役か」

そうしてまたしても、顔を見合わせて相談。

「……誰がする？」

「なんか、下手に父親役をしたら隊長にぶん殴られそうなんだけど」
「だよな……でも、誰かやらないとおままごと、できないんだろ？」

そうして、厳正なるくじ引きの元、一人の騎士が「お父様役」に選ばれた。

「……あー、どうも、ロベルトです。よろしく、リーナちゃん」
「リーナちゃんじゃないの、『リーナ』なの」

まさかの呼び捨て命令である。まだ若いロベルトはかなり迷ったあげく、「……リーナ」と呼んでそのままうつむいてしまった。

その後は、他の役者決めである。

「いつもは、おかあさまがじじよやくをしてくれるの」

「じじよ？ ……ああ、侍女な」

「うん！ そのおにいちゃん、じじよやくねー！」

「ええつ、僕ですか!？」

リーナに指名されたのは、いつも事務仕事を行っている青年騎士。おそらくこの中で一番線が細いから選ばれたのだろう。

まさかの女性役におどおどする青年と、とたん大爆笑する他の騎士たち。

「あつははは! よかったな、おまえ!」

「おまえ、女顔だもんな! いけるいける!」

「くつ、他人事だからって……!」

彼は顔を真つ赤にして仲間たちを睨み上げるが、リーナの命令は絶対である。かなり悩んだあげく、「……かしこまりました、リーナ様」と侍女の役にシフトチェンジした。

満足そうなりリーナは、続いて膝の上のミーナの背中をなでる。

「それじゃ、ミーナはねこさんやくね」

「まんまだな」

「えつと、それじゃあ俺たちは何をすればいいんだ?」

父親役一人、侍女役一人。まだまだ騎士たちは残っている。てつきりペット役でもさせられるのかと思ったら、ミーナが「ねこさんに任命されてしまった。」

質問されたリーナは、ぱちくりと大きな目を瞬かせる。そして自分を取り囲んで指示を待つ十数名の男たちを見回し、満面の笑みで告げた。

「……あかちゃんやく!」

かくして近衛騎士団第四部隊の詰め所の床に、いい年をした大の

男たちがびったんびったんとのたうち回ることになるのであった。

「そろそろおちゃにしましょう、あなた」

「ありがとうございます……じゃないや、ありがとうございます、リーナ」

「奥様、お茶をお持ちしました」

「ええ、ありがとうございます。じゅんびをしてちょうだい」

リーナ主導のおままごとは、なかなか様になっている。最初は渋っていた二人の騎士も、「あいつらよりはました」と、かつて自分たちを馬鹿にした騎士たちを尻目に、すっかり役になりきっている。

204

「きょうのおちやのしゆるいは、なあに？」

「エスターニヤから輸入……えっと、エスターニヤから持ってきた、果実入りの紅茶です。お肌がいいそうですよ」

「まあ！ うれしいわ！ あなたのみましよう！」

「ああ、頂こうかな」

ソファに並んで座り、ほっこりとした午後のティータイムを演出するリーナたち。

そして、赤ちゃん役で床を転げ回る十数名の男たち。

「かあちゃん、飯くれー」

「かあちゃんじゃありません、おかあさまです」

「悪い、お母様、飯をくださーい！」

「あかちゃんはまだ、おはなしができないせつていです」
「……ウツス」

なかなかシユールな光景ではあるが、普段上司夫妻がどのように生活しているのか、よく分かる。

「あなた、きょうはあかちゃんたちがね、すこしだけあんよができるようになったのよ」

「バブーだぜー」

「おぎゃー」

「そ、そうか。あの子……たちも、大きくなっただな」

「ええ、せいちようがたのしみね」

そう言つて笑うリーナ。顔立ちは上司に似ているのに、微笑む姿は母親に似ている。

きっとレイナはこうして、リーナの弟の成長を毎日ヴェインに語っているのだろう。リーナはそんな両親の姿を見て育ち、こうしておままごとをする時にも反映させている。

父親役と侍女役の二人は、顔を見合わせる。そしてくすつと笑いあつた、その時

「すまなかつた、今用事が終わった」

詰め所のドアが開き、隊長ヴェイン・エージェントが戻ってきた。小脇に書類の束を抱えているので、デスクワークでも頼まれたのだろう。

彼はまず、ソファに座る愛娘に視線を向けた。そしてその姿に頬を緩ませた直後、床でびつたんびつたんと跳ね回る部下たちを見、その表情が凍り付く。

「おぎゃー……隊長、俺たち赤ちゃん役なんッス」

「そうだバブー。頑張っているんだバブー」

「……すまん。それから……ありがとう」

上司は神妙な顔で、礼を言った。

ヴェインの用事が終わったので、リーナのおままごとも終了。

「今日はリーナの相手をしてくれて、助かった」

リーナを抱き上げたヴェインが改めて言う。リーナは遊んでもらって満足したのか、父親の腕の中ですやすや眠っている。

「これも時間外業務になるだから、皆には俺の方から特別手当を割り振って」

「いやいや、何言ってるんすか、隊長！」

部下たちの中から声上がり、ヴェインは目を丸くする。

詰め寄ってきたのは、一人だけではない。皆、わっと押し寄せてくる。

「んなことないッスよ！」

「そうそう、リーナちゃんはいいい子だったし！」

「そ、そうか。そう言ってくれて助かる」

ヴェインは最初こそ驚いたようだが、やがてふつと笑顔になった。

「今日は本当にありがとう。今度、もし都合が良さそうならレイナも、ディランを皆に会わせたいと言っていた。よかったらあいづらの顔見てやってくれ」

「おっす！ いつかディラン君とも遊べることに、楽しみにしてるッスよ！」

その後、リーナを自宅で眠らせてやりたいとのことでヴェインは足早に去っていった。

父娘が去った詰め所は、一気に静かになる。

「……なんか、感慨深いよな」

「そうだな……あの隊長、立派に父親の顔になって」

「これも、レイナさんのおかげだな」

そう言って騎士たちは顔を見合わせ、あはは、と笑い声を上げた。

近衛騎士団第四部隊詰め所は、今日も平和だった。

第四部隊、子守をする（後書き）

侍女を付けねばいいんじゃないの？

護衛は？

といつシッコミは不要！

三人目の兄

「ははは、まさか私よりも先に、弟が嫁をもらうことになるとはな」

ワイングラス片手ににこにこ語る青年は、向かいの席に座る玲奈のグラスにも酒を注ぐ。

「まあ、飲むといい」

「はい、ありがとうございます、アジエント伯爵」

玲奈は笑顔で答え、ワインの芳醇な葡萄の香りを楽しむ。

地球にいた頃は、たびたびチューハイを飲んでいた。ビールは匂いがだめだったので、舐めただけでギブアップした。その頃から、一度高級なワインというものを飲んでみたいとは思っていたのだ。

アジエント伯爵が自領から持ってきたのは、ヴェイン曰く「よくこないいいものを持ってこられたな……」というレベルのものらしい。ワインは酸っぱい、という思いこみがあったのだが、伯爵が持ってきたワインは甘くて、酸味も弱めだった。

今日、玲奈は王都のアジエント家の屋敷にお邪魔して、婚約者とその兄の三人で結婚式や今後のことの打ち合わせをしたところだった。弟の晴れ舞台だからと、基本的に面倒くさがりなアジエント伯爵も一念発起して何かと世話を焼いてくれる。玲奈は領地とか貴族の職務だとか、そういうのにまだ不慣れであるため伯爵の手助けは非常にありがたい。

「アジエント伯爵。何から何までお世話になっております」

「俺からも礼を言う。兄上、忙しいのに俺たちのために時間を割いてくれてありがとう」

玲奈とヴェインが礼を述べると、空になったボトルを使用人に渡した伯爵はからからと陽気に笑った。

「いや、これも兄のつとめだ。私の方こそ、今まであまりヴェインに構ってやれなかったからな。今さら　と言われても仕方ないだろうが、こんな時くらいは兄として私を頼ってくれ」

「何を言っている。兄上は子どもの頃から俺のことを気に掛けてくれていた。親父が死んで爵位を継ぎ多忙になってからも、まめに連絡を取ってくれたではないか」

ヴェインが真面目な顔で反論する。伯爵はそんな弟を柔らかく見つめ、くつと小さく笑う。

「……ふふ。そう言ってくれるなら助かるよ」

「何か、私からもお礼ができたらいいのですが」

「レイナ嬢、私は君と弟が幸せになってくれたらそれで十分だよ」

「ありがとうございます。でも、何か私にできることがあればおっしゃってくださいね」

伯爵は飄々としており何を考えているのかよく分からない人物ではあるが、玲奈も今まで世話になってきた。ヴェインがメリダ・バドラインによって操られていたときも、伯爵は玲奈の味方になってくれた。考えてみれば、彼に言葉で礼は言っても具体的に玲奈の方から何か働きかけたことはない。

すると、伯爵はグラスを置き、ぽんと左手に右手の拳を打った。

「……それでは、一つ私の方からお願いしたいことがあるんだ」

「おい、兄上。レイナに無茶ぶりをするんじゃないぞ」

「大丈夫ですよ、ヴェイン様。……伯爵、何なりとおっしゃってください」

「はいそこ！ それだよそれ！」

いきなり声を張り上げられ、玲奈だけでなくヴェインもきよとんとする。

「レイナ嬢、君は私のことを『伯爵』って呼ぶね。それがどうも気になっていてね。せつかく私たちは義理とはいえ兄妹になるのだから、もうちょっと砕けた呼び方をしてもらえないかな？」

「砕けた呼び方……ですか？」

伯爵の指摘を受け、玲奈はしばし考え込む。

（なるほど……要するに「伯爵」という階級ではなくて「兄」と呼ばれたらいいことね）

玲奈にはかつて、この世界における「兄」がいた。

イサーク・フェスティーユ。今では玲奈の「弟」になってしまっただが、玲奈は彼のことを「お兄様」と呼んでいた。自分の正体がばれてからも、「レーナ・フェスティーユ」という人物である限りは「お兄様」として接していたのだ。

「……かしこまりました。では、具体的にどのようなようにお呼びすれば？」

「何でも？ ヴェインは私のことを『兄上』と呼んでいるな？」

「そうだが、『兄上』はあまり女性が使う言葉ではないな。一般的なのは おまえもイサーク・フェスティーユに対して呼んでいた

だろうが、『お兄様』だろう」

「お兄様　ふ、ふふ。なんだかとってもゾクゾクする響きだねえ」

「変なのに目覚めるようなら、別の呼び方にしてみらうぞ。……そういえば、レイナ。おまえ、実の兄がいるのではないか？」

「え？」

ヴェインに問われ、兄弟のやり取りを聞く側になっていた玲奈は目を瞬かせる。

「実の　それは、地球にいる兄のことですね」

「ああ。……もしよかったら、参考としておまえが実兄を呼ぶときの名を教えてほしいな」

「ああ、それはいい。実の兄君と同じように呼んでくれたら、より親近感が沸きそうだな」

ヴェインの言葉に伯爵も同意する。

確かに、玲奈が実兄と同じように伯爵を呼べば　もう二度と会うことのない兄のように伯爵を慕えるかもしれない。考えてみれば、実兄とアジエント伯爵は同じくらいの年頃だ。見た目も性格も全然違うが、「お兄様」よりも親近感が沸くだろう。

(……いや、だけどね)

玲奈は苦笑いし、首を横に振った。

「……呼び名はあるのですが、その、地球での私は一般庶民でして、兄の呼び名も俗なものなのです。さすがに義兄になるとはいえ、伯爵をそのようにお呼びするのは少し」

「俗な　か。いや、私は構わんぞ？」

伯爵はむしろ興味を引かれたように、テーブルに身を乗り出してきた。ヴェインとそっくりな美貌が迫り、紫の目がきらきら輝いている。

「遠慮せず、教えなさい」

「……はあ。その、品も何もないですよ?」

「私がいいと言っているんだ。ああ、何なら今から私を実の兄だと思っ、気楽に話しかけてみてくれないかな?」

「……えーっと」

「……すまん、レイナ。嫌でなければいいから、兄上に付き合っ、てやってくれ」

隣の席でヴェインが気遣わしげに言ってくる。もう二度と再会できない実兄のことを思うと玲奈が辛い思いをするかもしれないと、じわじわと罪悪感が湧いてきたのだろう。

玲奈はそんなヴェインに微笑みかけ、彼の手を握る。

「……大丈夫ですよ、ヴェイン様。それでは伯爵、少々物言いが雑になるかもしれませんが、よろしいですか?」

「ああ、どうぞどうぞ。話題は何でもいいよ」

「分かりました。では……」

玲奈はこぼんと咳払いした後、アージェント伯爵に向き直る。

金髪に紫の目。優しげな美貌の彼の顔に、血を分けた兄の姿を重ね合わせ

「……兄さん、ワインおいしかったよ。兄さんと一緒に酒を飲むなんて、久しぶりだね。おいしいワインを持ってきてくれて、ありがとう」

玲奈！ うまいチューハイ買ってきてやったぞ！ 飲むぞ！
そこに座れよ！

アジエント伯爵の目が見開かれる。隣でヴェインが、息を呑んでいる。

レイナはふうつと息をつき、ほんのりと熱を孕む頬に手を当てて、あははと笑った。

「……すみません。やっぱりおかしいですね。私、今まではこんな喋り方だったのですよ」

「……はは、そうか。いや、少し驚いたけれど、君の新しい面が見られたな」

アジエント伯爵は緩く笑い、今までにないほど優しい眼差しで玲奈を見つめてきた。

「無茶言って悪かったな」

「いえいえ。それじゃあ、伯爵のことはその、兄さんと？」

「いや……普通にお兄様、などでいいよ」

伯爵は緩やかに玲奈を遮り、軽く目を伏せた。

「……さっきの言葉を聞いて思った。君が『兄さん』と呼ぶのは、
たった一人 君の実兄だけであるべきだとね」

「伯爵」

「本当はね、レイナ嬢。私が君の実の兄君の代わりになれたら、
なんてことをぼんやり思っていたんだ」

息を呑む玲奈を、伯爵はまぶたを開けてじっと見つめた。

「でも、だめだな。もちろん、『兄さん』って気楽に呼んでもらえたら嬉しいさ。でも、私じゃあ君の本当の兄君の代わりにはなれない。だから、私のことは『お兄様』で十分だ。……思い出を増やすことはあっても、思い出を上書きするべきではないからな。今、そのことをまざまざと実感したよ」

玲奈は目を瞬かせ、緩く微笑む伯爵を見つめ返した。

(……そっか、伯爵は私が寂しくならないように提案してくださったのか)

「……ありがとうございます。そのお気遣いだけで、私は十分幸せです」

「レイナ嬢……」

「やはり、伯爵と兄は違います。だから 実兄のように接するのは難しいかもしれませんが、ヴェイン様のお兄様としてこれからもよろしく願います。……お兄様」

「……すまん。ありがとうございます、レイナ」

成り行きを見守っていたヴェインが、玲奈の肩に手を回して抱き寄せてくる。玲奈は婚約者のぬくもりに身を任せつつ、伯爵に微笑みかけた。

「そういうわけで、口調はこのまま、呼び名はお兄様、ということで行かせてもらいますね」

「……ふふ、了解だよ。いやあ、しかし君のような若いお嬢さんにお兄様』と呼ばれるのは、なんだかとてもゾクゾクするなあ」

「ちよつ、兄上！」

「ははは、そう睨むな」

ヴェインが玲奈を抱き寄せ、伯爵にうるんな視線を投げかける。伯爵は飄々と弟の眼差しをかわし、使用人に新しいワインを持ってくるよう命じる。

玲奈はくすつと笑い、グラスに残っていたワインをのどに流し込んだ。

（そっか、私は両親だけでなく、たくさんの兄にも恵まれたんだな）

子どもの頃から一緒に育った、実の兄。

今は弟になってしまった、イサーク。

そして新たな義兄となる、アジエント伯爵。

（私は……幸せ者だな）

ヴェインと伯爵が、ワインの銘柄が何かでもめている。そんな光景が、愛おしい。

玲奈はヴェインの肩に身を預け、まぶたを伏せた。

とろりとした微睡みの中、実兄がチューハイの缶を持って笑っている姿が見えたような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<https://ncode.syosetu.com/n8704cq/>

異世界で幼女化したので養女になったり書記官になったりします 番外編置き場

2018年1月11日14時08分発行